兵庫県　2023年度

NIE実践報告書

「教育に新聞を」実践　高等学校編

◇多文化共生への橋がけ
～新聞記事のやさしい日本語書き換えを通して～　（兵庫県立伊川谷高等学校）

◇新聞活用と総合学科の学び　（兵庫県立須磨友が丘高等学校）

◇新聞を通しての社会課題の発見と課題解決能力の育成　（兵庫県立加古川西高等学校）

◇探究活動に資するNIE　（神戸市立葺合高等学校）

◇新聞から今とこれからを学ぶ　（神港学園高等学校）

◇新聞を身近に ～見る・読む・つくる～　（クラーク記念国際高等学校連携校
専修学校クラーク高等学院芦屋校）

◇社会と自己をつなぐNIE　（兵庫県立有馬高等学校）

◇新聞を活用した「地域社会学」への取組み　（兵庫県立西宮高等学校）

◇「教育に新聞を」事始　～新たな発見へ～　（兵庫県立尼崎高等学校）

◇ NIE×SDGs×総合的な探究の時間　（兵庫県立三木北高等学校）

「教育に新聞を」実践　中学校・高等学校編

◇NIE活動を通した社会的事象への多角的考察と探究的学習の推進　（甲南高等学校・中学校）

「教育に新聞を」実践　特別支援学校編

◇新聞を活用して「見る・知る・聞く・伝える」力をつける
（兵庫県立のじぎく特別支援学校）

兵庫県ＮＩＥ推進協議会

はじめに

兵庫県NIE推進協議会
会長　竹内　弘明

2023年度の実践報告書をお届けいたします。

各実践校の皆様方にはお忙しい中、１年間の取り組み、そして貴重なご実践をまとめていただき、誠にありがとうございました。この実践報告書は2023年度の実践校の貴重な実践の記録です。どうぞ今後の取り組みの参考にしていただければと思います。

23年度は５月には新型コロナ対策が大きく転換し、社会経済活動や教育現場に日常が戻ってきました。学校行事もほぼ平常どおりに行われるようになり、学校には子どもたちの笑顔があふれるようになりました。

一方で、本年は元日の16時10分、能登半島で大地震が発生するという痛ましい年明けとなりました。震災によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。そして１日も早い復旧復興をお祈り申しあげます。

また、日本経済は緩やかに回復していると言われていますが、円安基調の中、日本のＧＤＰはドイツに抜かれて４位に後退しました。大企業の多くが賃上げをするも中小企業はまだまだ厳しく、賃金上昇が物価上昇に追いつかない状況が続いています。このように、国内経済は依然厳しい状況が続いています

世界ではウクライナとロシアの争いに加えて昨年イスラエルとガザ地区の争いが再燃し、悲惨な状況が続いており、１秒でも早い終結が望まれます。

こうした動きを新聞は私たちに伝えてくれています。テレビやネットでも報じてくれますが、新聞の持つ価値は他のメディアよりも優れていると思います。人間性や社会性、地域性、記録性、国際性などニュースとしての価値判断のもと、責任を持って報じてくれた記事は、何より手元に残ります。その記事は、学校において子どもたちのさまざまな学びのツールとなります。小学生から高校生までその取り組みはさまざまです。こんな活用の仕方があるのか、と驚かされることもしばしばです。そうした各学校、先生方のアイデアが集まっているのがこの記録集です。

コロナ禍で一気に進んだ教育DX（デジタルトランスフォーメーション）、NIEの活動においてもICT機器を活用する取組が増えています。

これからのAI時代、α世代（デジタルネイティブ世代）がどのように新聞と向き合っていくのか。α世代ならではの新聞の活用方法とはどのようなものか。本年の実践発表においても新しい時代のNIEを模索してくださっている発表もありました。

今後のNIEの取り組みは難しくもあり、楽しくもあり。

俳人松尾芭蕉曰く「不易を知らざれば基(もとい)立ちがたく、流行を知らざれば風(ふう)新たならず」

これまで取り組んできたNIEの活動も決して色あせるものではありません。紙の新聞をベースにした取組、その「不易」の活動とともに、新しい時代や社会の要請である「流行」にも柔軟に対応しながら、新たなNIEの活動が創造されていくことを楽しみにしています。

最後になりましたが、改めて、平素からNIE活動に取り組んでくださっています各学校、報道各社、各行政委員会の皆様方に心から感謝を申しあげますとともに、今後とも引き続きご支援を賜りますようお願い申しあげます。ありがとうございました。

＜目 次＞

巻頭言　「 はじめに 」　兵庫県 NIE 推進協議会会長　竹内　弘明……1

2023 年度兵庫県 NIE 実践指定校　……4

【小学校】

社会的事象に対する見方・考え方を広め
主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる　神戸市立白川小学校……6

新聞に慣れ親しむ子供たちの育成
～６年生の年間カリキュラムと NIE～　神戸市立横尾小学校……10

新聞を楽しく読もう　姫路市立大塩小学校……14

新聞を身近に感じ、学習とのつながりを大切にする　神戸市立鶴甲小学校……18

新聞活用による「書く力」の向上と心豊かな児童の育成　姫路市立網干西小学校……22

【小・中学校】

情報活用能力の育成～新しい時代の NIE を模索して～　姫路市立豊富小中学校……28

【中学校】

新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る　尼崎市立南武庫之荘中学校……34

新聞の良さを伝える　神戸市立丸山中学校 西野分校……38

新聞制作を通して、「伝える力」の育成を図る　加古川市立加古川中学校……42

自分事として捉え行動できる生徒の育成　南あわじ市・洲本市組合立広田中学校……46

世界や日本の現状を把握し「これから」を考える　神戸市立高倉中学校……50

新聞を活用した自己表現力の育成　明石市立高丘中学校……54

NIE ノートを通して、主権者としてのまちづくり
～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～　西宮市立浜脇中学校……58

【中学校・高等学校】

NIE 活動を通した社会的事象への多角的考察と探究的学習の推進
甲南高等学校・中学校……64

【高等学校】

多文化共生への橋がけ
～新聞記事のやさしい日本語書き換えを通して～　兵庫県立伊川谷高等学校……70

新聞活用と総合学科の学び　兵庫県立須磨友が丘高等学校……74

新聞を通しての社会課題の発見と課題解決能力の育成　兵庫県立加古川西高等学校……78

探究活動に資する NIE　神戸市立葺合高等学校……82

新聞から今とこれからを学ぶ　神港学園高等学校……86

新聞を身近に ～見る・読む・つくる～　クラーク記念国際高等学校連携校
専修学校クラーク高等学院芦屋校……90

社会と自己をつなぐ NIE　兵庫県立有馬高等学校……94

新聞を活用した「地域社会学」への取組み　兵庫県立西宮高等学校……98

「教育に新聞を」事始　～新たな発見へ～　兵庫県立尼崎高等学校……102

NIE×SDG s ×総合的な探究の時間　兵庫県立三木北高等学校……106

【特別支援学校】

新聞を活用して「見る・知る・聞く・伝える」
力をつける　兵県立のじぎく特別支援学校……112

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

新聞を開いてみよう ～社会とつながる NIE～　愛徳学園小学校……114

【2023 年度兵庫県ＮＩＥ実践指定校】

通常枠 25 校（2025 年 NIE 全国大会神戸大会に向けて 5 校増
◆は継続校　◇は新規校）兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校 1 校

〈通常枠〉小学校５校

◆神戸市立白川小学校	神戸市須磨区白川台
◆神戸市立横尾小学校	神戸市須磨区横尾
◆姫路市立大塩小学校	姫路市大塩町汐咲
◇神戸市立鶴甲小学校	神戸市灘区鶴甲
◇姫路市立網干西小学校	姫路市網干区浜田

〈通常枠〉小・中学校１校

◇姫路市立豊富小中学校	姫路市豊富町御蔭

〈通常枠〉中学校７校

◆尼崎市立南武庫之荘中学校	尼崎市南武庫之荘
◆神戸市立丸山中学校西野分校	神戸市須磨区大黒町
◆加古川市立加古川中学校	加古川市加古川町備後
◆南あわじ市・洲本市組合立広田中学校	南あわじ市広田中筋
◇神戸市立高倉中学校	神戸市須磨区高倉台
◇明石市立高丘中学校	明石市大久保町高丘
◇西宮市立浜脇中学校	西宮市宮前

〈通常枠〉中学校・高等学校１校

◇甲南高等学校・中学校	芦屋市山手町

〈通常枠〉高等学校 10 校

◆兵庫県立伊川谷高等学校	神戸市西区伊川谷町長坂
◆兵庫県立須磨友が丘高等学校	神戸市須磨区友が丘
◆兵庫県立加古川西高等学校	加古川市加古川町本町
◆神戸市立葺合高等学校	神戸市中央区野崎通
◆神港学園高等学校	神戸市中央区山本通
◆クラーク記念国際高等学校	芦屋市公光町
◇兵庫県立有馬高等学校	三田市天神
◇兵庫県立西宮高等学校	西宮市上甲東園
◇兵庫県立尼崎高等学校	尼崎市北大物長
◇兵庫県立三木北高等学校	三木市志染町青山

〈通常枠〉特別支援学校 1 校

◇県立のじぎく特別支援学校	神戸市西区北山台

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校１校

愛徳学園小学校	神戸市垂水区歌敷山

【 小 学 校 】

社会的事象に対する見方・考え方を広め
主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる

神戸市立白川小学校　　校長　　長﨑　康子
主幹教諭　　勝田　耕介

１　はじめに

本校は1873(明治6)年に白川村で創立し、その後ニュータウン建設に伴い校舎が移設され、2023年度には創立 150 周年を迎えた歴史ある学校である。校区内には、ニュータウンの街並と豊かな自然の両面がある。地域の方は、本校の教育を支えようという熱い思いがあり協力的である。

本年度は、15クラス、全校生３７５名、各学年２クラスであり、子供たちは幼小より互いのことを知っている。言葉を十分に交さなくても分かってくれるだろうという安心感があるためか、表現力が十分とは言えず、トラブルになることも多い。また、多様な考え方に触れる機会も少ない。

子供たちに、相手に分かるように言葉で伝える力や、多面的な見方・考え方、将来たくましく生きていく力を育てたいということが教師の願いである。

そこで、指定校２年目は、「新聞を通して社会的事象に対する見方・考え方を広め、主体的に考え判断する力の育成をはかる」こと、また言語活動の充実を研究テーマにしている。校内研修とも関連させ、「語彙力を高め、適切な文章構成と表現力で伝える力の育成をはかる」ことをめざし取り組むこととした。

２　実践内容

（１）新聞を手に取って

①新聞に親しむ

新聞は、５年生の教室前の廊下に置き、いつでも手に取れるようにした。休み時間などに興味のある記事を読む子供が徐々に増えていった。

低・中学年においては、コウノトリ、宇宙、オリンピック・パラリンピック、SDGｓなど教科学習に関する記事や子供たちの関心のある記事などを教室に常掲するようにした。

新聞を眺めながら友達と会話する様子も見られ、新聞を読むことへの関心は高まったと感じる。

②新聞を比べる

５年生は、国語科と社会科の学習の中で、同じ日の４社の新聞の一面を比較した。新聞によってトップ記事が違う。見出しも違う。トップ記事が占める割合も違う。何日間か比較することで、各社それぞれに記事の取り上げ方に違いがあり、意図をもって掲載していることに気付いた。

そこから、「実際に記者のお話を聞いてみたい」「どんな意図をもって記事を書いているのか知りたい」という思いがふくらんだ。そこで「記者派遣」の学習につないでいくこととした。

（２）記者派遣事業　～ニュースって楽しい！～

神戸新聞社 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーに来ていただき、５年生を対象とした学習を行った。

「新聞記者ってどんな仕事？」をテーマに仕事内容についてお話を聞いた。また、よい記事の書き方を教えていただいた。「５W１H を押さえる。キーワードを逃さない。」これは、普段の学習や生活の中でも活かせることであり、本校の研修テーマ「言語活動の充実」にもつながることである。相手からうまく話を聞きだすことの重要性についても学んだ。

次に、実際に三好さんが担任の先生にインタビューをし、次々に話を引き出す様子を見学した。カメラマン体験もさせていただき、「下から見上げるように撮るとよい表情が写せる、手を使って

いるところを撮ると写真に動きが入り、いきいきした写真になる」と教えていただいた。

休憩時間中に三好さんがこのインタビューを記事にまとめられるという早業に子供たちは驚いていた。写真も入り、まさに新聞記事の出来上がりである。

早速、自分たちも記事作りに取り組んだ。まず、インタビューをし合う。自分が面白いと思うことを掘り下げて聞き出していた。自分のパソコンで写真を撮り、記事もパソコンを使ってまとめた。本物の記者の方に添削していただけたのも貴重な体験であった。

最後に、実際に作った記事を見合いながら振り返りをした。「友達の意外なところを知れて面白かった。」「聞くのは楽しいが、それを短い言葉で分かりやすくまとめるのは難しい。」という感想が出た。

新聞記者の方の苦労とプロの仕事のすばらしさを体感できた学習であった。

（3）新聞を作ってみよう

４年生児童は、国語「新聞を作ろう」の学習のなかで、班ごとに模造紙１枚の壁新聞を作成することとなった。この学習は、学校司書が中心となって進めた。

まず、あらかじめ壁一面に子供向け新聞を貼り出した。できるだけ写真が多く掲載されているものを選ぶようにした。児童が新聞を読む時間をしばらく取ったうえで、関心のある新聞記事を選ばせ手に取らせた。

次に、班ごとに持ち寄った記事を並べ、どのような１枚に仕上げていくかコンセプトを話し合い、新聞のタイトルを考えた。「今年活躍した人新聞」「命は大切新聞」「自然災害新聞」などなど多様なタイトルの新聞が並んだ。そして、記事を切り抜き、模造紙上に並べて割付を考えた。構成が決まったら、見出しを付けたり、補足説明を入れたり、色を付けたりと工夫して書き加え、壁新聞を仕上げていった。

「大見出し」「小見出し」をどのような言葉にするか、班で随分話し合っていた。インパクトのある短い言葉を考えることは簡単なことではない。考える際には、実際の新聞を大いに参考にすることとなった。

最後に、班ごとに出来上がった壁新聞を見せながら工夫したところを発表し、それぞれの新聞のよさを共有した。

出来上がった壁新聞を見合うことでどのような新聞が見やすいか改めて気付くことができた。それと同時に、実際の新聞は、大事な記事を大きくしたり、読みやすく割付をしたりと工夫されて作られていることにも気付くことができた。自分たちで新聞作りをしたからこそ実感することができた気付きであったと思う。

（4）震災学習

①写真パネルを見て

全校生が神戸新聞社の震災の写真を見学した。１年生にとっては初めて見る写真が多く、担任が「このときはね…」と体験も交えながら１枚１枚説明した。子供たちは多くのことを感じ取りながら黙って写真に見入っていた。

②記者のお話を聞いて～防災学習～

神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーが講師を務め、阪神・淡路大震災の体験談を交えながら防災について考える学習を行った。講話直前に起こった能登半島地震の写真を見せてくださった。記者の方が苦労して撮られた貴重な写真であり、子供たちは写真とお話に引き込まれていた。阪神・淡路大震災の写真と非常によく似ていることに驚いた。どちらも大きな被害が出た大震災であることが理解できた。

大震災当日、神戸・三宮の本社で宿直勤務だった三好さんは当時の写真を見せながら、「激しい揺れで窓ガラスが粉々に吹き飛んだ」「発生時刻に起きていたので助かったと思う」と振り返り、「あの日から 29 年がたとうとしている。大切なのは記憶を語り継ぐことだ」と話された。

また、「震災直後の取材では辛い現実もあったが、『救助された』『新しい命が芽生えた』『小学生が避難所でボランティア活動をしている』『復興住宅ができた』など、みんなが希望をもてる記事も書いてきた。人々を元気にすることができるのが新聞記者としてのやりがいだ。」とのお話に子供たちは聞き入っていた。「各地で豪雨災害などが相次いでいる。災害知識を身につけないと命を危険にさらすことになる」という点についても強調された。

段ボールベッドを組み立てる体験活動を通して、「冷たい床で何日も寝ることを考えたら段ボールバッドはありがたい。」「思ったよりも簡単に組み立てられて丈夫。段ボールは役に立つなあと思った。」と感じていた。また、新聞紙でスリッパを作る体験活動も行った。履いてみると意外に温かいことに驚いていた。震災時での新聞紙の有効活用方法を学んだ。

学習後に書いた子供たちの感想文には「いつどこで災害が起こるか分からない。備えの大切さを感じた。」「阪神・淡路大震災の被害について知らない人に伝えたい。」と書かれ「命の大切さ」を感じ取ることができた学習であった。

③震災ダイアリーを活用して

阪神・淡路大震災が起こった１月 17 日以降の震災当日からの日々を撮影した写真を毎日掲載する神戸新聞の企画「震災ダイアリー」の記事の切り抜きを、５年生は行っている。記事はスクラップし、子供たちの目に留まりやすい手洗い場の前の壁に掲示している。子供たちは手を洗いながら記事に目を通し､29 年前がどんな状態だったのか、それが何日目になるとどのように復興していったのかを想像している。

時折、帰りの会で記事を取り上げている。３月４日には、不通になった線路の上を自転車で走る子供たちの様子が捉えられていた。「３月になっても、まだ電車が通っていないんだ」「道路は地割れしていて危ないからかな」と驚いていた。

「神戸新聞が震災を記録し続けているから昔の様子が分かる。復興した神戸の人ってすごいと思う。」という感想も出された。29 年前に関心をもつことや防災を日々意識することの重要性を感じる。スクラップは次の５年生に引継ぎ、震災 30 年となる来年の１月 17 日まで続けていきたい。

３　成果と課題

新聞がいつも手に取れる環境にすることで、児童が自然に新聞を目にする機会が増えた。読めない漢字があっても、写真を見たり見出しを読んだりすることで記事の内容はおおまかに分かる。日頃から新聞を目にすることで新聞を読むことに抵抗感がなくなったことは大きな成果である。

震災学習では、実際に震災を経験した方のお話を聞くことで知らなかった事実にたくさん出会うことができた。阪神・淡路大震災の話だけでなく、その後も日本の各地で起こっている自然災害について触れていただいたことで、子供たちは「自分ごと」として災害をとらえることができた。知らなかった「社会」に目を開くことができたと感じる。研究テーマ「新聞を通して社会的事象に対する見方・考え方を広め、主体的に考え判断できる力の育成をはかる」に近づけたように感じる。

また、記事を切り抜いて壁新聞を作成する学習では、どのようなコンセプトの新聞にするか、見出しをどのような言葉にするか、割付をどのようにするかなど、班で話し合う場がたくさんあった。分からないなりにも何とか自分の考えを発信しようとする姿が見られた。研究テーマである「語彙力を高め、適切な文章構成と表現力で伝える力の育成をはかること」においては、まだまだ課題はあるものの、活動を通して少し前進できたと感じている。

新しい学習指導要領のもと「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。記者派遣の学習では、取材とは相手との対話の中から驚きや面白さを聞き出していく活動、つまり主体的に自ら追い求めていく活動であり、それが非常に意義のあることであることを学んだ。自分たちも自ら学び取る学習を進めていきたいという意欲につながった。

教師の工夫次第で、教科学習と新聞をリンクさせることはいくらでもできる。子供たちに社会に目を開かせることを目指すためにも、まずは教師が社会に目を開き、たくさんのことを感じ取り、それを子供たちにどう出会わせるか創意工夫していきたい。

新聞に慣れ親しむ子供たちの育成

～６年生の年間カリキュラムとNIE～

神戸市立横尾小学校　校　長　辻　丈治
主幹教諭　大友　秀一
教　諭　吉川　拓郎

１　はじめに

本校は、神戸市須磨区の横尾山のふもとに位置し、自然豊かな環境にある。全学年２学級、全校児童263名が学ぶ小学校である。

2022年度よりNIE実践校としての取り組みを始め、「新聞に慣れ親しむ子供たちの育成」を研究テーマとし、身近にある新聞を手に取り、毎日のニュースに少しでも興味をもつような子が増えるようにと実践を試みた。23年度はNIE実践指定校の２年目ということもあり、児童の実態と６年生の年間カリキュラムにできるだけ即した取り組みを行った。

２　実践の内容

１学期

（１）国語「私たちにできること」と総合的な学習の時間での取り組み

１学期に、国語の単元「私たちにできること」と、総合的な学習の時間を合わせて、SDGsをテーマに学習に取り組んだ。SDGsがより身近なものになるようにするために、NHKのホームページ（ひろがれ！いろとりどり（nhk.or.jp））から、「SDGsかるた」を活用し川柳を考えたり、朝日新聞社による5･7･5でめざすよりよい未来・小学生「SDGs川柳」コンクールなどにも参加したりして、17の目標と、自分たちでできることを照らし合わせながら学習をすすめた。

単元のゴールとして、学校で自分たちが今できることを考え、模造紙に壁新聞としてまとめることを設定した。壁新聞にまとめることで、グループで一つのものを作り上げる達成感とともに、各記事の担当者を決めることで、各記事に責任をもって取り組むことができた。この活動を通して、普段何気なく目にしている新聞も、記事ごとに担当者がいることを、身をもって知ることができたり、自分たちが環境に対して、できることを具体的に考えたりすることができた。

（２）社会科「大昔のくらしと国の統一」のまとめとしての新聞の作成

社会科「大昔のくらしと国の統一」のまとめとして、校外学習（五色塚古墳、兵庫県立考古博物館）で見学してきた内容や、見学先でいただいた資料を用いて、児童各自で新聞を作成した。インパクトのある見出

しや図やクイズなどの工夫を入れる大切さに気付いた。

２学期

（１）新聞に慣れ親しむ

～いつでもみられる新聞コーナーの設置～

２学期から、新聞を６年生教室の前に置き、休み時間などにいつでも手に取れるようにした。新聞や記事に興味をもつ活動にするために、１学期の単元である国語「気になるニュースを集めよう」を２学期に実施し、気になる新聞の記事を朝のスピーチで紹介する活動に取り組んだ。

新聞の中の気になる記事を、PC を用いて写真で撮影し、その記事についての感想をスカイメニューの発表ノートでまとめ、朝のスピーチの資料として活用することで、ICT 機器の活用とも相乗効果を得ることができた。

また、単元の中で著作権や出典の大切さをおさえ、参考記事を明らかにするよう指導した。

（２）新聞記者との連携授業

９月８日(金)に毎日新聞社から派遣講師として栗田記者に来ていただきニュースの見方や、見出しの工夫などについてお話しいただいた。

【子供たちの感想より】

・私は、新聞をあまり見てこなかったけど

とても面白そうだなと思いました。なぜなら文章を読むのが苦手な私でも、見出しでどんな記事か分かるので自分の好きな記事をすぐ見つけられていいなと思ったからです。

見出しから記事の内容をつかむことができることを知り、見出しをつける意義を学ばせていただいた。

また、インターネットなどのニュースには正しくないものもあること、発信元はどこかを確かめる必要性があることなど、情報とのかかわり方についてもお話しいただいた。

構成や見出しの工夫など、国語の単元「日本文化を発信しよう」での修学旅行パンフレット作成の学習につなげていくように単元の計画をした。

（３）国語　「日本文化を発信しよう」

「日本文化を発信しよう」では、修学旅行での行先である奈良公園にある歴史的な建造物を本やインターネットで下調べをして、修学旅行新聞を、PC を用いてまとめた。Teams を使って修学旅行班のメンバーのファイルをお互いで共有しながら、見出しや文章が、よりよいパンフレットになるようにグループ内で推敲した。

さらに、このパンフレットをグループで一つの冊子にまとめ、５年生に紹介する際の資料とした。

３学期

（１）神戸新聞社との連携

～能登半島地震と阪神・淡路大震災～

神戸市教育委員会キャリア教育人材バンクを通じて、記者派遣を申し込み、神戸新聞社の NIX 推進部シニアアドバイザーの三好正文氏に「阪神・淡路大震災を考える」という内容で連携授業を依頼した。

事前に連絡を取らせていただく中で、2024 年１月１日、16 時 10 分に起きた能登半島地震。その被害の大きさ、被災者の方の様子などを載せた資料をいただいた。

資料は、１月１日からの神戸新聞とともに、子供たちがすぐに手に取れるように、廊下に掲示した。

学校図書館とも連携し、阪神・淡路大震災と能登半島地震の資料を並べて掲示した。

１月 15 日(月)に社会科の政治の単元「自然災害からの復旧・復興の取り組み」とも関連させ、三好氏に連携授業を実施していただいた。阪神・淡路大震災の時を思い起こしながら、今起きている被災者に寄り添う新聞記事についてお話いただいた。

【子供たちの感想より】

・神戸新聞の人たちは、地震にあっても被災した人のために今の状況を京都新聞社と協力して新聞を作っていたのが分かりました。被害にあった読者の人は、今の状況が分かるだけでなく神戸新聞社は自分たちのために頑張ってくれたんだなと心強くなると思いました。

（２）須磨友が丘高校との小高連携授業

23 年度で２回目の連携授業となる。事前に打ち合わせを実施し、避難所で生活する方々の思いにできるだけ迫る授業を学習の目標とすることを、高校の生徒会から提案していただいた。２月２日（金）に東日本大震災に実際に会った方々のお話を聞いた体験談、阪神・淡路大震災と能登半島地震の際に、発行された新聞の比較から、被災地の現状や、被災者の思いに迫る授業展開であった。子供たちは、グループに一人つく高校生と一緒に考えることで、より身近に震災への備えや、避難所での生活についての考えを巡らせることができた。

【子供たちの感想より】

・能登半島地震や阪神淡路大震災、東日本大震災など大きな地震が日本には、今までにたくさんおきています。でも、新聞を読むと、能登半島地震の時、ほとんど対策しておらず、すぐに食料などの備蓄がなくなったという記事を見て、地震はいつおこるか分からないし、対策は大事だなと思いました。

おわりに　成果と課題

NIE 実践校として２年目の 23 年度は、年間カリキュラムの中において、日々の授業に無理なく NIE の要素を取り入れ、授業内容に深まりを与えることをねらいとした。

子供たちの姿から、新聞を通して、現状を伝える記事を読み、何が問題なのかを捉えるということの意義を、少しずつ掴むことができた実践だったように思う。

しかし、子供たちが自ら新聞を手に取り、情報集めをする習慣がつくまでには至っていない。今を見つめ、そして未来を拓く子に育つよう、継続的に新聞に触れていくような活動を推進していきたい。

新聞を楽しく読もう

姫路市立大塩小学校　　校長　　田中　彰子
教諭　　西沢　恵

１　はじめに

本校は姫路市の東の端に位置し、南には大塩海岸が広がっている。また 2022 年度には開校 150 周年を迎えた歴史のある学校である。祭りのさかんな地域で、子どもたちは地域の方々に愛され、祭りと共に成長し、学び続けている。

23 年度は NIE 実践指定校２年目ということで、学年ごとの取り組みだけでなく、学校全体で新聞を使った活動を行う時間「新聞タイム」を設定した。学年の実態に応じて内容を工夫し、日頃新聞に触れることのない児童にも新聞を手に取ってもらい、少しでも楽しく新聞を読んでもらえるような実践に取り組んだ。

２　実践の内容

（１）新聞タイムにおける取り組み（全校生）

年間９回、朝の学習で新聞タイムを実施した。

・新聞 de スリッパ

まずは子どもたちに新聞を身近なものと感じてもらうために、防災教育と絡めて「防災スリッパ作り」に取り組んだ。児童たちは「かんたんにできる！」「これ普段でも使えそう！」と楽しそうに作っていた。６年生は様々な大きさのスリッパを作って、スリッパ屋さんを展開していた。新聞が防災アイテムとしても活用できると感じられる活動になった。

・「の」の字リレー

新聞に親しむ活動として、楽しく取り組める遊びの活動を取り入れた。これは新聞記事の中から「の」の字を探していき、リレー形式でつないでいくというもの。「の」の字を探す活動を通して、文章構成を捉える力を高めることや子どもたちの協働性を発揮する経験を増やすことをねらいとした。

〈児童の感想の一部〉
- 文の中には「の」がたくさん使われていることに気づいた。図の中にもたくさんあった。
- 友だちが探しているときの方が見つけられた。みんなで協力しているという感じがあった。
- まとまりごとに読みながら探すと見つけやすかった。

・新聞ワークシート

学年の実態に合わせてワークシートを用意し、記事を読んで問題に答える活動を行った。「１つの記事だけを読んで答えを探すもの」「たくさんの記事の中から問題に関係ある記事を見つけて答えを探すもの」２つのパターンで２度実施した。世の中で起こっている出来事をタイムリーに知ることができるため、子どもたちが社会に目を向け、関心をもつきっかけになった。

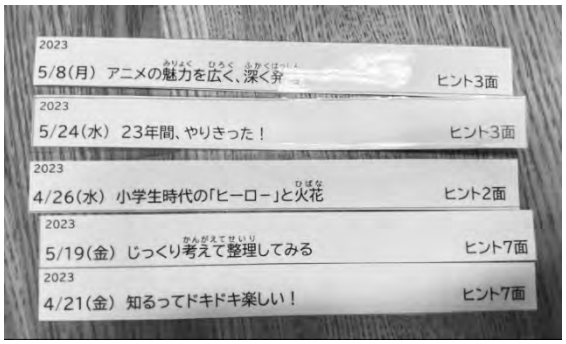
・新聞をめくってみよう

家庭で新聞を取っていない児童も半数ほどいるため、新聞をめくる活動を取り入れた。子ども新聞をペアで１部ずつ持ち、１・２年生はカタカナの言葉探し、３・４年生は１番大き

な文字探し、５・６年生は気になる記事探しなどに取り組んだ。低学年はペアで協力して活動に取り組む様子が見られた。高学年では選んだ記事を友だちに紹介する活動も行った。友だちがどんな記事を選んだのか興味をもって聞いている様子が見られた。

・記事を探して読もう

見出しや記事の中にある言葉が書かれた短冊をヒントに記事を探し、読むという活動を行った。これは３～６年生が取り組んだ。



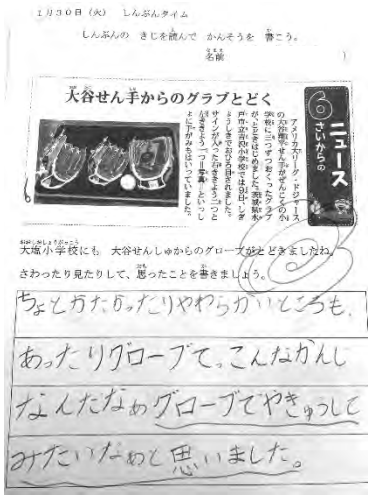
写真のように短冊の中には日にちや〇面というヒントを入れ、新聞の紙面の構成にも目を向けられるようにした。記事を見つけて「あった！」と喜んだり、短冊に書かれた言葉を見て「どんな記事か気になる！」と必死に探したりする様子が見られた。見出しに目をつけて新聞を読むいい機会となった。

・自分の考えを書こう

子ども新聞から児童が興味をもちそうな記事を選び、それに関する自分の考えや感想を書く活動を行った。

１・２年生には大谷翔平選手から届いたグローブの記事を選んだ。実際に自分たちも見て触ったり、使ったりしたものなので、記事の内容を身近に感じながら感想を書くことができた。

３～６年生には防災教育と兼ねて、１・１７阪神淡路大震災に関する記事を選んだ。被災された方の記事を読んだ感想や、地震が起こったときのために今の自分にできることについて一人ひとりがしっかりと考えることができた。



（２）各教科等における取り組み

４年生

４年生は、総合的な学習の時間で行った林間学校の様子を新聞にまとめることにした。まず林間学校に行く前に、神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーに来校していただき、取材を行う上で大切なことについて教えていただいた。

事前の授業は９月 20 日に行われた。三好アドバイザーから「自分だけが見つけた景色や感動を記事にしよう」と提案され、児童は、「山上から姫路の景色を眺めること」「お寺を見て回ること」「お弁当の時間」「ロープウエーに乗ること」などをテーマに記事を書こうと考え、期待に胸を膨らませながら新聞づくりの計画を練った。

事後の授業は 10 月 18 日に行われ、三好アドバイザーに来校していただき、割り付けやインパクトのある見出しづくりについて教えていただいた。

児童は「何をトップニュースにすれば林間学校のことが読み手に伝わるのか」に頭を悩ませながら記事作りを行った。楽しかった体験の「５Ｗ１Ｈ」を振り返り、見出しのつけ方や紙面レイアウトの仕方などについてもしっかり学んだ。

その後、各自がオリジナル新聞を作る作業に入った。個人差はあるが、大体３～４時間ほど使って仕上げた。下書きをする際、出前授業で配られた資料を見返しながら書いている児童もおり、読み手に伝わりやすく、さらに興味を引き付けるような文章の書き方を学ぶことができた。

５年生

５年生は、記者派遣事業を活用して、産経新聞神戸総局姫路駐在の小林宏之記者に、国語の単元「新聞を読もう」を基に授業をしていただいた。新聞にはさまざまな種類があること、レイアウトや見出しなどニュースを知らせるためのさまざまな工夫があることを教えていただいた。そして、実際に教室に毎日届いている地方紙と全国紙を見比べながら、８月に襲来した台風７号の記事を例に、それぞれの特徴を紹介していただいた。地方紙と全国紙の内容は全く同じだと思っている児童もおり、違いに驚いていた。また、新聞にはニュースだけでなく料理や占い、将棋、クロスワードパズルなども載っていることを知り、新聞に興味をもった様子であった。

＜児童の感想の一部＞

・それぞれの新聞によって、兵庫県に住んでいる人向けの記事など、視点が違うことが分かった。

・１面には１番読んでもらいたい記事を載せると知って、次新聞を読むときは１面に注目して読もうと思った。

・これから新聞を読むときは、トップ記事はどれなのか、記者の人たちはどのような思いで新聞を書いたのかを意識して読もうと思った。

６年生

①新聞記事を読もう

６年生は、休み時間やすきま時間に読書をさせている。その際、本だけではなく、新聞を読むことにも力を入れて取り組んだ。

その中で、現在の日本の課題や政治についても興味をもつようになったり、スポーツ記事しか読まなかった児童が自ら難しい記事を読むようになったりした。

５年生の時に新聞記事を読み比べる学習をしたため、同じ内容の記事でも見出しの工夫などに目を向け、自分たちで違いを見つけて楽しみながらペアやグループで新聞を読むことができた。

②神戸新聞出前授業

２学期に神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーに来校していただき、「戦争と平和」についてお話ししていただいた。社会科の教科書では資料として扱われていない「姫路空襲」や「神戸空襲」についても詳しく教えていただき、身近な地域の戦争の話を聞くことができた。広島と長崎だけではなく、姫路にも戦争で犠牲になった方の慰霊碑があることにも気づくことができた。また、新聞社に残る鮮明な資料に、児童も興味関心をもって学習することができた。

③新聞記事から自分の考えをもとう

書く力を育むために、新聞記事を読んで自分の考えを書く活動も行った。新聞記事は、児童が興味をもったものの中から自分の考えを書きたいものを選ばせた。その記事を使って、「①150 字以内で書く　②１段落目に記事から自分が分かったこと（事実）を書く　③２段落目に記事から自分が思ったこと（感想）を書く」の３つの条件を提示して取り組んだ。

児童全員が違う記事を読み、自分の考えを書くことで、他者に自分が考えたことを伝えたり、自分の考えを広げ深めたりすることもできた。また、活動後は、教室前廊下に掲示し、様々な記事や友だちの多様な考えに触れる良いきっかけ作りにもなった。

新聞を身近に感じ、学習とのつながりを大切にする

神戸市立鶴甲小学校　　校長　酒井　秀幸
教諭　松下　真寛

1　はじめに

本校は､NIE 実践指定校として新聞を活用した研究を始めて、2023 年度が初年度である。所在地は神戸市灘区にある、六甲山の麓のニュータウンとして開発された場所に、全学年各２学級、366 人が学ぶ学校である。

23 年度、本校では、６年生を中心に３つの学年が新聞を身近な情報源として学習と結び付けた取り組みを１年間進めてきた。

６年生の１つのクラスでは、新聞を購読している家庭が半分ほどだった。その中で毎日、新聞を読んでいる児童は、２人であった。

子供たちの中では､新聞は文字が多く､手に取って読みたいと感じることが少なく、あまり関心のないものであった。社会での出来事には関心があっても､情報を知る手段として､テレビの割合が多かった。またインターネットの発達に伴い、スマートフォンをもっている児童はネットニュースを見ているという回答が多かった。

そこで、各学年で日頃手にすることが少ない新聞を様々な場面で学習に取り入れていこうと確認し、活動をスタートさせた。

2　実践の内容

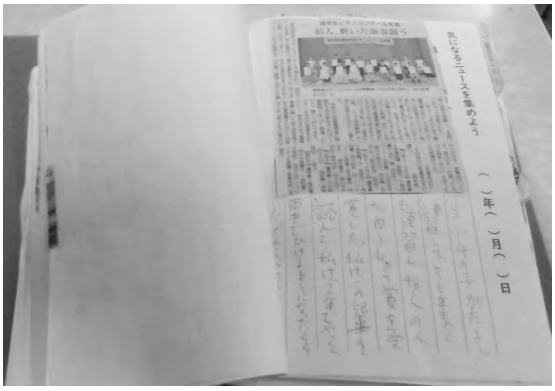
①　NIE コーナーの設置

まず、子供たちが新聞に親しむことができる環境づくりから行った。６年生のフロアに各社の新聞を手に取って読めるように長机の上に６紙の新聞を並べ、気になるニュースが目に入った時にすぐに読むことができるようにした。また、３紙は子供新聞を購読し、一般紙の内容と比べることができるように配慮した。

また、１組では､担任がニュースをピックアップし、廊下のボードに貼り付けて選びやすい環境を作り、抵抗なく記事を読むことができるようにした。２組では､通年で教室の中に自宅から持ってきた普通紙を置き、いつでも手に取ることができるようにした。

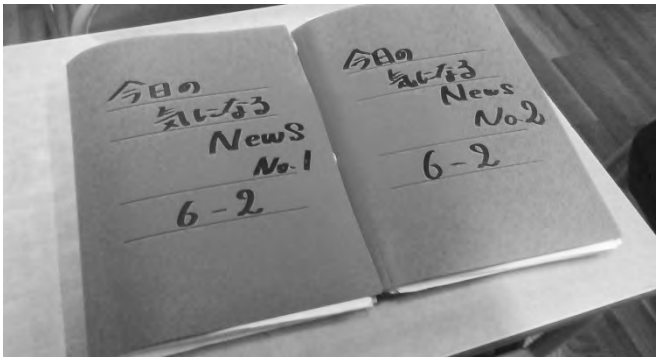
②　国語「気になるニュースを集めよう」

まずは､新聞をじっくりと読む時間を与え、今までに学習してきた新聞の構成や正確に伝えられている事実を確認させた。５年生の時に行った神戸新聞社への見学では、記者がどのような思いで､記事を書いているのか､間違いのない正確な記事を届ける大切さを学んだこともあり、新聞の良さや面白さを感じながら記事を集めることができた。



また当番活動として、日番が気になった記事を紹介する時間を毎朝、設定した。続けていく中で、初めはスポーツ記事やエンタメ記事が多かったが、政治や戦争、社会情勢、地域にまつわるニュースなど、さまざまなジャンルの記事を紹介できるようになった。また、自宅で購読している新聞を読むようになった児童や、毎朝、トップ記事は必ずチェックしてくる児童も増えてきた。

さらに、紹介された記事に対する質問コーナーでは、自分の考え方やとらえ方をさらに深めるような質問が生まれるようになり、さまざまな知識が身につくようになった。



活動を続ける中で、答えられなかった質問や、友達が紹介していたニュースを、毎週末の自分学習のテーマとしてさらに探究する児童も増えてきた。

子供たちからは、「新聞は新しいことが知れて面白い」「読んでいると文章の書き方がわかってきた。」「人を惹きつけるような書き方がたくさんちりばめられている。」など、新聞の楽しさや良さを感じることができた活動になったと感じている。

③　総合的な学習「平和学習」

６年生の総合的な学習の時間では、２学期の平和学習で新聞を使った活動に取り組んだ。夏休み期間に発行された新聞を１冊ずつ配布し、戦争にまつわる記事をスクラップにさせた。大きく取り上げられた記事だけでなく、小さく取り上げられた記事も大切にするように指導した。終戦記念日や原爆投下の日に近い新聞では大きく取り上げられていることに気づき、新聞を通して戦争の恐ろしさを感じることができた。また、小さな記事や、地方欄では、人々の生活の苦しさや大変さを細かく書いている記事が多いことに気づき、戦争の本当の残酷さを改めて感じている子供たちが多かった。

集めた新聞記事を活かして、調べ学習の根拠にしたり、テーマを広げたりすることにも役立った。

④　５年生「記者派遣事業」

２月上旬に、５年生を対象の記者派遣事業を行った。この事業は、３学期の社会科

「私たちのくらしと情報社会」の授業に合わせて行ったものであるが、実際に第一線で働く新聞記者が来校し、新聞記事を作るまでの工程を、実際に使うカメラ等の７つ道具を見せながら説明してくださった。

やりがいや苦労話を聞いた子供たちからは、「新聞記者の仕事は丁寧で速かった。」「カメラをもって仕事に出かける姿がかっこよかった。」など憧れの眼差しで、記者の話に聞き入っていた。日頃の教室での授業と違った時間を過ごすことができて、非常に有意義であった。

⑤　４年生　国語科「新聞を書こう」

４年生の国語科の学習「新聞を書こう」では、学習を以下の手順で行い学習に取り組んだ。

ア　どんな新聞を作るかを決めよう。

まずは、実際の新聞をつかって調べた。新聞名と発行日、発行者が書かれていること、いくつもの記事が集まってできていること、記事ごとに、内容が一目でわかるような見出しがついていること、記事とあわせて、写真が使われていることなどを確認した。

日頃からあまりなじみのない新聞に触れることで興味をもって取り組むことができた。

イ　どんな新聞を作るか話し合おう。

総合的な学習の時間の単元の一つであった「福祉学習」のまとめとなる新聞を作ることを行った。班ごとにテーマを決め、どんな新聞にするのかを出し合い、役割分担等を決めて記事探しを始めた。

ウ　記事を下書きし、割付や絵や図の効果的な使い方を考えよう。

実際の新聞では、写真を使っているが、子供たちが作成する新聞は、絵や図を使って自分たちが伝えたいことの資料として活用できるように考えさせた。また、実際の新聞では、未学習の漢字がたくさん使われていることが多いので、まずは下書きを書いてみることで相手に伝わる文章になっているか、などを確認した。

エ　新聞を読んで、感想を伝え合おう。

参観日にできあがった新聞を保護者向けに、ポスターセッションで、伝える活動を行った。

自分たちが調べてきたことや、学んだことを読み手に伝わる新聞づくりを追求したことで、自信をもって発表に臨むことができた。

新聞づくりを通して、児童の新聞に対する興味や関心が高まった。学級での係活動でも、新聞を作るときには、細かくインタビューをしたり、伝えたいことがわかるような割付にしたりして、親しみやすい新聞を作ることができるようになった。

３　成果と課題

〇成果

23 年度、３つの学年の取り組みを通して、成果だと感じたことは、「読んで、見て、使ってみる」ことが大切であるということである。下の学年から新聞に親しみ、文字を読むことに慣れていくことで、表現力や、言葉の数、知識などが学校内での学習や家庭学習だけでは身に付けることができないほどの価値あるものになったと思う。

またインターネットが普及した昨今では、正しい情報を自らが選び取ることが重要になってくる。そうした中で、新聞に親しんでいくことによって、正確な情報とは何か、曖昧な情報をどう処理していくのかを感じ取る力がついてくるのではないかと考えている。

さらに、学年や発達に合わせた学習活動に新聞を取り入れたことで、新聞の良さを今まで以上に感じることができたのではないかと実感した。

〇課題

さまざまな活動を通して、新聞の魅力に気付いた子供たちは多くなったが、まだまだ新聞を手にする子供たちは少ないのが現状である。パソコンやスマートフォンなどで手軽に情報が手に入るようになった現代において、新聞という紙媒体での情報に目を向けさせる難しさも、実際に活動してみて実感した。

23 年度の取り組みを通して、新聞から学び、新聞の魅力を感じる手立てを子供たちに伝えていく必要性を実感した。各新聞社ではデジタル紙を発行するなど、活字離れを止めようとする動きが見られる。こうした取組を学校現場で活用できれば現代のニーズと合っていくのではないだろうか。

４　おわりに

23 年度は、社会見学や、実際に働いている人々と交流する機会が戻ってきたこともあり、新聞づくりの活動やその他の新聞を活用した活動にもつなげやすくなってきたのではないだろうか。

NIE の実践校として、新聞にたくさん触れることで、子供たちは良さや面白さを感じることができていた。このことは、私たち教員も新聞の活用を促進していくことで、子供たちの読解力や思考力の育成に大きくつながると考える。

教育課程の中で、新聞を活用し、より学びを広げ、可能性を大きくしていくことが大切であると感じた１年間であった。

最後に、雨の日も風の日も新聞を必ずポストに投函してくれた配達員の方や、職員室に届いた新聞を、NIE コーナーに運び、整理整頓してくれた子供たちの働きによって、鶴甲小学校の子供たちがより多く新聞に親しむことができたことも忘れてはならない。

新聞活用による「書く力」の向上と心豊かな児童の育成

姫路市立網干西小学校　　校長　　岡﨑　由佳
教諭　　北上　順公

１　はじめに

本校は姫路市の西南端、たつの市との市境に位置し、揖保川とその支流中川とのデルタ地帯に校区の大半と学校がある。1982(昭和57)年に網干小学校から分離し、2026年度には創立50周年を迎える。南部の網干沖埋立地には臨海工業地帯が広がり、福祉作業所や特別養護老人ホームも建てられている。また、寺院や史跡等、歴史的文化財が多く、地域住民は「歴史と文化の街 網干」として郷土に愛着をもち、地域行事等が盛んに行われている。

23年度はNIE実践指定校１年目ということで、新聞に触れ、新聞の良さを知るところからの出発であった。各学年の成長段階に合わせて新聞に親しみ、テーマである「書く力」の育成にどのようにつなげていくかを模索する１年であった。

２　実践の内容

1年生

とにかく「新聞」という紙にふれることを目的に活動した。学活や生活の時間を利用して新聞じゃんけんをしたり、紙鉄砲づくりをしたりして遊びの活動に取り入れた。

大きな紙を扱い、床一面に広げて折りたたみ作業することで、のびのびと活動できた。新聞の折り目を使うことで、大きな紙であってもきれいに作れ、大きな紙鉄砲をダイナミックに動かし大きな音を楽しみながら、活動を進めることができた。

3年生

（１）俳句作りに活用

校区にある「不徹寺」主催の俳句大会に参加するために、俳句の作り方のコツを、朝日小学生新聞の俳句のコーナー、読売新聞の「KODOMO俳句」のコーナーを参考にして俳句作りに挑戦した。同世代の子どもたちの俳句を見て俳句作りを身近に感じることができ、興味を持って取り組めた。

（２）新聞作り（社会科）

朝日小学生新聞の「新聞を作ろう」の記事を活用した。掲載されている新聞を用い、見出しや表、グラフなど工夫している箇所を見つけながら、自分の新聞制作に取り入れていった。また、制作しながら見せ合ったり、お互いのよいところを真似したりする姿が見られ、意欲的に取り組めた。（活用した新聞記事↓）

（児童が制作した新聞）

（３）新聞写真の活用

生き物特集や宇宙、科学に関する記事などカラー写真が豊富な記事の切り抜きを掲示するなどして授業に活用した。最新情報などは特にタイムリーに活用できた。

4年生

（１）新聞を作ろう（国語科）

新聞の割付、見出しなどの確認の際、実際の新聞を用いた。実際の新聞の手触りを楽しんだり、複数紙を見比べたりすることで、割付の意味や見出しの工夫などがわかり、新聞に対する興味や関心、理解を深めた。新聞づくりは、回数を重ねるごとに見やすく、伝わりやすい記事がつくれるようになり、見出しの付け方、写真の使い方、割付のしかたが工夫できるようになってきた。友達の作品を見比べることで、伝わりやすい新聞の書き方を学ぶことができた。新聞が多く届く日はとても興味を持って読んでいた。

（２）新聞を作ろう（社会科）

「くらしの中に伝わる願い」姫路市の文化財、行事などを調べ、新聞にまとめた。

（３）新聞を作ろう（総合的な学習の時間）

林間学校

SDGsについて調べ学習

山本家住宅（雛飾り）見学

ふれあい交流（高齢者との交流行事）

など、多くの機会に学習のまとめとして新聞づくりをした。11月の高齢者とのふれあい交流では、新聞を使った輪投げやお手玉、タワーなど交流する資材として新聞を活用し、好評であった。

（高齢者との交流の様子）

5年生

（１）新聞を読もう（国語）

５社の新聞を読み比べた。

① 自分の気になる記事について、５社の新聞を読み、見出し、書き方、印象などを比較した。

② 各社の新聞の１面を読み比べ、割付の違いや記事の内容の違いを見つけたり、違いについて考えたりした。

③ 好きな記事、気になる記事について、読み比べることで理解を深め、それについて感想や自分の考えをまとめた。

（２）出前授業

神戸新聞社NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーを講師としてお招きし、「新聞の読み方」について、出前授業をしていただいた。新聞ができる工程を見せていただき、最新情報をニュースとして掲載するまでの努力や工夫を知り、新聞への興味がわいた児童が多かった。また、ペアで季節を表す記事を探し。発表し合った。ただ単に新聞を読むだけでなく、いろんな読み方や活用法があるということが分かった。また、この授業の様子が2023年9月6日付の神戸新聞姫路版に掲載され、さらに新聞に対する興味付けとなった。

【児童の感想】

○ぼくは、あまり新聞を読まないけど新聞は少し見るだけでわかりやすいということがわかったので、時間があったらおばあちゃんの家に行って新聞を読みたいと思いました。

（出前授業の様子）

（出前授業の様子）

（３）さまざまなメディアを比較する

「情報をつくり、伝える」（社会科）と「ニュースを伝えるマスメディア」（国語科）において、新聞を含めテレビ、ラジオ、SNS などのメディアのメリット、デメリットを知り、用途に応じてメデイアを使いわけることの大切さに気づいた。

（４）読売新聞よむＹＯＭＵワークシート

２学期、読解力の向上を目指し、高学年でよむＹＯＭＵワークシート無料体験版を週１回朝学習の時間に取り組んだ。文章の理解度に個人差が大きく、難しいと感じる児童にとっては難易度が高かった。今後、成果を上げている学校の情報を得て、効果的な指導方法や使用法を検討していきたい。

6 年生

（１）掲示物づくり（新聞への興味付け）

はじめは教室に新聞があっても、なかなか新聞を手にする児童はいなかった。まずは新聞に目を向けさせるために、教師が新聞を読み、児童の目を引きそうなものを集めて、教室や廊下に掲示した。

・四コマ漫画のみ切り抜いて貼る
・きれいな写真のみ切り抜いて貼る
・教師のお気に入りの記事を切り抜いて貼る

（２）新聞記事から感想を書く

自分のお気に入りの新聞記事を見つけ、その記事の感想を書く。

・スポーツや自然、科学、地域などの記事を選ぶ児童が多かった。
・「関心が高い記事」なので、誰もが取り組めた。できた作品（記事と感想）は、廊下に掲示した。互いに読みあって交流した。
・「関心が高い記事」なので、感想や考えを書きやすかった。
・家で新聞をとっている児童は、自主的に取り組む姿もあった。（自主学ノート）

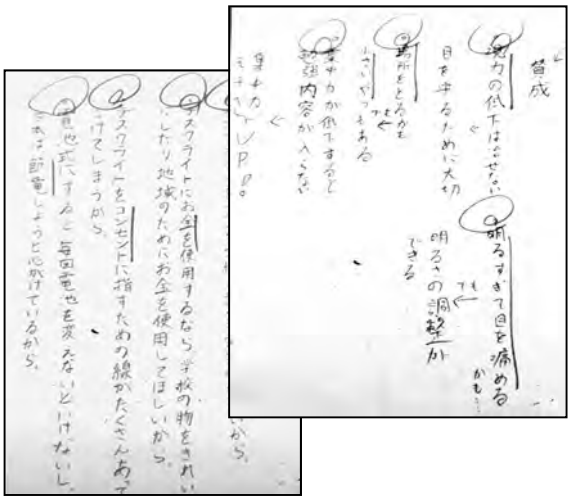
（３）読売新聞のよむＹＯＭＵワークシートの体験版を取り入れた。解答の解説や学習指導要領との対応表もあり、読解力をつけるには適切な教材であると考えた。

・朝のモジュールの時間に、新聞記事を使った読み問題のワークシートを使って学習した。

継続して取り組むと力が伸びそうだが、読む力が高くないと正解できず、つまずく児童も多かった。児童のやる気を継続させるための工夫が必要である。

（４）神戸新聞「若者Ｂｏｘ席」討論会

若者Ｂｏｘに投稿されている記事を学級で読み、そのテーマについて賛成か反対か、自分の立場を明確にして話し合う活動を行った。同世代の投稿文であるため、児童は楽しく討論に参加した。



（５）神戸新聞「若者Ｂｏｘ席」意見文

「若者Ｂｏｘ席」に投稿されている意見文を参考に，意見文を書かせた。次年度はこれら意見文を投稿できるようにしていきたい。

（意見文）

私は、「宿題は、家に帰ってからすぐにしたほうがいい」という意見に反対です。
理由は２つあります
１つ目の理由は、下校時間が遅くて、放課後遊ぶ時間が短いからです。6 時間授業などになると少ない時間しか放課後遊ぶ時間がありません。それにプラスで家に帰ってからすぐに宿題をすると放課後遊ぶことはほぼ不可能になってしまいます。
２つ目の理由は、学校で疲れていて、帰ってきてすぐに宿題をするとしんどい状態のことが多いのでその状態で宿題をすると内容が頭に入っていないことの方が多かったり、余計に時間がかかったりすることがあるからです。
先に宿題をしたほうがいいと考える人もいると思いますが、小学生の遊べる時間は短く限られています。なので友達と遊んでから宿題をすることができます。
これらの理由から、私は、宿題は家に帰ってからすぐにしたほうがいいという意見に反対です。

僕は、小学生に携帯電話（スマートフォン）は必要ないという意見に反対です。
理由は３つあります。
１つ目の理由は、学習範囲の拡張です。例えば、今理科の勉強をしていて〇〇が調べたい！ってなっても教科書にはのっていないことがあります。そんなときにスマートフォンがあれば調べたいことをすぐに調べることができます。他にも画像や動画を見て教科書よりわかりやすく学べます。
２つ目の理由は位置情報がわかるからです。ここに誰々さんと遊びに行くと言っても急に場所が変わることがあります。そんなときに位置情報の機能があれば、たとえ迷子になってもマップをみて家に帰ることができます。
３つ目の理由は、いつでも連絡が取れることです。例えば、友達が急に遊びに行けなくなったときにわざわざ友達の家に行って「今日行けへんわ」って言うのはいちいち面倒ですし時間の無駄です。
これらの理由から、僕は小学生に携帯電話は必要ないという議題に反対です。

委員会活動

（１）掲示委員会で、全校児童に知らせたい記事を選び、廊下の掲示板に掲示した。

（新聞の切り抜き）

（２）図書委員会で、子ども新聞を目立つところに展示し、全校生に読んでもらえるよう工夫した。

（図書館での展示↓）

（調べ学習用に子ども新聞を内容ごとに仕分けして保管↓）

【 小学校・中学校 】

23情報活用能力の育成

～新しい時代の NIE を模索して～

姫路市立豊富小中学校　校長　畑本　秀樹
教諭　川村　かおり
教諭　古寺　和子

１　はじめに

本校は、2020 年度に施設一体型の義務教育学校として開校した。2018 年度（開校以前）より NIE 推進校として実践を重ねてきたが、23 年度は、校内研修のテーマを『探究的な学びを拓く情報活用能力の育成』とし、これまで以上に情報活用能力の育成を意識した取り組みを行った。

２　実践の概要

〇新聞が当たり前にある風景

学校図書館に新聞閲覧コーナーを設置していることはもちろん、前期課程では児童玄関横に新聞委員会が毎月発行している新聞が、また各学年の廊下には学習で作った新聞が掲示してある。５・６年生の教室には毎日１紙～２紙の新聞が届くが、自由に気になるところを切り取ってスクラップしたり、まわし読み新聞に利用したりとクラスごとに工夫をしながら活用している。後期課程でも、毎日教室に１～２紙の新聞が届いており、生徒たちは休み時間などに自由に読むことができる。話題のニュースや入試情報などは昼休みに教師と一緒に新聞を囲む光景が見られる。また、５～６紙の新聞が学校図書館に２年間分保存されており、調べ学習などに利用することができる。

〇新聞を「つかう」
～新聞そのものを素材とした取組～

１年生図工「やぶいたかたちからうまれたよ」

新聞をちぎったり破ったりして、何かの形に見立てた作品を作成した。

２年生図書「本の福袋」

友だちにおすすめしたい本を、中身がわからないように包んで交換する取組で、その包み紙に新聞を利用することで、中の本はもちろん外側の新聞も読んで１つで二度おいしい、楽しい時間が味わえるイベントとなった。

また、休み時間には新聞を誰が１番長くちぎることができるか競争するなど、身近にある新聞が遊びの道具として浸透している。

４年生朝の会でのスピーチ

デジタル新聞から毎朝日番が朝の会で気になった記事を選んで紹介する取組を行った。ホワイトボード機能アプリを使うことで、クラスの仲間がその場ですぐにコメントを書き込むことができた。

５年生全校集会『とよとみっ子まつり』

３年生以上がお店を出して楽しむ全校集会では、「ゴミを出さない」「準備や後片付けに時間がかからない」という２つのルールをクリアするために、新聞を選んだ。新聞から制限時間内にいくつ「の」の字が見つけられるかという単純なものだったが、大いに盛り上がった。

特別支援学級（後期課程）自立活動

・「新聞バッグ」を作ろう

新聞紙でバッグ作りを行った。新聞紙は写真や広告も多いため、どこの紙面を使うかで個性的なバッグを作ることができる。作ったバッグは机の横にかけて、プリント入れなどに使っている。

・「ぐらぐらタワー」で集中力をきたえよう

新聞紙で輪を作り、積み上げていくゲームを行った。1 分間でどれだけ高く積めるかを競い合い大いに盛り上がった。

○新聞を「つくる」

３年生総合的な学習の時間のまとめとして「大豆」について調べたことを模造紙に新聞としてまとめ、ポスターセッションを行った。

・神戸新聞社のクラウド型アプリ「ことまど」を使って

本校では、５年生以上の児童生徒が１人１アカウントを所有し、「自然学校」「修学旅行」「トライやる・ウィーク」などの行事に加えて、理科や社会、国語で学習したことをまとめるためのツールとして「ことまど新聞」を作成してきた。

各種委員会の取組

・新聞委員会（前期課程）の新たな取組

５・６年生で構成された各委員会の取材に行き、それをデジタルニュース風にまとめた。来年度から委員会に所属する４年生はこのニュースを見て、入りたい委員会を検討することに役立った。

・図書委員会（後期課程）の取組

図書通信は図書委員がおすすめの本を紹介する形で、毎月発行している。

○記者派遣事業

５年生

新聞を作る時に子どもたちが最も苦労しているのが、字数をうめることである。それに対して、「五感を使って文章を書くこと。」「その場にいるからこそ書ける情報、情景を書くこと。」が大切だと教わり、まさに子どもたちに『情報の作り手』としての意識が芽生えた瞬間であった。

9年生

1票の意義を考える「主権者教育」

〈生徒の感想より〉

・積極的に投票に行かないと意見が政治に取り入れられないことがわかった。まだ投票できないけど、今どんな政治をしているのかなどを、新聞やニュース、インターネットなどで調べていきたいし、18歳になったら選挙に行きたいと思いました。

・自分たちの意見を反映させるにはまず選挙に行くことが大切だとわかった。今のうちに選挙に関する知識をつけたり、政治家の意見を聞いたりして、選挙に備えたいです。

選挙時の新聞社の役割を考える「選挙報道について」

〈生徒の感想より〉

・新聞にはより早く、公正に情報をみんなに知らせるために行の数など様々な工夫がされていると知ったので、新聞を読んでより自分の考えを深められるようにしたいです。

○紙とデジタルＩＣＴを使い分ける

授業の内容を記録したり、発表するために学習の成果をまとめたりする際、紙かデジタルのどちらを使うかの選択を子どもたちに委ねている。

（上の写真）記者派遣事業の際に、記者の方の話を聞いてノートで記録する児童（左）、タブレットを使って記録する児童（右）

・ハッピー新聞

みんながハッピーな気分になる記事をみつけ、スクラップしていく活動では、紙でまとめる子ども、タブレットでホワイトボード機能を利用してまとめる子どももいた。

○メディアリテラシー教育

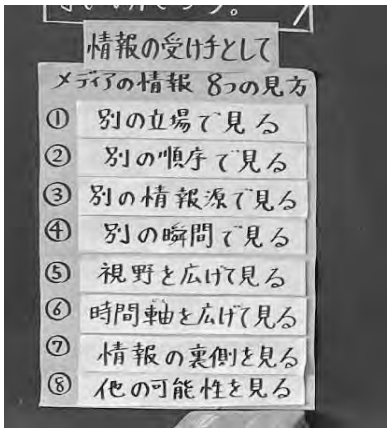
６年生総合的な学習の時間『メディアの情報を見る力を育てよう』

昨年度より、メディアの情報とどのように向き合っていくかを考える単元を設定している。

～情報の受け取り手として～

実際にあるフェイクニュースにふれることで、「私たちはメディアの情報とどのように向き合っていけばよいのだろう」という問いを立て、情報を受け取る時や発信する時の、情報の見方や整理分析の仕方を考えていった。白鴎大学教授、下村健一氏のメディアリテラシーを身に付ける８つの方法を参考に、情報を受け取る際のメディアの８つの見方を学習した。

さまざまな事例をもとに話合いを行うことで、情報を鵜呑みにしてはいけないこと、さまざまな観点から多角的多面的に見ていくことの必要性に気づくことができた。



～情報の送り手として～

情報を発信する時に気をつけることについて事例をもとに話し合った。子どもたちは先に学んだ情報の見方、考え方を使って、発信する際にどのようなことに気をつけたらよいかを議論した。

～学んだことを生かす～

学習の最後には、実際の新聞記事やネットニュースを取り上げ、その情報について吟味した。メディアの情報を伝える前に、学んだ視点を生かしてどのように読み解けばよいのか、どのようなことが考えられるかを、時間をかけて考えた。この学習を行ったことで、記事の情報をそのまま受け取るのではなく、さまざまな見方を駆使して、多角的多面的に情報を読み取ろうとする姿がみられるようになった。

５年生メディアリテラシーかるた

NHK 財団が制作した「メディアリテラシーかるた」を取り寄せた。かるた遊びを通して、楽しみながらメディアリテラシーについて学ぶきっかけとなった。

３　今後の課題と展望

国際大学グローバル・コミュニケーション・センターが2021年に発表した報告書に掲載されていたグラフを見ると、10代が最も誤情報に接触していること、そして誤情報に惑わされている割合は10代が最も多いということがわかった。また、先に紹介した主権者教育を受けた９年生の生徒が「これからは、テレビやインターネットなどの様々なマスメディアから情報を入手し、一つの情報だけを信じたりしないよう、メディアリテラシーを養っていきたいです。」と感想をもつなど、今後、メディアリテラシーを備えることが必要不可欠であると考える。

日常の学び、くらしの風景の中に新聞やＩＣＴがとけこんでいる本校だが、メディアリテラシーを含む新たな NIE のあり方を今後も模索し、９年間をつなぐ活動を行っていきたい。

【 中 学 校 】

新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る

尼崎市立南武庫之荘中学校　校長　毛登山　一郎
教諭　中嶋　勝

1　はじめに

NIE 実践指定校となって３年目となった。前年と比較して取り立てて変化のある実践とはなっていないが、2023 年度の NIE 活動を写真と生徒の感想を交えながら、簡単に報告させていただく。まず、南武庫之荘中学校 NIE 活動実践の概要は以下のとおりである。

【NIE 活動実践の概要】

1　国語科を中心に NIE 活動に取り組む。
2　様々な分野の新聞記事を掲示し、世の中の動きに関心を持たせる。
　①校内のさまざまなコーナーに新聞を掲示し、社会の動きに関心を持たせる。
　②新聞を使った生徒作品やスクールサポーターが作成したものを廊下に掲示する。
3　コンクール等に応募する。
　①日本新聞協会主催「いっしょに読もう新聞コンクール」を夏休みの課題とし、２学期初めに発表する。
　②神戸新聞主催「ひょうご新聞感想コンクール」など
　③新聞社への投書
4　新聞記者派遣事業を利用し、新聞の構成や特徴、新聞記者の思いを学ぶ。
5　国語科の授業実践例
　コラム写し・新聞ノート・新聞記事紹介・投書欄への投稿など。
6　総合的な学習の時間の授業では、新聞から SDGs に関する記事を見つけ、班で紹介したのち、ロイロノートや Google スライドを使ってプレゼンテーションを行う。

【実践事例】

⑴「新聞ノート」

1、２学期は、要約する力を育てるために、自分が選んだ記事を、ワークシートに沿ってまとめた。以下の内容でワークシートにまとめる。①記事を選んだ理由②新聞記事の見出し③記事の要約（100 字以内）④気づき（新しく発見したこと・驚いたこと・なぜと思ったこと）⑤課題あるいは感想や意見。（200 字以内）⑥疑問点を調べたこと（インターネットや他の記事などで知ったこと）または、今後調べてみたいこと。

３学期以降は、ワークシートは使用せず、読む相手にわかりやすく記事の内容を伝える力をつけるために、図や表、イラストなどを使って、新聞ノートの空白部分に、自分でレイアウト考え、色ペンなどを使ってまとめるようにした。特に色ペンを使ってイラストや図表にまとめ、工夫しながらまとめることは、生徒たちの創造力を刺激した。新聞記事の内容についてさらに調べることで、深く考える力を培うことができたと思われる。また、分かりやすくまとめられた新聞ノートを、廊下にたくさん掲示することで、他の生徒が選んだ記事や、まとめ方を知り、自分のノートに

活かすことができた。

【新聞ノートのまとめ方】

①ノート左側に記事を貼る。
　大切なところなどにラインを引く。枠を囲む。（蛍光ペンや赤ボールペン）

②ノート右側は、以下の内容をまとめる。
　（ア）ノート上段に　新聞名、記事の日付、ノートの記入日を記入する。
　（イ）記事内容をまとめ、図にしたり、イラストを描いたりする。自分の意見も書く。
　（ウ）色を付けるなど、見やすく工夫する。

③提出日は、全員、毎週月曜日の朝、国語係が集めて、２階控室前の長机の上に置く。
　（毎週、金曜日までに返却する）
　時間に余裕のある人は、月曜日だけでなくその他の日も提出して構わない。

④評価
　（ア）提出回数
　（イ）ノートの内容

「記事の紹介」

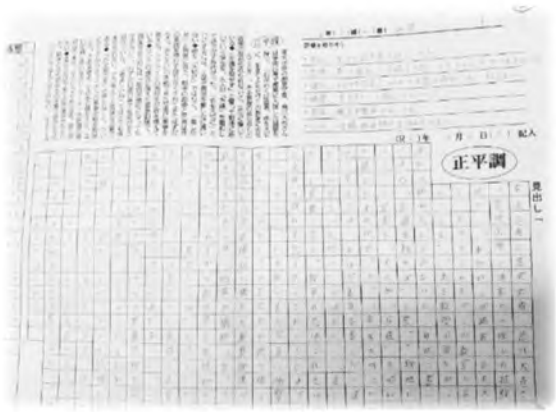
新聞ノートでまとめたことを、制限時間内（2分）で発表する。4人班に分かれて紹介した後、わかりやすく伝えることができた人を代表として選ぶ。代表はプロジェクターで新聞記事を投影しながら、記事の要旨と自分の意見、さらに、記事内容を深く読み込んだことをクラスメートに伝える。これにより、記事に書かれた内容をより深く理解し、考えを明確にして相手に伝える力がついたと思われる。クラス代表はさらに学年集会でも発表する。

【生徒感想】

・文章を短く、そしてパッと見て内容がわかるように要約する力がついた。前までは、感想や意見を相手に伝わるようにまとめるのが苦手だったけれど、新聞ノートを通して文を作る練習ができているので、文章力がアップしたと思う。いつもは読まない記事も読むので色々なことも知ることができて一石二鳥だと思う。

⑵「コラム写し」

朝学習や基礎学力の時間、自習時間などを使って新聞コラム写しをおこなった。生徒たちは初めはやらされ学習という捉え方であったが、コラムを写して感想を書き、知らない語句を調べることで、語彙力や文章構成力がつきはじめ、主体的に取り組む生徒が増えた。



コラム写しの内容

①丁寧に写す　　②見出しを考える

③語句を調べる　　④意見、感想を書く

【生徒感想】

・コラム写しは最新の記事を選んでくださるので時事問題がよくわかります。文字にすることで頭にすっと入るし、漢字も覚えることができました。自分の感想を字数制限内で書くので、文章力もついたと思います。

⑶総合的な学習の時間の授業「SDGs と新聞」

新聞から SDGs に関する記事を選び、その記事がどの目標に該当しているのかを考え、その理由や意見、感想をまとめた。

新聞ノートの発表と同じように、班で交流し合い、クラス代表が学年集会で発表した。

班員同士が意見や感想を述べ、付箋に書いて貼ることで、伝え合う力も養うことができた。また、それぞれのワークシートを一枚の模造紙に張り出し、文化発表会で展示した。

【生徒感想】

・たくさんの SDGs に関する記事を読み、SDGs に対する考えを深めることができた。今回の私のテーマは「安全な水とトイレを世界中に」。このテーマに対して記事を読んだうえでの感想や自分の意見などを書き、学年の前で発表するというとても貴重な体験をすることができた。

⑷いっしょに読もう新聞コンクール

新聞協会主催の「いっしょに読もう新聞コンクール」には全学年で取り組んだ。夏休み中に読んだ新聞をそれぞれの項目ごとにまとめ、2 学期初めに記事を交流し合い、クラスで発表した。また、よくまとめられた作品は廊下に掲示した。

【生徒感想】

・新聞の記事について家族で交流することができた。普段、あまり意見交流などをする機会がなかったのでいい機会になったと思う。他の人の意見も聞けて自分の考えをもっと深めることができた。

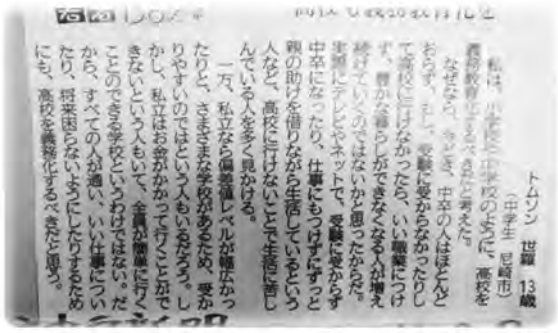
⑸新聞社への投書

神戸新聞社の若者Box席に投書することで、文章の構造を意識することや、根拠を明確にして書く力を育てる授業を組み立てた。

まず投書欄の記事を使って、文章の構成と適切な接続語の使い方を学ぶ。次に事実から考えられる自分の意見を、理由を明確にして書き上げた。

原稿は６人班で読みあって、添削と評価をしあい、推敲を重ねた。その原稿をクラスで発表し優秀作品を選んだ。

意見文は全員分を神戸新聞社に送り、新聞に掲載された生徒の投書は学年の廊下や中央玄関に掲示した。掲載された本人だけでなく同じ学年の仲間が新聞に掲載されることで、書く意欲も高められた。



トムソン　世羅　13歳
（中学生　尼崎市）

私は、小学校に中学校のように、高校を義務教育にするべきだと考えた。

なぜなら、今なお、中卒の人はほとんどおらず、もし、受験に受からなかったりして高校に行けなかったら、いい職業につけず、豊かな暮らしができなくなる人が増え続けていくのではないかと思ったからだ。実際にテレビやネットで、受験に受からず中卒になったり、仕事にもつけずにずっと親の助けを借りながら生活しているという人など、高校に行けないことで生活に苦しんでいる人を多く見かける。

一方、私立なら偏差値レベルが幅広かったりと、さまざまな学校があるため、受かりやすいのではという人もいるだろう。しかし、私立はお金がかかって行くことができないという人もいて、全員が簡単に行くことのできる学校というわけではない。だから、すべての人が通い、いい仕事についたり、将来困らないようにしたりするためにも、高校を義務化するべきだと思う。

⑹新聞記者派遣

実践指定を受けた３年間で「阪神・淡路大震災」「主権者教育」「いじめと SNS」「ウクライナ侵攻」「新聞記者の仕事」などをテーマに、新聞記者の方に講演していただいた。新聞記者の方が、どのような思いで記事を書いておられるのか実際に聞くことで、社会への関心を広げ深めることができた。

また、１．１７を前に、「神戸新聞の７日間」（DVD）を鑑賞した後に、実際に震災を経験した新聞記者に講演をしていただくことで、災害を自分ごととして考えることにつながった。

【生徒感想】

・実際に災害を経験している記者に教えてもらえたので、より理解が深まったし、新しい発見もあった。記者さんの講演はどれも「もっと聞きたい」と思うような話ばかりで興味をもちながらたくさんのことを学ぶことができた。

⑺「壁新聞掲示」

23 年度も本校スクールスタッフの S さんが、生徒たちの意識を高めるために、投書欄や SDGs など生徒たちの興味を引くような記事を選び、壁新聞にまとめてくださった。そのおかげで、休み時間や移動教室までの隙間時間に多くの記事に触れることができた。

【生徒感想】

・移動教室の時、並んでいるときや帰ってきたときに読んでいます。教室の近くにあるクイズも、色がついていて、とても見やすいし、私が知らなかったことばかりでとても面白いです。いつもと同じ廊下でも、新聞が貼ってあってしかも面白い記事ばかりなので廊下を歩くのが楽しいです。

【まとめ】

以上、23 年度の NIE 活動を振り返ったが、新聞を活用した授業（NIE）は、「言語能力・情報活用能力の育成」につながるということを実感できる。今後も新しい発想で工夫しながら NIE 活動に取り組んでいきたい。

新聞の良さを伝える

神戸市立丸山中学校西野分校　校長　林　竜弘
教諭　阿部　俊之

1　はじめに

本校は丸山中学校の分校として 1950 年１月 16 日、戦後の混乱期に、昼間学校に通えない児童生徒を救済する目的で開設された。昭和 30 年代に夜間学級が閉鎖されていく中、地域の援助もあり県下唯一の夜間中学校として西野分校は存続し、現存する夜間中学校の中では全国で最も長い歴史をもっている。西野幼稚園の園舎の一部を借用して始まったが、1995 年１月の阪神・淡路大震災で校舎が倒壊し、運動場に設置したテントでの授業、近くの小学校校舎を借りての授業を経て、現在の太田中学校内に移転し、西野分校は今年で開校 74 年目を迎えている。

現在、生徒の約８割が外国人である。10 代から 70 代まで、さまざまな国籍・年齢層の人たちが１つのクラス・学年に在籍し、共に助け合って学んでいる。ベトナム語・ネパール語の子ども多文化共生サポーターの支援を受けながら、学級活動や行事を行っている。

授業では学年の枠を外し、生徒の学力・日本語力によって習熟度別の６クラスに編成し、少人数授業を実施している。クラスは毎月見直し、必要に応じて編成替えをしている。音楽、保健体育、美術、技術・家庭などの実技教科は３学年合同で行っている。書道、藍染、短歌や防犯・防災教室などの特別授業、また、道徳・人権学習の授業も行っている。特に 2023 年度は音楽鑑賞会として、地域の方々も招いてオペラ・和太鼓・ジャズコンサートなどを行った。

このような環境の中で今年度は NIE 実践指定校２年目を迎えた。昨年度の手探り状態から少し発展した形で新聞教育を行えるように、「一人ひとりの生徒に新聞記事を上手にほぐして伝えることで、言語力と社会に対する視野を広げていこう」という目標を毎月の職員会議でも確認し、日本語教育の研修などもうまく取り入れながら、各教師が工夫を凝らした授業を実践していった。特に小学生新聞、英字新聞を用いたアプローチは他校とは違う実践になったのではないだろうか。

2　実践報告

さて、23 年度の NIE 活動・実践の報告として、次の９つの取り組みを紹介する。

①新聞閲覧コーナーの設置

22 年度に引き続き新聞に興味関心を持ってもらうために、登校してきてすぐに目につく場所にコーナーを設けた。ただ本校は、昼間は太田中学校の生徒が行き来する関係で常設することはできないので、毎日教師が机を出してきて、前日の夕刊、当日の朝刊を並べた。また過去の新聞はいつでも閲覧・貸出ができるように、別室に新聞社別にスペースを区切って保管した。

他社の新聞が並べて置かれているので、写真を見比べながら、日本語新聞のタイトルを見たり、教師が簡単な日本語で説明したりした。写真の人物、場所、事物など、そこから

話が広がっていくことも多く、授業前に語り合う良い機会となったように感じた。

②記事から広がる世界１

クラス：国語中級クラス
教　材：朝日小学生新聞
テーマ：「私の推し本」熱くスピーチ！

好きな本を紹介しあい、その本について質問しあう書評ゲーム（ビブリオバトル）の記事を読んで興味を持った生徒たち。この記事をきっかけに授業でもやってみようということになり、授業者が公立図書館からたくさん本を借りてきて、生徒の日本語力や興味関心に合わせて本を紹介した。

『不思議なまちの顔さがし』を読んだ生徒は、自分でも不思議な顔を探してみようと、学校の中を散策していた。一つの新聞記事からスタートした授業だったが、生徒が興味を持って動き出すと、授業者もアイデアを出し合いながら共に進んでいける広がりのある授業となった。

③記事から広がる世界２

クラス：社会中級クラス
教　材：朝日新聞
テーマ：「仮想旅行体験」

簡単な漢字が読めるようになった外国人生徒に興味を持ってもらおうと考えだした授業が紙上旅行。新聞に載っている旅行広告の中で、読める漢字と興味ある写真がマッチングされているものを選んだ後、GIGA パソコンを使って、授業者と一緒に検索を開始。まずは場所調べから。日本地図の画像を出してきて、新聞広告に載っている都道府県の文字と合う所を一生懸命に探す生徒たち。次は写真から行事の内容を連想して先生と日本語練習。

「さっぽろの雪まつり」を選んだ生徒は、雪で何かを作っていることまではわかったようだったが…。その後、先生からウェブ検索ではなく動画検索を勧められて一安心。言葉は少し難しかったけれど、雪まつりの規模やイベントの内容は理解できたようだった。「ぜひ一度は行ってみたい」と言っていたのが印象的だった。新聞に掲載されている旅行の定型文「１泊２日」「２日間」なども読み取れるようになり、駅のパンフレットなどにも目が向くようになった。

④語彙の多さにびっくり

クラス：英語上級クラス
教　材：Japan News
テーマ：Select the topic you are interested.

英字新聞の記事をじっくりと読んで自分の意見をまとめる授業に取り組んだ。内容は、

①新聞を読んで好きなトピックを選ぶ
②記事の要約をする
③自分の意見をまとめる　の３段階。

実際に取り組んでみてわかったことは、英字新聞の語彙の多さである。教科書などの他の教材と違って、経済・文化・科学・スポーツなど、話題が多岐に渡って広く深く書かれている新聞記事には、本当に多くの言葉が使われていた。日頃から海外のスピーチを聞かせたり、英文の物語で読解問題を作成したりしてオリジナル教材を作っていたが、新聞を教材として用いることで、生徒、教師共に新しい発見があった。

⑤聞いて・見て・探して作ろう

クラス：日本語初級クラス
教　材：朝日小学生新聞
テーマ：「ディクテーションと、あなうめ新聞を組み合わせて新聞を読もう」

生徒が興味を持てそうな記事を選んで記事の内容を半分に分け、前半部分は新聞記事をそのまま掲載し、後半部分は穴埋め問題形式

にしてプリントを作成した。（裏面に難しい日本語の英訳も掲載）授業手順は次の３段階。

①前半の記事をゆっくり解説する

②後半の記事をディクテーションする

③新しく覚えた単語で、短文を作る

前半の記事は写真の多いものを選び言葉が難しくても理解の手助けになるように考えた。また後半のディクテーションでは、単なる単語の穴埋めではなく、日頃から聞きなれているフレーズや、聞き取りやすそうな言葉、また覚えて欲しい言い回しなど、新聞記事の中にはこれらの言葉がたくさん散りばめられており、目の前の生徒にあった問題を作ることができた。漢字を書くのかどうかについては、天気、風、雨、空などこれからもよく目にするような漢字はこの機会に教えることができた。「あたたかい、ふんいき」などの言葉は聞き取りにくく書くことにも苦戦していたが、これも良い勉強の機会になった。

最後は、記事から抜粋した単語を使って短文を作ってもらった。選んだ新聞記事が日本の文化・行事が感じられるものだったこともあり、興味を持つだけで終わらず、その後も自分で調べてみたり、行ってみようと考えたりしていたことが、新聞教材の魅力だったように思う。

⑥これも税金で…

クラス：社会中級クラス

教　材：神戸・日経・産経新聞

テーマ：「税金が使われているものを探そう」

「義務と権利」の授業。一般紙（神戸・日経・産経）から税金が使われているのものをさがして色ペンで印をつけた。線を引いた項目を発表してもらい黒板に書いていくと、健康や生活を守るためにも、教育のためにも、国を守るためにも使われていることが分かってきた。また、はじめは国会議員、選挙などの文字に色を塗っている人が多かったが、ごみ収集、学校設備、道路、病院など、公務員のお給料だけではなく、インフラ整備などにも税金が使われていることを知り、再度、新聞記事を読み始めた。

「税金が高くなるとすぐ文句を言いたくなるが、大切なのはどのように使われているのかを知ることだと思った」という生徒の意見が印象的だった。

⑦料理から日本を知ろう

クラス：日本語初級クラス

教　材：朝日小学生新聞

テーマ：「わくわくクッキング～ブドウのクラフティをレシピを見て作ってみよう～」

世界のいろんな料理を紹介しているわくわくクッキング。材料の中に出てくる牛乳・卵・小麦粉などの漢字を記事から学んだ。漢字は教科書で一年生から順番に学ぶことも大切だが、生活に密着した漢字、特に家で食事を作ることの多い生徒にとっては、実際にスーパーなどで見かける漢字が読めたり書けたりできるようになると、料理の幅も増えてくるのではないだろうか。実際、日本で生活していても日頃の食卓に並ぶ料理は母国料理が多く、日本料理を作ることがない家庭も多い。この学習を機会にベトナム風日本料理などにも挑戦して欲しいと願っている。

⑧外国人労働者のことを知ろう

クラス：英語中級クラス

教　材：毎日新聞

テーマ：「日本の外国人労働者のことを知る」

外国人労働者について書かれている記事を訳すことで、今後の自分自身の自己紹介に役立てること、日本の現状を知ることをねらいとして次のように授業を進めた。

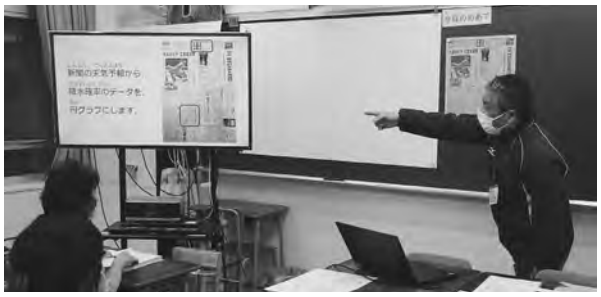
①記事から外国人が増えている場所を探す。
②日本における外国人労働者の紹介文を日本語から英語に訳す。
③自己紹介文を考える。

このクラスの生徒は全員働いているので、英語で自分の仕事紹介を仕上げた後に、彼らが働く理由と、起きている問題（低賃金・労働環境）を雇用者（受け入れる側）・労働者（働く側）両方の視点から考えた。

この学習を通して、外国人労働者の紹介文をヒントに、日本に来た目的や仕事の内容、将来日本で生活していきたいかなどを、自分の自己紹介に生かすことができた。また、記事の日本語を英語に訳す時に、単に単語を訳すだけではうまくいかないことがわかり、その背景にある考え方や文化の違いなども併せて学ぶことができた。新聞記事を教材とすることで、普段はあまり聞いたり考えたりすることがなかった雇用者側（受け入れる側）の意見に触れることができ、自分の働き方を見直す良い機会となったと思う。

⑨今日は降るかな？

クラス：数学初級クラス
教　材：神戸新聞
テーマ：「割合の考え方を知る」



教材は10%きざみで表記されている降水確率の記事。%の数字を帯グラフ、円グラフに直して提示し、実際に色を塗ってもらった。色を塗ることで多い・少ないというイメージを視覚的に捉えることができたように思う。

新聞記事の中には「〇割の人が…」「…は〇%」など、割合を用いて表記している記事が結構ある。今後は多い、少ないだけではなく、母集団の数が違っていても、割合を比べることで見えてくるものがあることを知り、さらに興味を持って新聞を読んで欲しいと願っている。

★新聞記者派遣事業

産経新聞社記者　香西広豊氏

テーマ「新聞ができるまで」

能登半島地震の記事が紙面に掲載されるまでの実際の工程を語っていただいた。現地にいるカメラマンとの連携や、デスク・整理・校閲担当者などが何度も原稿をチェックしてやっとできあがってくる記事の話に生徒たちも興味津々。日本語の苦手な生徒には新聞の写真の楽しみ方も紹介してくださり、とても有意義な時間となった。

３　まとめ

外国人生徒に日本語を教える時、やさしい日本語を用いることが多い。しかしその一方で、やさしくしない方が良い言葉もある。甲府市立大国小学校の今澤悌氏が言われている「負荷をさげない言葉」の大切さ。例えば「危険」。難しくても意味を教えてこの漢字を覚えてもらうことが、命を守ることに繋がっていく。新聞にはそのような大切な言葉が散りばめられている。新聞を教材としてどのように生かすことができるのか。夜間中学校の教師にとっても生徒にとっても、新聞はかけがえのないものだと感じた。

新聞制作を通して、「伝える力」の育成を図る

加古川市立加古川中学校　　校長　　山本　照久
教諭　　小池　徹

１　はじめに

本校は、全校生徒 937 人、29 学級（1 年生８学級、２年生８学級、３年生８学級、特別支援学級５学級）の県下でも有数の大規模校である。また、加古川市の中心地に位置し、創立77年の市内でも最も古い歴史をもつ中学校のひとつである。23 年度同様、めざす生徒像は「Smart（かしこく）Tough（たくましく）Heartful（心豊かに）」であり、NIE の取組だけでなく、ICT を活用した取り組みや SDG s 達成に向けた取組を３ School Project（Smart School・SDGs School・NIE School）として推進し、生徒の well-being の向上を目指している。NIE の実践に関しては主に２年生 295 人を対象として行った。

２　事前アンケートの結果

23 年度同様、生徒の新聞にふれる機会についてのアンケート調査の結果が以下の通りである。

「家で新聞をとっていますか」

・とっている　… 30.0%
・とっていない … 70.0%

「新聞を見る頻度はどのくらいですか」

・毎日　　… 2.6%
・たまに見る … 21.6%
・見ない、新聞をとっていない　… 75.8%

アンケート調査の結果から、23 年度 NIE の実践を取り組んだ学年よりも新聞にふれる機会のない生徒が多いことが分かった。

また、その上で自分の「文章読解力」と「読み手に伝わりやすい文章を書く力」についてのアンケート調査の結果が以下の通りである。

「自分の『文章読解力』に自信はありますか」

・ある　… 21.9%
・ない　… 78.1%

「自分の『読者に伝わりやすい文章を書く力』に自信はありますか」

・ある　… 22.0%
・ない　… 78.0%

このことから、実践する取り組みにおいてはできるだけ生徒が関心を持ちやすいテーマや記事を用いて、文章を正確に読み取り、読み手に伝わりやすい文章を書くことを常に意識できるよう指導した。

３　実践内容

（１）各新聞社の記事の読み比べ

朝学習の時間を用いて、事前に用意した異なる新聞社が取り上げている同じ内容の記事を読み、それについての各新聞社の記事の特徴について挙げていった。同じ内容の記事を取り上げて読み比べさせることで、一つの出来事や事件についてさまざまな文章表現の仕方があること、タイトルの設定や内容の表現によって、その内容の捉え方が変わる場合があるということに気づかせることをねらいとした。朝学習は１日 10 分で、１週間単位で以下のような計画で実施した。

月～火曜

１社目の記事を読み、その記事についての気付いた点をまとめる。

水～木曜

２社目の記事を読み、その記事についての気付いた点をまとめる。

金曜

１社目と２社目の特徴をまとめたうえで、記事の事象を伝えるためにどのように文章をまとめ、記事の構成をするのかまとめる。

【生徒の感想】

私は新聞記事の読み比べを行う前に、「各新聞社で情報共有をして、同じ記事を書けばいいのに」と思っていたが、新聞記事の読み比べを行ってみて、各新聞社（新聞記者）によって、さまざまな特徴があることを知ることができました。その記事にあてる見出しや、文章構成、その事象に対する賛否など、書く人によって表現も違うし、意見も違う。それぞれの意見を取り入れた上で、「自分の意見は…」と考えることで、社会についてより深く知る経験になったと思いました。

（２）NIE 記者派遣事業

神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーから５月に「新聞制作をやる上で事前に行うこと」、６月に「新聞の制作方法」をテーマに授業をしていただいた。

①「新聞制作をやる上で事前に行うこと」

新聞を制作していくにあたり、情報収集や、心構え、インタビューの方法、メモの取り方、写真のきれいな映し方など、新聞を制作する上での前準備として、重要なことを教えていただいた。

生徒たちはこの新聞づくりで学んだことをトライやる・ウィークで実践していた。

②「新聞の制作方法」

新聞を制作していくにあたって、5W1H を意識した文章の書き方や、読者の興味を引く見出しの設定方法など、人々に伝わりやすい新聞を制作するためのより良い方法を教えていただいた。

【生徒の感想】

・新聞は字が多く、読みたいとなかなか思わなかったけど、三好さんの授業を聞いて、見出しでほとんどの内容がわかるので、見出しの重要性を知ることができた。新聞づくりをする際に、読者の興味を引くことのできる見出しを設定していきたいと思いました。

（３）新聞の制作

（２）の NIE 記者派遣事業で学んだことをもとに、神戸新聞社の「ことまど」を用いて、トライやる・ウィークで学んだことや感じたことをまとめた「トライやる新聞」、昨年度から学習しているエネルギーのことについてまとめた「エネルギー新聞」、校外学習で広島を訪れ、そこで感じたものまとめた「平和新聞」の順で、３つの新聞を制作した。

①トライやる新聞

トライやる新聞は、トライやる・ウィーク終了後、総合的な学習の時間を用いて、事業所ごとに集まり、１つの事業所につき１つの新聞を、参加人数の多い事業所は、複数の新聞を制作した。

相手に伝わりやすい文章で表現し、伝えることの難しさに直面しながらも、同じ事業所

のメンバーと相談しながら１つの新聞を完成させた。

②エネルギー新聞

１年生から、社会や理科、総合の授業で太陽光発電や放射線に関することなど、エネルギーについて学んできた。今年度も引き続き取り組んでおり、夏休みの課題として、エネルギー新聞を生徒一人ひとりが制作した。

エネルギーに関連している記事を集め、そのことについて１枚の新聞にまとめた。

③平和新聞

９月から平和学習を進め、太平洋戦争や原子爆弾の被害やその後の状況について学び、11 月に広島へ校外学習に行った。

広島では被爆者の話を聞いたり、平和記念資料館内の見学、記念碑めぐりをしたりすることで、戦争の悲惨さや当時の状況などを知ることができた。それらのことを平和新聞として､1 枚の新聞に生徒一人ひとりがまとめた。

【生徒の感想】

・新聞では文字制限がある中で、自分の考えや思いを書くことに苦労しましたが、この新聞づくりを通して、文章を要約し、いかに読み手に自分の考えを伝えられるかを学び、その力を養うことができたと思いました。また、新聞社の方は、他社との記事で似たような記事にならないような独自の工夫をしていることがより深く理解できました。

・普段、講演会や行事の感想文など、少し適当にしてしまっているところもありました。ですが、この新聞づくりを通して、「この表現で伝わるかな」「この文章おかしくないかな」など、自分が書いた文章を見直す癖がつき、読者のことを考えた文章表現ができるようになったと思いました。

【生徒が作成した新聞（一部）】

（４）授業実践

「総合的な学習の時間」

３年生の「人権学習」の時間で、2023 年 10 月 27 日の神戸新聞の記事を扱った授業を展開した。記事の内容は、被差別部落の人々が人間の尊厳を求めて立ち上がった「水平社」運動の兵庫県組織が設立されて 100 年の節目を迎えたというものだ。

授業の中で、インターネットという匿名性を利用して人権侵害をしていることや、子どもの結婚相手が同和地区の人だとわかった場合のアンケート結果についてわかることから、現代でも差別がなくなっていないということを学んだ。

３年生は､昨年NIE活動に取り組んでおり、今もこのような新聞記事を使用した授業を時々行っている。

4　まとめにかえて

予定していた NIE 活動後、事後アンケート調査と NIE 活動の感想を書かせた。以下がその結果・内容である。

「新聞を読むことで社会問題についての関心は高まりましたか」

・とても高まった、高まった … 77.6%
・どちらともいえない … 20.0%
・あまり高まらなかった、高まらなかった … 2.4%

「NIE の活動を行う前よりも、自分の『文章読解力』に自信がつきましたか」

・ついた、少しついた … 49.0%
・どちらともいえない … 36.1%
・あまりつかなかった、つかなかった … 14.9%

「NIE の活動を行う前よりも、自分の『読者に伝わりやすい文章を書く力』に自信がつきましたか」

・ついた、少しついた … 60.0%
・どちらともいえない … 31.8%
・あまりつかなかった、つかなかった … 8.2%

【生徒の感想】

・私の家では新聞をとっていないので、新聞を読む機会がほとんどありませんでした。しかも、最近はテレビやネットニュースで、新聞を読むよりも簡単に知ることができるので、新聞に必要性は感じていませんでした。ですが、NIE の活動を実際にやってみることで、新聞に興味を持つことができました。また、新聞づくりを通して、「読者に伝わりやすい文章」を書くことがどれほど難しいことなのかわかりました。これからは、家でも新聞をとってもらい、１日に数分でも新聞を読むようにすることで、社会のことをもっと知っていきたいと思いました。
・今までは「長い文章＝良い文章」だと思い、感想文などでもできるだけ長く書くように意識していましたが、今回の NIE の活動を通して、文章が長ければ長いほど読者には伝わりにくくなってしまうことがわかりました。読者に正確に伝えるためには、伝えたいことを要約し、句読点などを正確に用いて端的にまとめることが大事で、その力がこの短期間で飛躍的に身についたと感じました。こういった力を身に着けられるなら、もっと早く新聞を読んでおけばよかったと後悔しました。

以上のように、NIE 活動により、アンケートの結果では「文読読解力」「読者に伝わりやすい文章を書く力」が身についたという前向きな感想が多数よせられた。

また、今回は新聞を書くことをメインとして行ったため、「読者に伝わりやすい文章を書く力」に自信を持てる生徒が増えたが、「文章読解力」については、生徒の半数ほどが NIE 活動による効果を感じられていなかった。

活動の前に行ったアンケートからわかるように、インターネットが普及している現代において、新聞を読む機会のない人も増えている。そんな中でも、新聞を用いた活動を行うことで、生徒自身が成長したと実感できる場面があったので、来年度以降も積極的に新聞記事を使った教育活動を進めていきたい。

自分ごととして捉え行動できる生徒の育成

南あわじ市・洲本市組合立広田中学校　　校長　　松下　哲也
教諭　　河野　真也

１　はじめに

本校は淡路島の中央部に位置し、全校生徒 150 名弱、学級数８学級（特別支援学級２学級を含む）の小規模校であり、校区を南あわじ市と洲本市に持つ組合立の中学校である。学校周辺はのどかな田園地帯が広がる中、国道 28 号線が南北に走り、様々な店舗が多く並んでいる、島内でも有数の賑やかな通りとなっている。神戸淡路鳴門自動車道の高速バス乗り場が近く、京阪神へのアクセスも非常に恵まれている。生徒たちは広田小学校からそのまま広田中学校へ進学してくることから、同級生だけでなく他学年同士でもお互いのことを理解し、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送ることができている。

学校教育目標

２　実践指定校２年目

NIE 実践指定校として取り組む機会をいただいて２年目である。１年目は、NIE の記者派遣をはじめ、新聞を活用した授業を展開した。企業とのオンライン授業で提案した自分たちのアイデアが現実のものとして開発されていることを、新聞を通して確認するなどした。また、ロシアによるウクライナ侵攻では SNS で流れる情報と新聞記事の信ぴょう性の違いについて考えることで、新聞がもつ普遍性や正確さに生徒たちは気づいたようである。

23 年度も新聞各社やテレビで生徒たちの活動や学びの様子を取材していただくことが多かったため、子どもたちにとっても、地域や世の中のできごとを日々の学習と関連付けることができた。22 年度に引き続き、23 年度も、

「社会の事象に関心を持ち、自分事として捉え行動できる生徒の育成を目指す」

ことを目標として、総合・キャリア教育・防災教育など様々な場面で新聞記事を多く活用し、NIE の学びを展開した。

①　ひょうご新聞作文コンクールへの参加

22 年度は簡単な事前指導だけで作文を書かせてしまったことで、スポーツ欄の結果だけを切り取った作文や、記事をそのまま書き写すだけなど、普段目にしやすい記事の紹介にとどまる傾向が見られた。そこで 23 年度は、7 月 18 日に神戸新聞 NIX 推進部顧問の吉田尚美先生に来校いただき、新聞を読むことの大切さや感想文を書くこつを丁寧に教えていただける機会を得ることにした。結果、分析や深まった考えが書かれ、自分の意見を述べる充実した作文が増えた。

新聞感想文 書き方学ぶ
南あわじ・広田中生45人

（神戸新聞 2023. 7. 21）

②　キャリア教育での活用

23 年度は１年生対象にキャリア教育を充実して行うことができた。２年次のトライやるウィークやキャリアに向けて、多くの職業の方と関わる機会を設けた。10 月、神戸新聞淡路総局の荻野俊太郎記者に、新聞記者の仕事

内容ややりがいを紹介してもらった。生徒の中には、「自分たちが知らない所で、どんなふうに世の中の出来事が発信されているかが分かった」と感想を述べていた。その後、生徒たちが逆に荻野記者に対して多くの質問をぶつけ、インタビューした内容を 400 字の記事にまとめた。生徒たちは自ら取材して文章にまとめる楽しさを通して、読者に対して伝えることの難しさにも気づいたようである。

記者の仕事の面白さ学ぶ
南あわじ
本紙記者が広田中で授業
取材や記事執筆も体験

（神戸新聞 2023. 11. 1）

その他にも、企業とのオンライン会議では、企業の内容を調べるにあたり、HP を参考にするだけではなく、企業の名前が出ている新聞記事から、現在の状況の動きを知ることに努めた。「阪神タイガースの日本一と阪急電車との関係は？」「最近の円安は、新薬開発費用にどのような影響を及ぼしていますか？」など、具体的な質問が見られた。

また、本校卒業生を講師に招いての「自分のキャリアをどう就職や転職で売り込むか」という授業では、新聞のデータをもとに出された働く条件が提示され、コーディネーターの役割を体験することで採用する側から多面的に雇用関係をみるトレーニングを行った。

③　権教育での活用

本校の人権教育は、1年次に多様な性や障がい者への理解、2年次には部落差別の歴史、3年次は結婚差別について学習している。（神戸新聞 2023. 9. 12）

神戸新聞
同性パートナー扶養認めず
手当支払い請求棄却

９月、新聞を活用して多様な性について学習した後、10 月にトランスジェンダーの前田良さんの講演を聞いた。新聞やインターネットで知っている情報だけではなく、実際の体験を当人から聞くことで、生徒たちも教師も「当たり前」の概念が大きく揺さぶられた。多様な性を認める発言や、制服など学校のルール見直しの動きを始めるなど、世の中の動きに関心を持ちながら行動する様子が見られるようになった。

④　防災教育との連携

本校は防災教育にも力を入れ、多くの場面で新聞を活用している。私も、他校での先進的な取り組みや工夫が新聞に載っているとすぐに生徒たちに紹介し、共に学習しながら、「自分のいのちを自分で守る」ことから一歩踏み込んで、「語り継ぐこと」「発信すること」に繋げていく、新しい取り組みに挑戦した。

ａ）防災小説

まず、22 年度に引き続き、生徒たちには防災小説を書かせた。毎年多くの自然災害が起こるが、自然災害が起こったから命を落とすのではなく、事前の備えやその時の行動で「助かる」ことをイメージさせている。

広がる「防災小説」主人公は私
生徒に当事者意識芽生え

（神戸新聞 2023. 1. 10）

ｂ）防災ジュニアリーダー

８月、１年生は元石巻西高等学校校長の齋藤幸男先生をお招きし、地域の方や南あわじ市危機管理課の方と共に避難所運営のワークショップを行った。そして、南あわじ市教育委員会が主催する防災ジュニアリーダー研修

に、本校からは私と８名の生徒が参加した。宮城県石巻市や東松島市で出会った人や見た景色、当時の状況を新聞と映像にまとめ、９月、全校生に発表した。

（生徒の作成した新聞）

ｃ）阪神・淡路大震災の語り部に挑戦

23 年度は阪神･淡路大震災から 29 年が経過し、30 年目の節目へと向かう年となる。

2024 年１月「阪神・淡路大震災を経験していない今の中学生が、『教訓』をどのように自分たちより若い世代に受け継いでいけばいいか」について生徒たちと一緒に考え、取り組んだ。語り部の方から実際に体験談を聞いてまとめようとすると、どうしても一部の体験や、全員が同じ内容になる。さらに、年を重ねるごとに風化していく可能性が高くなる。語り継ぎたいのは、想定される南海トラフ地震の津波の影響も踏まえた『教訓』である。話を聞くだけではなく、自分で調べて感じることに気づいた生徒たちは、映像と新聞を頼りに、班で話し合い、情報を整理していった。語り継ぐ相手を小学生と見立てたことで、「詳しくよりも簡単に」を意識すると、より情報は整理され、生徒たちは自分の言葉で一生懸命伝える様子が見られ、全員が語り部活動を行うことができた。

（広田中学校での実践）

１月 17 日には、洲本市立洲浜中学校で同様の授業を行い、NIE や防災通じて他校との交流授業にも役立てることができた。

（神戸新聞 2024. 1. 19）

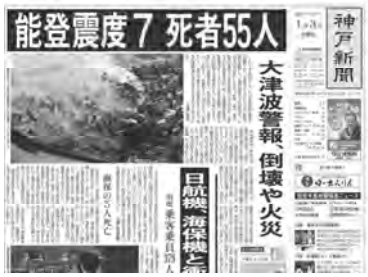
（讀賣新聞 2024. 1. 19）

ｄ）『をかし』プロジェクト

１月１日、最大震度７を観測した能登半島地震が発生した。多くの建物の倒壊と津波による被害、犠牲者が出た。すぐに生徒会が主体となって募金活動が始められたが、「現地の様子が分からない、本当はすぐに現地に行って助けたいのだけれど・・・」という声が多く聞こえていた。昼休み、図書館に設置している新聞を手に取り、真剣に読む生徒の数も多くなった。本校の生徒たちが一昨年に企業や南あわじ市に提案した災害時のドローン活用や 3Dマップはまだ能登半島では実用化されていなかったことも新聞記事で確認できた。

２月、私の石川県珠洲市への震災・学校支援チーム（EARTH）派遣に伴い、現地からの報告や帰任してからの情報提供などを生徒会本

部役員にしたところ、避難物資の様子を見た生徒から「非常食ばかりでお菓子がない。みんなで集めた募金を少し使って、お菓子を送ってみない？」と提案がなされた。


能登震度7 死者55人
神戸新聞
大津波警報、倒壊や火災
日航機、海保機と衝

（神戸新聞 2024.1.3）

情報を活用し、自分事として捉え行動できる生徒たちであったといえる。

実際に郵送したお菓子は３月上旬に珠洲市立三崎中学校に届けられ、生徒会同士の Zoom での交流会にまで発展することができた。（神戸新聞 2024.2.28）

広田中「1人じゃない」メッセージ添え
珠洲の中学生にお菓子で希望を
被災地支援募金活用し送る
「今後もできること考えたい」

（生徒同士の Zoom 交流会）

⑤　他教科への広がり

22 年度同様、淡路人形浄瑠璃の総合学習、校外学習や修学旅行のまとめ、また、国語科のディベート授業、社会科のメディアの特性やフェイクニュースの見分け方を理解するといった、新聞を活用した NIE の広がりもみられた。

こだわり衣装180着 愛満載
Perfumeの3人、県美での展示に感激
すたいる

（神戸新聞 2023.9.22）

嬉新聞

（校外学習での活用）

2023/07/21
客席巻き込む演出 太夫の語り現代風に 脚本にAI
淡路人形座 新作ももたろう
分かりやすさ追究 親子で楽しんで

（総合学習での活用）

（社会科（金融教育）での活用）

世界や日本の現状を把握し「これから」を考える

神戸市立高倉中学校　　校長　　赤松　三菜子
教頭　　中本　　亘

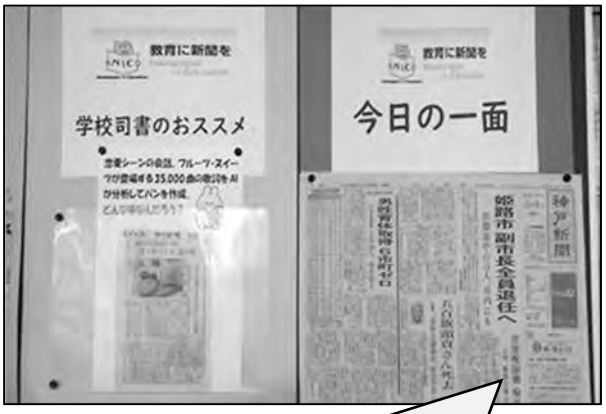
1　はじめに

本校は全 13 学級、生徒数 400 名ほどの中規模校である。本校は須磨の海を臨む高台にあり、六甲山系の山々の様子から四季の移ろいを感じる、自然豊かな土地に立地している。

校区内には幼稚園、保育園、保育所が点在し、２つの小学校から本校へ入学をしてくる。また、校区の近くには高等学校や大学があり、学習に適した場所でもある。

学習に対して前向きに取り組む生徒が多く、生徒アンケートでは、９割以上の生徒が「授業を大切にしている」と答え、７割以上の生徒が「家庭学習に取り組んでいる」と答えた。

理解力や語彙力が高く、学習に対して意欲的な生徒が多いが、地域の外に目を向け、広い視野を持とうとする生徒は多くない。進路決定についても「近くの学校」を選ぶ生徒が多い。そこで、本事業を通して社会情勢などを把握させ、自分の考えや、意見を確認し、そこから「これから自分にできること」「これから大切にしなければならないこと」について考えさせたいという思いから、「世界や日本の現状を把握し『これから』を考える」をテーマとして掲げることとした。



１面記事だと「見出し」が工夫されているので、生徒の目を引きやすい

４コマ漫画など、視覚的に興味もってもらえるものも掲示

教科に関わる記事をテーマでまとめて掲示

2　実践内容

（1）新聞に親しむ

以前から新聞を学校図書館に配置はしていたが、実際に手に取って読む生徒は少なかった。そこで、生徒が関心のありそうな記事を切り出して、廊下に掲示するようにした。設置場所を校舎入口付近に設定し、新聞記事が目に映りこむようにした

（2） 3年生の取り組み

これからの社会を築く～主権者教育の一環～

18歳になると選挙権をもつこととなり、選挙を通じて政治に参加することになる。そこで、現代の選挙制を学ぶだけではなく、新聞の記事やニュースの内容から、世代ごとに政治に求める関心事に違いがあることを理解、認識させ、そのうえで自分たちがどの候補者に投票をすべきかを考えさえた。

講演の中では「模擬選挙」を実施し、生徒が選挙権をもつさまざまな世代になりきり、各候補者の主張と争点を把握し、投票を行った。各グループで取り組んだことと、新聞記事やニュースでまとめられた内容を伝えていただいたので生徒も理解しやすく、スムーズに模擬選挙を行うことができた。

今回の取り組みを通じて、生徒は選挙を通じて政治に関わることの重要性と、一票を投じる際の選考基準を多角的な視野を持って考えることの大切さを学んだ。社会の現状を把握するとともに、これからどのような社会になってほしいと思うのか。社会と自分自身をつなぐ「選挙」というものに対して、講演前は距離感を抱いていた様子であったが、講演後は社会の一員として選挙に参加する意義と、決して特別視するものではないという気持ちに代わっていた。自分自身の一票が、よりよい社会づくりの一歩となると考えるきっかけとなった授業であった。

いろんな世代の立場から投票してみよう

カードで「世代」を決定

それぞれの世代の立場の考えを反映して投票

日頃から情報に触れておくことが大切

自分が関心のある争点についてまとめてみる

（３）２年生の取り組み

世界の情勢を知る～ウクライナから沖縄へ～

１学期、２年生の授業では神戸新聞・産経新聞・朝日新聞の１面を提示することから授業を始めた。

３紙とも同じ「ウクライナ戦争」に関連した「ワグネル反乱」の記事が１面のトップ記事を飾っていた。生徒は「遠い国の出来事」という雰囲気で目を通していたが、３紙ともが１面に取り上げているということから、「読者に一番に伝えたい出来事」と感じるとともに、世界の様子を知るきっかけとして、新聞は貴重であると少し感じた様子であった。

続いて、NIE のサイトから、産経新聞のワークシートを印刷して配布。内容は同じウクライナを題材にした記事で、NGO が国の役に立つための取り組みを取材したものであった。新聞にはゼレンスキー大統領の言葉や、『人道支援を自分ごとに』と、国際赤十字委員会の活動についての記事も掲載されていた。

ワークシートには、さまざまな質問が設定されており、一つ一つの質問を考えるうちに、いま世界が置かれている状況を肌で感じることができた様子だった。また、自分たちの生活への影響についても活発な意見交換をすることができた。最後に「自分たちができること、自分たちがするべきこと」をふまえて感想をまとめた。

新聞を通して、過去から現在、そして未来の世界や自分へ思いを馳せつつ、これからの多様性の世界を生きるためのキーワードを考えるきっかけとなった授業であった。

また、２学期には平和学習の一環として学年合唱で取り組む「ＨＥＩＷＡの鐘」から、沖縄戦について講演をいただいた。１学期にウクライナについて学習をしていたこともあり、今回は戦争というものに対して、より自分ごととして捉えられている生徒が多いように感じた。また、題材が自分たちの歌う曲の元となっているということもあり、熱心に講演に耳を傾けていた。

生徒の中には「沖縄戦のように悲惨な出来事があったにも関わらず、今もウクライナで同じようなことが繰り返されていて、とても残念で悲しい」「過去に起こったことは変えられないけれど、今起きている戦争は終わらせることができると思うから、少しでも早く終わらせられるように、自分なりに訴えていきたい」と今回の授業をきっかけに、よりウクライナの現状についての関心を高め、自分にできることを考えようとした者もいた。

NIE の授業を通して、過去と現代の戦争が結び付き、そしてそれは決して他人事ではなく、自分と関わりのあることだと気づいたようである。今回の授業後、より一層「ＨＥＩＷＡの鐘」の合唱に、思いが込められたことはいうまでもない。

（4）１年生の取り組み

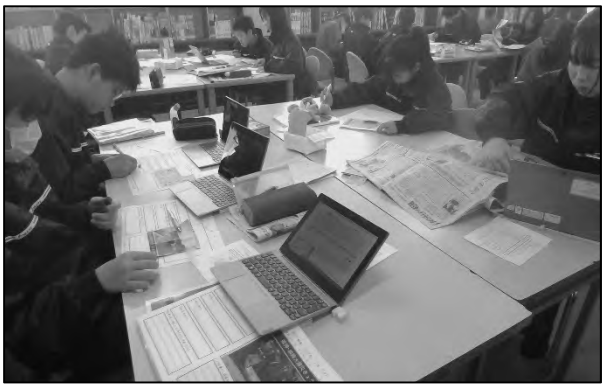
新聞に親しむ～視野を広げるために～

１年生は、震災について NIE の講話を２回受講した。（１回目は学校全体、２回目は学年のみで受講）テーマは同じであっても、取り上げる内容の視点や角度が違うので、生徒は新鮮な感覚で講話に耳を傾けていた。しかしながら、どこか受け身で物事を捉えている雰囲気があったので、新聞を活用してより積極的に情報を収集する態度を育てようと考えた。

まず、３つの異なる新聞社の記事を読ませ、自分自身が読みやすいと感じた新聞社のものを選択させる。そこから、毎朝 10 分間、新聞を読む時間を設けた。それまで、週に１回以上新聞を読む生徒が、各クラス５人にも満たない状態であったため、新聞を読むことが真新しいものを読むように感じた、と感想に書いた生徒もいた。

毎朝新聞を読むことを数日間続け、最終的に、自分自身が興味を抱いた記事をピックアップさせ、その内容についてさらに調べさせるようにした。なお、テーマを「社会科の授業で取り上げた内容に関連するもの」とし、図書館の本やインターネットなどを活用し「新聞記事からわかること」や「社会科の授業で習ったこととの関連」などをまとめさせた。学校図書館司書とも連携を図り、生徒がテーマについて、より調べやすいように環境を整えた。

自分で調べた内容を、小グループ内で発表し、そこからグループ代表を選出し、全体に向けて発表を行った。授業の内容と関連付けて調べさせたことで、生徒の積極性が高まり、発表する態度はもちろん、聞く側も熱心に発表を聞く姿が見られた。今回の取り組みを通じて、「日々の出来事が、自分の調べたテーマと結びついていることがわかった。」と感想を持った生徒がいた。記事の内容と自分自身の生活が、決して離れたところにあるわけではないと実感したようだった。



３　取り組みを通して

今回、各学年で NIE の取り組みを通じて感じたことは、生徒は記事の内容について、強い興味や関心を抱いているということ。普段の生活の中で、新聞に触れる機会があれば、その中から情報を読み取ろうとする意欲を生徒は持っている。新聞離れや活字離れが進む中で、学校という生徒が１日の大半を過ごす場所に、積極的に新聞を取り入れることで、抵抗感は抑えられると感じた。まずは、指導者である教師が、授業の中で積極的に新聞を取り入れることが、生徒のさらなる学力向上につながると感じた。

新聞を活用した自己表現力の育成

明石市立高丘中学校　　校長　　植垣　文夫
教諭　　三嶋　祐貴子

１　はじめに

本校は、全校生徒 378 人、12 学級（１年生４学級、２年生４学級、３年生４学級、特別支援学級３学級）の小規模校であり、明石市の高丘小中一貫教育校として市内全域から通学している生徒がいる。本校は、「強く・すなお・思慮深く」を校訓とし、「高い志をもち、未来を担う子どもの育成」という教育目標をもとに日々取り組んでいる。2023 年度から明石市の指定研究を受け、地域や小学校との連携を深めた生徒指導に力を入れている。

本校では、以前から神戸新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞が各クラスに毎日 2 紙ずつ配布され、朝の 10 分読書タイムや休み時間などに生徒が新聞に親しみやすい環境がつくられている。

一方で、環境がある中で、自然と新聞を手に取る生徒は少なく、社会の授業で最近のニュースを聞くときも新聞ではなく、「Yahoo ニュース」や「LINE ニュース」などインターネットや SNS を中心とした情報収集が多い。インターネットや SNS では、すぐに情報が手に入りやすい半面、不確かな情報も多い。そこで、新聞を取り入れた活動をすることで、情報の正確性や選択能力をつけさせ、それを発信し自分の考えを伝える自己表現力を育成することを目標にした活動を行った。

２　実践報告

①　新聞閲覧コーナーの設置

さまざまな新聞に興味・関心をもつ環境を作るために、全校生徒の目につきやすい生徒玄関に「NIE　新聞コーナー」を設置した。

神戸新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞をそれぞれ曜日別に 1 週間分分けておき、古紙は持ち帰り自由にすることで、家庭でも新聞にふれる環境になっている。

AsahiWeekly の英字新聞も隣に置いているので、海外のニュースを英語で読むことができる。

またこれらの新聞の近くに、机を置くことで、気になった新聞をすぐ読んだり、休憩や下校時間で友達を待っているときなどに新聞を読んだりする生徒の姿がみられた。

② 図書委員会による新聞活用の取組

２学期から、図書委員が中心となって、全学年で取組を始めた。各クラス１人ずつ順番を決め、１週間で気になった新聞記事を用紙に貼り、自分が注目したことなどを書き込む。これを各クラス前の廊下に掲示した。記事をそのまま張る生徒や、切り貼りをして見やすさやデザインを優先するなど、様々な工夫がみられた。また、廊下で生徒同士の会話の話題になったり、生徒と教師が話をするきっかけになったりした。

課題としては、廊下に掲示しただけでなく、生徒会通信などで他学年に紹介したり、生徒にフィードバックできたりする機会が設けられたらよかった。今後も、図書委員だけではなく、さまざまな委員会活動を通して、新聞を効果的に活用した取組を検討していきたい。

③ 学年集会の一分間スピーチ

３年生は、毎朝木曜日に朝集会を行っている。その場で、各クラス代表が週替わりで自分が注目した新聞記事の紹介と、自分の思いを発表する。

普段前に出ないような生徒でも、原稿を見ながらでも発表することで、自分の気持ちを伝えることや、表現することに少しずつ自信をつけることができた。

１分間スピーチの内容をクラス掲示し、発表が終わっても、クラスで振り返りができるようにした。

④　記者派遣事業

【２年生　トライやる新聞講習会】

神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーを招いて、「トライやる新聞講習会」をしていただき、２年生 126 人が参加した。

トライやる・ウィークで見聞きしたことを新聞にまとめる前に、何を書きたいか、記事の書き方、読者の興味を引く見出しの付け方、レイアウトのヒントなどを話していただき、ワークシートを使って、実際に書き方を学んだ。そして、少人数で楽しかったことや苦労したことを話し合った。

【２年生生徒の感想】

・講演を聞いて、トライやる新聞の構成をだいたい頭の中で考えることができました。事業所の方が言っていたことで、印象に残ったことがあるので書きたいです。
・神戸新聞の人たちはみんなが読みやすいように色々な工夫を施しているんだなと思いました。
・新聞には、意外に気をつけることが多くて驚きました。
・自分らしい新聞がつくれるようにしたいです。
・少しの工夫で読み手の興味を引くことができるので、みんなと違う新聞を作れるようにしたいです。

【１年生　新聞記者の仕事を知る出前授業】

キャリア教育の一環として企画し、神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーに講師をしていただいた。

生徒は「記者になるには何が必要か」と質問し、三好アドバイザーから「社会の出来事に関心を持ち、共感したり疑問を感じたりすること」と言われた。

神戸ルミナリエ開催の記事から、ニュースの基本である「5W1H」を抜き出すワークショップもあった。

【１年生の感想】

5W1Hを考えて取材することに興味を持った。能登半島地震の被災者にどんな支援ができるかも考えたい。

３　成果と課題

図書委員会による取り組みは、新聞を読む意識づけになったことが良かった。また、普段発表が苦手な人も自分なりの新聞記事の活用の仕方を表現することができた。

今後は、掲示したものを他の生徒にフィードバックできる機会を作っていきたい。

一分間スピーチは、当初、新聞記事を読み、簡単な感想を話すだけだったが、記事から自分の将来の夢と関連することを拾い上げ、夢と関係させながら説明したり、新聞から疑問に思ったことを調べて、発表したりする生徒もみられた。

４　24 年度に向けて

24 年度は実践２年目となる。新聞を活用する機会を増やし、子どもたちの進路につなげるため、キャリア教育と連携した活動を行っていきたい。

また、新聞を通して、社会的事象に興味・関心をもたせ、自分が今後どのような社会を築いていきたいのかを考え、それを自己表現できる機会を多く設けたい。

NIE ノートを通して、主権者としてのまちづくり

～住み続けられるまちづくりを目指して　企業と地域との連携～

西宮市立浜脇中学校　校　長　佐々木　理
教　諭　野上　耕佑
教　諭　西村　哲
主幹教諭　渋谷　仁崇

１　はじめに

2023 年度、本校の教育課程・学校教育目標に「NIE 活動」を掲げた。社会とつながる個と集団の育成に向け、NIE の定着を図りたい。生徒たちに現代的な課題に向き合うスキルと態度をはぐくんでもらい、地域や社会とつながる数多くの機会を提供したい。主体的な学びを通して、社会全体を多面的・多角的に考察し、他者と対話する中で、SDGs の「住み続けられるまちづくりを」地域のテーマとして、主権者教育にもつげたい。そんな思いをこめた。

２「NIE ノート」

全校生徒８５０名が「NIE ノート（記事スクラップ）〔ノートかPC〕」を作成している。授業の最初に、各班の代表が、書画カメラや、個人パソコンを活用して発表をする。お互いに内容のメモをとったり、意見を交流したりすることで「対話的な」学習にも結びつけている。毎回、個性的な記事や、大きな社会的動きの記事などを発表している。

社会の動きなど、興味関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分の意見やアイデアを発揮できる人になってほしい。

〇評価について

定期テストに時事問題として出題。新聞をとっていない人は、テレビのニュースを見たり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

〇「NIE 発表について」

●『思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』

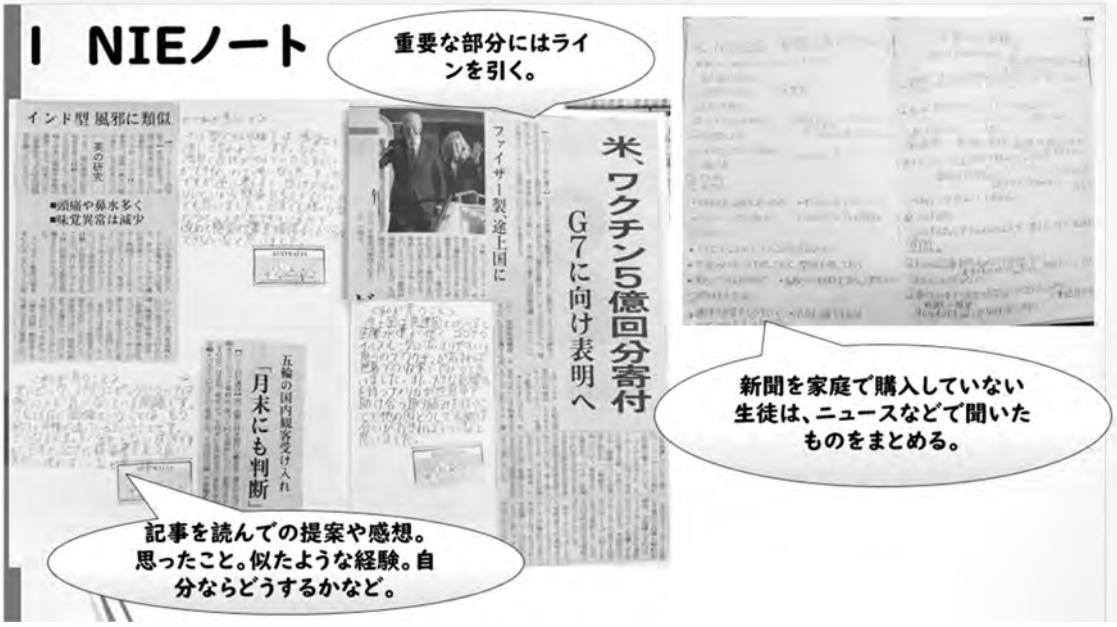
●『主体的に学びに向かう姿勢を育む』

・正しい日本語を読む力。
・見出しの付け方を学ぶ。
・記事の内容を理解（記事の起承転結）する。
・自分の感想を表現する力。
・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。

【神戸新聞 45000 部記念号掲載】

新聞活用「子ども」と「社会」つなぐ

教育現場で時代を読み解くお手伝い



全校生を通じて、SDGs や国際情勢の記事が多い。「自分たちの日常の当たり前が、そうではない国や地域がある。防災への関心も高めたい。」

・１年生　万博、SDGs、国際情勢
・２年生　ウクライナ問題、中東問題
・３年生　環境、政治、社会生活など

大阪万博 EXPO2025 と連携の SDGs 関連が多い。「岸田首相が減税や社会問題に対してどのような対策をこれからもとっていくのか、消費者や国民目線で考えてほしい。」と発表。

・特別支援学級「大谷翔平選手の活躍」や「恐竜化石発掘」「阪神タイガース『アレ』達成」など、自分の興味のあるものを中心に調べている。

書画カメラを活用し、教室での発表

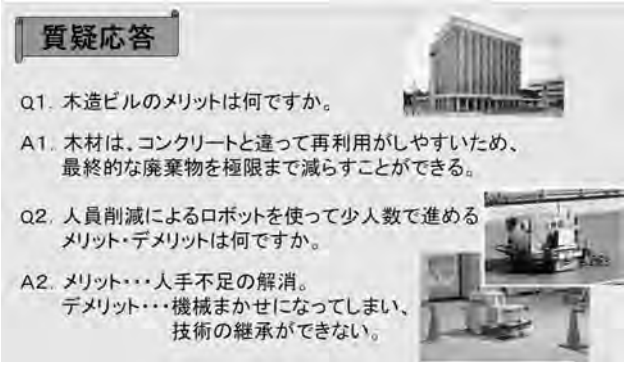
３　日本国際博覧会協会リサーチミーティング

本年度、兵庫県 NIE 推進協議会と連携して「大学・企業の協力と支援を学校につなぐ NIE 活動」研究会も発足させた。NIE と国連の持続可能な開発目標（SDGs）を関連づけた取り組みなどを続けている。

日本万国博覧会協会主催の「リサーチミーティング」に毎年、全校生が参加している。

2023 年度は、鹿島建設、東京海上日動火災保険株式会社、ニッスイ、LIXIL、過去には大阪ガス、阪急阪神 HD、大日本印刷、三菱自動車、NTT、など著名な企業による SDGs 講座を通じ、各企業の取り組みを学んだり、企業と生徒の双方向でディスカッションしたりしている。

12 月には、４企業について代表生徒たちが学んだことをまとめ、交流会を行った。



〔生徒作成　発表資料〕

４　大学との連携

二つ目は、桃山学院大学ビジネスデザイン学部（大阪市）と神戸ウォーターフロント機構、読売新聞社が主催する「中高生 SDGs アイデアコンテスト」に、希望する生徒が参加している。

神戸臨海地域の未来を考えるコンテストで、本校は 22 年度、最優秀の神戸ウォーターフロント機構賞を受けた。「シービン」を活用した湾内清掃から回収したペットボトルを資源として、再利用してブローチなどにして神戸市内で販売する―という提案が評価された。

併せて、優秀賞の桃山学院大学ビジネスデザイン学部賞も受けた。こちらは、「ＫＯＢＥＲ」というアプリを活用し、神戸市内を一つのテーマパークとする。その街中を歩く中でポイントが貯まり、協賛店で活用できる。また歩道に発電機を設置し、歩く重みで街の発電をするという提案だった。

〔桃山学院大 SDG s アイデアコンテスト表彰式〕

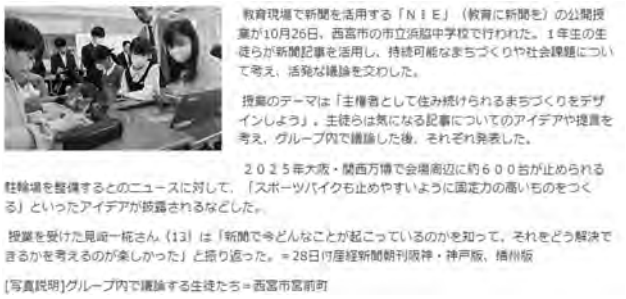
５　企業との連携

三つ目は、SDGs と EXPO を絡めた学習だ。1 年生の校外学習として、2025 年大阪・関西万博に主体的な学びの中で参加しようという思いで続けている。おおさか ATC グリーンエコプラザでの SDGs 学習や、日本万国博覧会協会による EXPO2025 の学習、エイジレスセンターでの福祉教育などを関連づけ、楽しみながら学んでいる。

〔日本博覧会協会による万博 EXPO 講座〕

６　アイデアミーティング（主権者教育）

最後に、「アイデアミーティング」。SDGs の 11 番目の目標「住み続けられるまちづくり」をテーマに、生徒各自が、新聞記事から題材を見つけ、その記事内容に関連づけ、自分たちの住んでいるまちの発展や課題解決に向けて、アイデアを練ってプレゼンテーションしている。



教育現場で新聞を活用する「ＮＩＥ」（教育に新聞を）の公開授業が10月26日、西宮市の市立浜脇中学校で行われた。１年生の生徒らが新聞記事を活用し、持続可能なまちづくりや社会課題について考え、活発な議論を交わした。

授業のテーマは「主権者として住み続けられるまちづくりをデザインしよう」。生徒らは気になる記事についてのアイデアや提言を考え、グループ内で議論した後、それぞれ発表した。

２０２５年大阪・関西万博で会場周辺に約６００台が止められる駐輪場を整備するとのニュースに対して、「スポーツバイクも止めやすいように固定力の高いものをつくる」といったアイデアが披露されるなどした。

授業を受けた見岡一椛さん（13）は「新聞で今どんなことが起こっているのかを知って、それをどう解決できるかを考えるのが楽しかった」と振り返った。＝28日付産経新聞朝刊阪神・神戸版、播州版

[写真説明]グループ内で議論する生徒たち＝西宮市宮前町

〔産経新聞 11/28 朝刊掲載記事〕

７　神戸新聞社員の記者派遣事業

神戸新聞社員の方に来ていただき、「主権者教育」をテーマに出前授業を行っていただいた。生徒の感想では、「自分たちで自分たちの国を変えていく、初めの小さいようで大きな一歩は選挙に行くことなんだと思った」や「投票において１票だけでもそれは十分な価値だから『私１人が行っても何も変わらない』ではなく、考えるよりも先に行動することが色々今後の人生を変えると思います」など１票の意義について深く考えることができた。

８　河北新報社の震災伝承新聞

同世代の中学生が作った震災伝承新聞を用いて、「宮城県の中学生の思いについて考える」というテーマで授業を行った。

「まず自分がすべきことは、『わかろうとすること』だと強く思った」や「震災のことを後世に伝えることが大事だと思った」など、同じ中学生が震災と向き合う様子に感銘を受け、自分たちも阪神・淡路大震災を経験した地域として“自分ごと”として考えていかなくてはならないと感じていた。

９　新聞の置き場と整理の方法

新聞は玄関ホールに下の写真のように置いた。新聞社ごとに、左側にはその日の新聞、右側には過去の新聞と見やすく分けた。そして、各クラスの社会科係が当番制で整理整頓を行った。

10　成果と今後の課題

NIE を通じて社会問題への関心や理解を深め、多様な学びを深化させている。今後は、地域、幼小との連携をいっそう強めたい。生徒たちが多面的・多角的に、地域課題の解決策を考え、可能性を見いだし、主体的にまちづくりに参画していくよう NIE 活動を継続していきたい。

また、様々な社会問題に対して、“自分ごと”として捉え、意見交流を行っていきたい。

【 中学校・高等学校 】

NIE 活動を通した社会的事象への多角的考察と探究的学習の推進

甲南高等学校・中学校　校長　山内　守明
教諭　足立　恵英

1　はじめに

甲南高等学校・中学校は 1919 年に平生釟三郎によって創立された阪神間の私立男子校である。「世界に通用する紳士」の育成を教育目標とし、徳・体・知のバランスのとれた「個性尊重」を基本とする教育を実践している。

甲南大学への内部進学を前提としたアドバンストコースと他大学進学を見据えたフロントランナーコースを設置し、前者には、国際的な視野と素養をもつ人物の育成に重点を置くグローバルスタディープログラムも展開されている。また、キャリア教育を始め、探究的な学習により、多角的視点から物事を見つめ考える力の育成のための取り組みもおこなっており、NIE 活動への取り組みもその実践の１つに位置付けている。以下に紹介するように、2023 年度は、高３、中３を中心に他学年も含めて学年横断型の実践も試みた。

2　新聞配置

「図書館内に新聞コーナー設置」

従前より図書館においては新聞社毎に引き出し型のトレーに入れて収納し、直近１ヶ月分を閲覧できるようにしていたが、NIE によって新聞が提供されている期間には、平置き型の閲覧台を利用し、天井からの吊り下げ看板に新聞社名を記載した上で、その直下に当日の新聞をそれぞれ平置きする形で配置した。

これまでとは違い、新聞の一面が容易に見える形で掲示することによって、生徒は、一面に掲載されている重要トピックスが自然に目に入り、時事問題への関心の惹起にもつながったと思われる。

また各社の一面記事の違いも容易に確認でき、新聞による記事の違いに自然に意識が向くようなったのではないかとも考えられる。一面比較の授業課題に向けての取り組みにも資するものとなった。

3　実践の内容

①　新聞トーク（高３・中学全学年）

「高校生が中学生に話す新聞の効用と活用」

従来から国語科では、「社説の書き写し」の実践によって正確な文章読解力、文章作成力の涵養に努めてきたが、NIE 実践校となったのをきっかけに、新聞の活用機会をさらに広げ、本校の「中高６年一貫教育」の下で、「教育活動における生徒間の縦のつながり」を醸成する機会とも捉え、「新聞の効用と活用方法」を高校３年生から中学生に向けて、直接 ZOOM で話してもらうという「新聞トーク」の実践を

開始した。

形態としては、「朝の読書」(10 分間)の時間を利用して、高校生が、新聞の効用について中学全 15 クラスに向けて ZOOM で直接話しをするというものである。高３生には「新聞の有用性を伝える」ことを主眼に自由に話しの内容を構築してもらった。

５人の高校生が話した概要は以下である。

・本を読むことと、新聞を読むことにどういった違いがあるか。

・ウクライナ問題について、新聞はどのような利点を持っているか。

・新聞の文章は、事実把握が正確だということに加えて、文章表現が正確である。

・記事のなかに、記者の視点・意見が含まれており、それを読み取ることもまた新聞の面白さである。

・新聞は他社の記事と比較することが容易であり、新聞社によって事実の表現の仕方も異なり、同じ事実でも、表現の仕方で読み手に与える印象が大きく変わる。例えば、「その目も」とするのか「その目は」とするのかで、筆者が文章に入れた思いが見えてくることがあり、そういう細やかな視点で記事を読むと、今までとはまた違った新聞の読み方ができる。

・新聞を読みながら、自分の意見を醸成していくことが大切であり、意見を持つためには、まずその記事に関心を持つ必要がある。社会で起きているさまざまな事実に関心を持つことで、自分の意見も作られていくのだ。

といったものである。

② 平和学習（中３）

「新聞活用による人権学習」

中学３年生では「平和学習」を教育目標の中心とし、修学旅行において、長崎での原爆学習や鹿児島の知覧での特攻隊の学習等を通じて平和について考える機会を意識的に確保している。

今年度は、修学旅行の事前学習として、新聞記事を使って広く平和や人権に関するレポートをポスター形式で作成し、全員が文化祭での展示をおこなった。平和関連のテーマに限定せず、広く人権全般に関するテーマを許可していたこともあり、戦闘や紛争だけでなく人権意識への関心が高まるような記事を素材にする者も多くおり、社会問題への意識が広く醸成されたのではないかと考えられる。

③ 国際政治経済（高３グローバル）

「同一テーマでみる過去と現在」

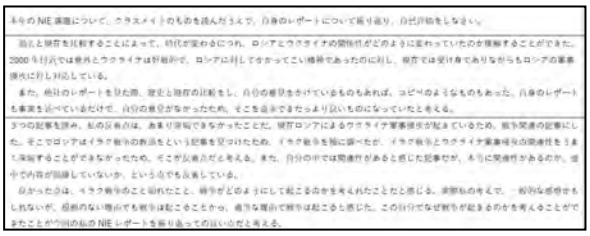
高校 3 年生のグローバルスタディープログラムで展開されている「国際政治経済」の授業において、NIE への取り組みとして、新聞記事を朝日けんさくくん、読売新聞スクールヨミダスを利用して、国際政治に関するテーマを自分で設定し、調べ学習をおこなった。現在の新聞記事を調べたあと、10 年前の同じテーマについて新聞記事を調べ、さらに 20 年前の同じテーマについて新聞記事を調べる。この

調べ学習を通じて、各自のテーマについての変化の様子を知ることを目指した。

これらの記事を元にまとめレポートを作成し、クラスメートの作成したレポートを相互に読んで自分のレポートの振り返りを行った。

〈手順〉中間報告を Classi(Web システム)のアンケート機能で実施。レポートは Classi に Word 形式で提出後、PDF に変換して生徒が相互閲覧できるように Classi で配信。その後、自己振り返りと他者との比較を書いて「自己評価 PDF」として Classi のアンケートで提出。

〈自己評価 PDF〉


今の NIE 課題について、クラスメイトのものを読んだうえで、自身のレポートについて振り返り、自己評価をしなさい。

過去と現在を比較することによって、時代が変わるにつれ、ロシアとウクライナの関係性がどのように変わっていたのか理解することができた。2000 年代以前では世界とウクライナは好戦的で、ロシアに対してかなりてこい様子であったのに対し、現在では受け身でありながらもロシアの軍事侵攻に対し対応している。

また、他自分レポートを見た際、歴史と現在の比較をし、自分の意見をかけているものもあれば、コピペのようなものもあった。自身のレポートも事実を述べているだけで、自分の意見がなかったため、そこを追加できたらより良いものになっていたと考える。

3つの記事を読み、私の反省点は、あまり深掘りできなかったことだ。現在ロシアによるウクライナ軍事侵攻が起きているため、様々関連の記事にした。そこでロシアはイラク戦争の教訓をという記事を見つけたため、イラク戦争を強に調べたが、イラク戦争とウクライナ軍事侵攻の関連性をうまく深掘りすることができなかったため、そこが反省点だと考える。また、自分の中では関連性があると感じた記事でが、本当に関連性があるのか、当中で内容が混線していないか、という点でも反省している。

良かった点は、イラク戦争のことを調べたこと、戦争がどのようにして起こるのかを考えられたことだと感じる。実際私の考えで、一般的な感覚かもしれないが、根拠のない理由でも戦争は起こることかや、適当な理由で戦争が起こることを感じた。この自分でなぜ戦争が起きるのかを考えることができたことが今回の私の NIE レポートを振り返っての良い点だと考える。

〈最終レポート〉

私は、G7 の記事について取り上げた。

財政の安定 課題に

2023 年 4 月 19 日　G7 外相会合　意義と課題

この記事では、外相会合の意義や、広島市で開かれる G7 首脳会議（サミット）に向けた課題を国内外の有識者に聞き、まとめたものになっている。現在、ロシアによるウクライナ侵略が問題になっている。外交・安全保障の課題を話し合う外相会合も、G7 諸国の結束を図る場であり、世界政治の今後を左右する。また、台湾への中国の侵攻を抑止するためにも、日本はインド太平洋地域の安全保障問題も、ウクライナの主権と独立を守るのと同じ意味を持っていると繰り返し語る必要があると述べられている。核兵器の保有国と非保有国の双方がメンバーとなっている G7 の議論の難しさが垣間見える。

2012 年 10 月 12 日　G7　景気回復図示せず　各国内政に課題抱え　経済情勢注視

この記事では主に、世界の経済情勢について述べられている。欧州危機の長期化で、中国やインド、ブラジルなどに景気鈍遅の波が押しよしている。財務相、中央銀行総裁会議で、各国は、世界経済の先行きの不確実性が高まっていることへの強い危機感を共有した。米格付け株式会社が１０日にスペイン国債の格下げを発表するなど、G7 各国の協調が問われる局面が続くが、会議で明確な処方箋は示されず、各国の打つ手が問われる苦しさも浮き彫りにした。韓国も中央銀行が政策金利の引き下げに踏みきり、景気の下支えになっている。また、IMF のラガルド専務理事は、「世界経済の成長のペースは遅い。米国と欧州の行動が必要だ」と述べている。

④　１面記事比較（高３「法学入門」）

「新聞各社の報道優先価値からの考察」

本校では高校３年生で甲南大学との高大連携活動を取り入れた「特色科目」を展開している。「経済学入門」「ソーシャルビジネス入門」「スポーツトレーニング」等の授業が行われているが、その内の１つである「法学入門」の授業では、「法律の関連する時事問題」への考察を深める取り組みもおこなっている。NIE 実践校となったのをきっかけに、時事問題に関する関心と多角的な考察力を養うために、

まずは新聞第１面に掲載されている時事問題に関して、各新聞社がどのような記事を優先し、そこからどのような報道価値に重きを置いているかを考察する課題に取り組んだ。各生徒は記事に明確な違いのある日の新聞一面を並べ比較しながら調べ、課題用紙に比較できるように写真を掲載し、その上で客観的な比較をおこない、次いで上記観点から各新聞社の記事採用の優先理由を考察し、各社毎の報道特徴を分析していった。同じ「新聞」という報道媒体でもその報道価値の置き方には特徴があり、その比較をすることによって、自己の視点だけでなく多面的な考察をする力の醸成につながったのではないかと思われる。

⑤　新聞記者講演

「『死の通り』―特派員が語るウクライナ」

本校では、中学３年生からグローバル教育に特化した「グローバルスタディプログラム」を各学年１クラスで実践している。単に英語の知識だけではなく世界的な視野で物事をみることのできる生徒の育成を目的とし、その一環として SDGｓや国際平和をテーマに探究学習を展開している。科目も「国際政治経済」「グローバルヒストリー」「グローバルリサーチ」など自由設定のものも配している。

このプログラムの履修者を念頭に、現在のウクライナ情勢を踏まえて、国際平和に関し

て現実の問題を身近に感じるような講演を依頼したいと考え、戦闘地域できれば2022年2月から始まったロシアによるウクライナ侵攻を実際に取材した記者の講演を兵庫県NIE推進協議会に申請した。その結果、実際にウクライナに取材に入った経験を持つ記者に引き受けていただくことができた。この幸運な機会を活かし、その講演をできるだけ多くの生徒に還元し実効性を高めるために高校1年生から3年生までのグローバルスタディプログラムの履修生約120人の生徒に2時間連続の特別時間割を組み受講することとした。

講演者は、過去に「ボーン・上田記念国際記者賞」の受賞歴もある朝日新聞社の金成隆一氏である。金成氏は22年1月から4回ウクライナに滞在しロシアによる侵攻後も甚大な被害が出たブチャを始め、各地での取材を重ね多数の記事を発表している。

講演においては、戦闘の状況だけでなく、戦争前の街の様子、一般市民の軍事訓練やそのインタビュー、日本人を含む国外からの志願兵、ブチャを離れた人々への取材など、現地の人々の様子や生の声を伝える写真や動画が多数あり、2時間連続しての講演であったが、生徒達も講演内容に聞き入り、あっという間に時間が経つというインパクトの強いものとなった。

講演では兵士や市民との個別のやりとりも紹介され、「私は逃げられない、国に残って家族を守る。ここには守りたいものが多すぎる」という女性兵士の言葉や、「私たちがやらなければ、誰も守ってくれません。故郷は自分たちで守らないといけないのです」という軍事訓練に参加する初老の市民の言葉など、生徒達がそれを反芻し自らの中で意味づけを深めていけるように工夫されたものであった。

講演の最後には、公演中に生徒各自がメモした内容を踏まえて、生徒からの質問にも応じてもらうことができた。「取材時に恐怖はなかったですか」「現地の人々の心的影響はどのようなものですか」「ロシアへの取材もしたいと思いますか」など、質問をする生徒が途切れることなく、講演終了後も会場に残り質問を続ける生徒も見受けられた。

また、「取材する際の言語は英語ですか」との問いに「英語は重要ですが、皆さんはまだ若いので、使える言語を英語以外にもう1つ持つことによって、これから自分が動ける世界が広がります」など、生徒の今後の勉学にも示唆的なお話しを伺うこともできた。

平和への思いを深めるだけでなく、国際紛争を通じて平和の持つ意味を今後も生徒達が探究していく1つの契機になった有意義な講演会であった。

4　成果と今後の課題

本校においては初めてのNIE実践校としての1年間であった。これまでにも個々の授業で新聞、ニュース、時事問題などの活用は行っていたが、時期、内容、頻度なども個々の教員の判断の下にその授業内での活動にとどまるものであった。

23年度は、管理職、教育研究部、図書館、国語科、社会科(公民、グローバル担当)等、各部署の連携の下に展開することができた。特に、探究活動でよく利用する図書館においては、全校生への啓発も兼ねて新聞の配置を再構築するなどこれまでにない全生徒に触れる実践的な取り組みもできた。

上記に紹介した各実践においは、新聞をとる家庭が減る中で、いかに紙媒体の新聞の有用性を生徒伝えるかについて、高3の生徒自身が考え中学生の後輩に伝えるという学年横断的な「新聞トーク」を実施できたことが中高一貫教育の本校としては特に意義深いものであった。次年度の実践においても、中高一貫校、高大接続等の本校の特徴を意識しながら更なる進化となるNIEの実践に取り組みたいと考えている。

【 高 等 学 校 】

多文化共生への橋がけ

～新聞記事のやさしい日本語書き換えを通して～

兵庫県立伊川谷高等学校　校　長　衣笠　正人
主幹教諭　福田　浩三

1　はじめに

2022 年 12 月末における在留外国人は 307 万 5123 人（法務省在留外国人統計より）であり、日本の人口約 12475 万人（2023 年１月１日、総務省統計局人口推計より）のおよそ 2.5%（40 人に１人）となる。この割合は今後増加が予想される。このため在留外国人とのコミュニティー作りや災害時や就学に関わる言語面での支援の充実は急務であると考える。

筆者は、これまでNIE 実践を通して生徒に

・幅広い分野における興味関心を高める
・情報の真偽を含め整理し理解する能力を得る
・効率よく効果的に情報を発信する能力を得る

など、今後のグローバル化・情報化社会に必要なコミュニケーション能力を生徒が獲得することを目指してきたが、近年在留外国人とのコミュニケーションに効果が期待される「やさしい日本語」を取り入れることで、生徒に多文化共生・国際理解を意識付けるよう心がけることとした。

2　本校の NIE 実践

本校における NIE 実践を**表１**に示す。

実践対象を全校生徒（全）・学年生徒（１学年は①、３学年は③）・１年コミュニケーション類型生徒 30 名（コ）に分け、それぞれに合わせた実践を行った。

表１　伊川谷高校の NIE 実践計画

	月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
NIE実践内容	a.　日刊紙各紙の設置		全	全	全		全	全	全				
	b.　朝日中高生新聞の配布	①	①	①	①		①	①	①	①	①	①	①
	c.　學年通信の配布	①	①	①	①		①	①	①	①	①	①	①
	d.　感想文のはがき新聞活用		①	①		①		①		①		①	
	e.　神戸新聞の購読			コ									
	f.　新聞読み方講座		コ	コ	①					コ			
	g.　ひょうご新聞感想文コンクール					コ							
	h.　やさしい日本語講演会						①③						
	i.　やさしい日本語書き換え講座						コ	コ					
	j.　夜間中学校との交流							コ					

a　日刊紙各紙の設置（全・６カ月）

生徒が登校時に目にする生徒昇降口に NIE 実践指定校として提供される新聞（時期により３紙または６紙）を、各紙記事の取り扱いが比較できるよう「今日の朝刊１面」として掲示した（**図１**）。各紙は毎日取り置きを行い、部数がそろった段階で学年の生徒へのNIE 実践に活用した。

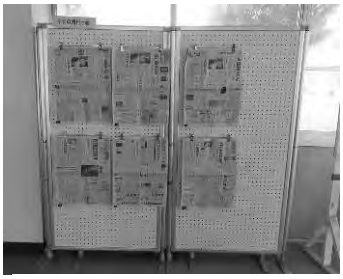


図１　日刊紙１面の比較掲示

b　朝日中高生新聞の配布（①・週１回）

１学年の生徒全員に「朝日中高生新聞（週刊）」を毎週配布し、朝の読書の時間（8:25～8:40）の読み物として活用した（**図２**）。本紙は紙面サイズが日刊紙に比べて小さく、内容も中高校生向きに読みやすくまとめられているため、生徒の新聞に対する固いイメージの軽減に役立った。

図２　朝の読書を利用した新聞購読

ｃ　學年通信の配布（①・週１回）

筆者が教師と生徒・保護者の連携した教育活動の実践を目指して研究を行っている学年通信（**図３** 以後、固有名詞の「學年通信」と表す）を１学年の生徒に毎週配布した。學年通信は日刊紙を模したデザインにて生徒の身近な活動を新聞形式で伝えるために、これも生徒の新聞に対する固いイメージの軽減に役立った。

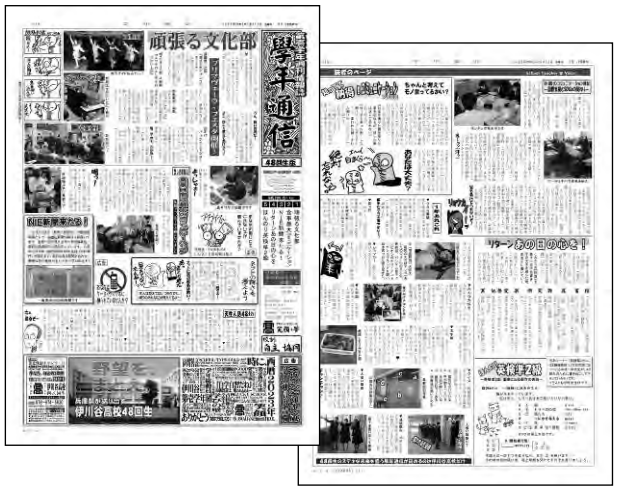


図３ 日刊紙に模した學年通信

ｄ　感想文のはがき新聞活用（①・学校行事毎）

新聞の持つ表現力を生徒に意識づけるため、校内行事ごとに課している感想文にはがき新聞を活用した。生徒は感想文を複数の内容に分け、見出しや絵を加え配置を考えることに

図４ はがき新聞による生徒感想文

より読み手に伝わりやすい表現を心がけていた（**図４**）。

ｅ　神戸新聞の購読（コ・４日間［6/19～22］）

１年コミュニケーション類型生徒30名が朝の読書の時間の読み物として神戸新聞朝刊を４日間購読した。この新聞は新聞読み方講座においても活用し、気になった記事について切り抜きし、「ひょうご新聞感想文コンクール」用の記事とした。この記事は２学期に実施の「やさしい日本語書き換え講座」においても活用した。

ｆ　新聞読み方講座

（コ＋①・４回［5/16・23、6/20、7/12］）

１年コミュニケーション類型生徒30名を対象に３回、外部講師による新聞読み方講座を実施し、新聞の持つ網羅性・一覧性・信頼性など新聞の持つ社会的役割や記事見出しの重要性について学習し、以後新聞を読む際に役立てた。また、新聞から読み解く国際理解・SDGs についても考えた。４回目は筆者が講師となり、１学年の生徒全員に対し、新聞における見出しの役割の重要性を伝える講演を行い、筆者掲載の過去記事を用いた見出し付け実践を行った（**図５**）。

図５ 見出し付け実践講演の様子

ｇ　ひょうご新聞感想文コンクール

（コ・夏季休業課題）

コミュニケーション類型の１年生30名を対象に、夏季休業課題として各自が読んだ新聞から最も興味・関心をもった記事を選び、その感想文を作成することで、新聞に対する興味・関心を高める試みを行った。生徒は感想

文の作成から、相手に伝わる文章の表現等について考えた。提出された感想文は授業担当者が校内選考を行い、２つの作品を「第14回ひょうご新聞感想文コンクール」に応募した。コンクール応募という目標を持たせることで、生徒の感想文作成にかかる意欲を高めるねらいがあった。

ｈ　やさしい日本語講演会（①③・１回［9/5］）

外部講師による「やさしい日本語」の講演会を行うことで、在留外国人とのコミュニケーションのみならず、日常会話においても母語である日本語について考え直す機会とした。この講演会は１学年に加え、３学年も一緒に聴講した（**図６**）。

図6　やさしい日本語講演会の様子

ｉ　やさしい日本語書き換え講座（コ・５回［9/12・19・26、10/3・10］）

１年コミュニケーション類型生徒30名を対象に、これからの社会のグローバル化を見据え、生徒が日常的に、小さい子どもや日本語を母語としない他者の観点で日本語を捉えることを目的にとして「やさしい日本語」を用いた新聞記事の書き換えを行った（**図７**）。

図7　新聞記事書き換えの様子

生徒が興味を持った新聞記事（「ひょうご新聞感想文コンクール」応募用に選んだ記事）を書き換え記事として活用し「やさしい日本語」を用いるだけでなく、Ａ５用紙という制約の中でより読み手に内容が伝わるようなまとめの工夫を行い、最後にその発表まで行うこととした。

初回は前述の「やさしい日本語講演会」を元に、文章の「やさしい日本語」を用いた書き換え演習を行い、２～４回目で生徒は選んだ新聞記事を元に、その伝えたい内容や要約として必要な箇所を選び出し、その内容を「やさしい日本語」を用いてＡ５用紙にまとめ直した（**図８**）。この際、新聞紙面を参考に、より内容が伝わりやすくなるように見出しや文言、紙面レイアウト等について検討した。書き換え作業は班内での意見交換や ICT を効果的に活用した。

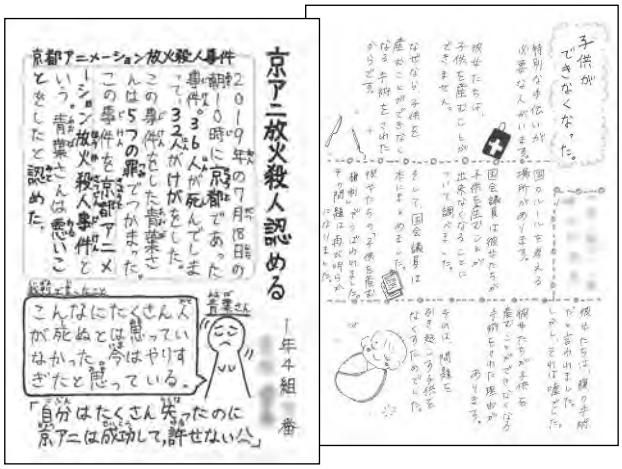


図8　生徒の書き換えた作品

最終回となる５回目は、まとめ直したＡ５紙面を用いて、生徒各自が興味を持った新聞記事の発表を行った。初めに班内発表を行い各班より代表者を選出し、その代表者がプロジェクタで拡大提示された自作品の紙面を用いて全体発表を行った（**図９**）。

図9　全体発表の様子

発表で生徒は記事の興味を持った点に触れながら書き換え記事の読み上げを行い、書き換え時の工夫点などを説明した。

※兵庫県 NIE 推進協議会の公開授業として実施。

３　国際理解教育への発展

「やさしい日本語」の学習を通して多文化共生に興味を待った生徒を対象に、NIE 実践指定校として新聞を活用した日本語教育にも力を入れている地元夜間中学校の生徒との交流を行った。当校は在籍生徒の８割が外国籍であり、本校の生徒４名が来校し、「やさしい日本語」活用を実践した。その内容は、同校教師手製のすごろくについて同校生徒と共に行う中で、本校生徒がルールの説明や進行役を担い、そのコミュニケーションにおいて「やさしい日本語」を活用した（図 10）。

図 10　夜間中学校との交流

４　まとめ

新聞による情報収集は、SNS のような情報の偏りもなく、その網羅性・一覧性から新たな気付きや学びを得ることができる。本実践ではその気付きや学びを他者に伝える目的でＡ５サイズのはがき新聞を作成した。その際に生徒は多文化共生社会を意識して「やさしい日本語」を使用した。

自身が他者に伝えたい事柄を、限られた紙面にてより伝わりやすい表現に変換する。これは日常における他者とのコミュニケーションにおいても常に念頭に置くべき重要な点といえる。

生徒は本実践における感想にて、

・難しい言葉を使おうとせず伝えていきたいなと思いました。

・あいまいな表現を避けて話す。

・小さい子にも役立つと思いました。

など、日常におけるコミュニケーションに対する意識の変化を述べていた。

今後は、これまでの NIE 実践を多文化共生・国際理解の導入と捉え、実生活に即した活用にまで発展させていく予定である。

＜参考＞　新聞アンケートの実施

朝日中高生新聞の配布（本報告**２．ｂ**）に対する生徒の反応を調査するため、Ｒ６年１月に１学年の生徒を対象にアンケートを行った（図 11）。その結果（図 12）より、生徒の身近に新聞を読む環境を整えることが NIE において重要であることが分かる。

【１】朝日中高生新聞を読むのは楽しみですか。

1. とても楽しみである　2. 楽しみである　3. あまり楽しみでない　4. 楽しみでない

【２】朝日中高生新聞は、どれくらい読んでますか。

1. しっかり読む　2. 気になる記事を少し読む　3. 少し捲る程度　4. 読んでいない

【３】２年生になっても、朝日中高生新聞を読みたいですか。

1. とても読みたい　2. 読みたい　3. あれば読む　4. 読みたくない

【４】自宅では新聞を購読していますか。

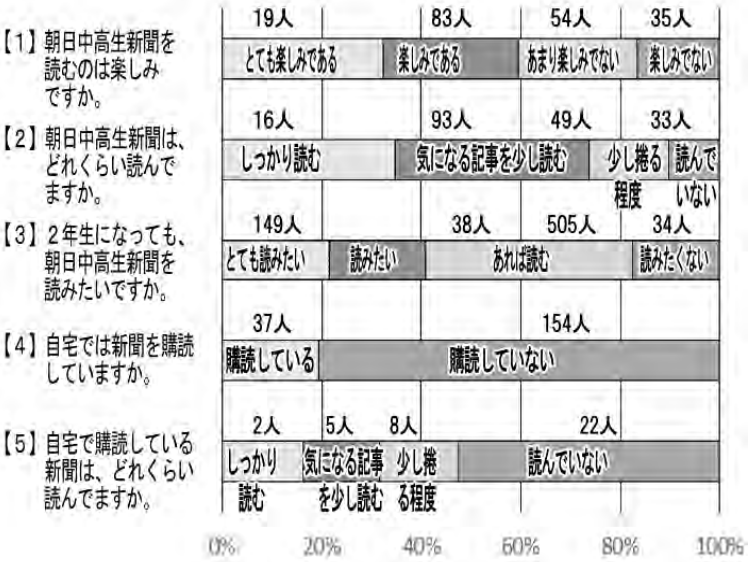
1. 神戸新聞　2. 毎日新聞　3. 朝日新聞　4. 読売新聞
5. 産経新聞　6. 日本経済新聞　7. 他の新聞　8. 購読していない

【５】自宅で購読している新聞は、どれくらい読んでますか。
（【４】で１～７を答えた人のみ回答）

1. しっかり読む　2. 気になる記事を少し読む　3. 少し捲る程度　4. 読んでいない

【６】その他、ご意見ご感想がありましたらお書き下さい。

図 11　新聞アンケーの質問内容　※有効回答数 191
【４】については選択肢１～７の回答を「購読している」として集計した。



新聞活用と総合学科の学び

兵庫県立須磨友が丘高等学校　　校長　　大久保　隆
教諭　　岩本　和也

1　はじめに

本校は全日制総合学科の高校であり、18 クラス、約 720 名の生徒が学んでいる。本校では、自己や社会を理解し、自分の生き方や社会への関わり方について考えていくことを目的に、1 年次全員が「産業社会と人間」を履修する。また、2 年次から始まる「課題研究」では、自らの関心に基づきテーマを決め、自分が立てた問いを検証していく探究学習を行っている。これらの学習の中では、新聞記事等を用いながら社会の情勢を知る活動も行っている。また、自己教育力を養い、生徒の創造性や表現力を豊かにすることを目的に、朝の読書（以下、朝読）の時間を設けている。このような取り組みを通して、時代を越えて変わらぬ真理を探究し続け、心豊かに生き抜くことのできる人材育成を目指している。

2　本校の教育活動における NIE の位置づけ

2023 年度は NIE 実践指定校の 2 年目である。22 年度は 1 年生を対象に、朝読の時間を利用して新聞記事を読む学習活動を行った。ふり返りアンケートからは、生徒の新聞に対する苦手意識がやや改善されたことが明らかになった。また、本校と同様に NIE 実践指定校である、近隣の神戸市立横尾小学校と「防災」をテーマにした小高連携授業を行い、大変有意義な実践となった。これら昨年度の実践の成果と課題を踏まえて実践を行った。

本校 1 年生を対象とした事前アンケートでは、新聞を取っている家庭は 49%（前年 32%）で、日ごろ情報を入手する手段としては、インターネット 85%（前年 86%）、テレビ 71%（昨年 73%）、新聞 5%（前年 4%）という結果だった。22 年度と比較して新聞を取っている家庭は多いが、新聞の利用率はほとんど変化がない。本校の生徒にとって新聞は馴染みがなく、そばにあってもなかなか手に取らないことがよくわかる結果となった。

3　実践の内容

（1）朝読における新聞学習

ア　概要

・朝読の時間帯に、1 年次と 2 年次で週 1 回新聞を読む時間をつくる。
・複数の記事から興味のあるものを選び、気になる箇所等に線を引き、ストックする。

イ　ねらい

・新聞記事を通して社会を知り、視野を広げるとともにアイデア創出のタネを集める。
・新聞記事を選び、読んだ内容から心に引っかかった部分をストックしていくことで、自分の関心の傾向や方向性を知る。

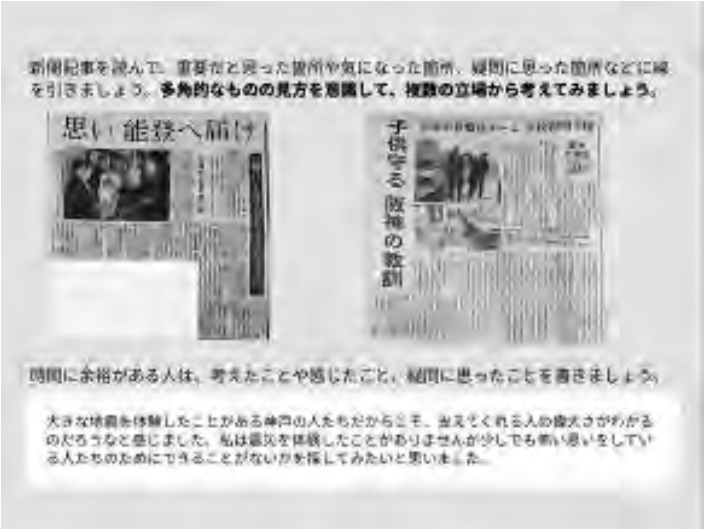


図 1　朝読 NIE ワークシートの例

ウ　実施方法

a　準備

・教師があらかじめ新聞記事を選ぶ。毎回２パターンを用意する。

・選んだ記事は、テキストカードに貼り付けた形で、ロイロノートの資料箱に準備する。

b　朝読の時間

・生徒はロイロノートを開き、資料箱から記事を選ぶ。選んだ新聞記事を読む。

・重要だと思った箇所、個人的に気になった箇所、疑問に思った箇所などに線を引く。

・（時間に余裕がある人のみ）記事の下のスペースにコメントを残す。

図１　NIE 朝読ワークシートの例

（２）いっしょに読もう！新聞コンクール

１年生の夏季休業中の課題として、生徒が興味を持った新聞記事を選んで切り抜き、記事を選んだ理由と記事に関する自分の感想や意見をまとめた。また、家族や友だち、クラスメートなどに自分が選んだ記事を読んでもらい、その人の意見を聞いたり話し合ったりした内容を踏まえて、最後に自分の意見・感想・提案・提言を行った。

生徒が自分で新聞を選ぶことで、生徒自身の関心事から社会課題への「気づき」を促し、家族や友だちとの対話を通して多様なものの見方や考え方を知る機会になった。

今年度、「球児『脱丸刈り』進む」（読売新聞 2023 年 8 月 17 日付朝刊）の記事を題材にした生徒の作品が奨励賞に選ばれた。

（３）兵庫県 NIE 推進協議会主催「記者派遣事業」

12 月 15 日(金)、１年生「産業社会と人間」の時間に、朝日新聞阪神支局より勝亦邦夫記者を講師としてお招きし、NIE 講演会を行った。勝亦記者からは、まず新聞の役割や記者の仕事について説明があり、その後「物事の多面性」をテーマにお話していただいた。具体例として「自然エネルギー」、「ふるさと納税」、「病院の統廃合」という３つの話題があり、新聞記事を含めた資料を踏まえて、複雑な問題を読み解いた。政策決定の背後にある多様な意見や、複数の視点からアプローチすることで、深い理解につながることを学ぶことができた。

〈生徒感想〉

・話を聞いて驚いたのは、多数派の意見ではなく反対派などの少数派の意見を聞いているということです。私の勝手なイメージでは、多くある意見を記事にしていると思っていました。ただ、実際に目指していることは公正で平等な取材をするということを聞いて、少し新聞のイメージが変わりました。

・講演会で、物事は複数から捉えられるということを知った。ニュースなどで取り上げられる社会問題や政治・経済は、賛成派と反対派から成り、人の感じ方によって意見が異なる。だから、その分話し合いが必要になる。私は、新聞を読む際に自分の価値観のまま思い込んでいたけれど、一度立ち止まって、違う考え方をする人もいることを認識して、今後の生活に活かしたい。

写真１　講演会の様子

（４）神戸市立横尾小学校との小高連携授業

ア　概要

a　日時：2023 年２月２日（金）

b　場所：神戸市立横尾小学校　普通教室

c　対象：小学６年生　２クラス（46 名）

d　内容：阪神・淡路大震災と能登半島地震

が起きた当時の新聞記事を用いて、「防災ジュニアリーダー」を中心とした高校生が防災授業を行う。

イ　ねらい

地元神戸で発生した阪神・淡路大震災と、2024年の１月１日に発生した能登半島地震に関して、それぞれの地震に際し、特に避難所について報道された記事から「避難所で困っていること」を読み取り、そこから見える共通点や、どのような支援が必要かを話し合い、さらには「自分たちがどのような備えをしておくべきか」を考えることをねらいとした。

また、小学生のグループに高校生がファシリテーター役として入ることで、相互に意見交流を行い、互いに学びを深められるように授業計画を立てた。

ウ　授業展開

①防災ジュニアリーダーとしての活動報告（東北訪問を経て）

②グループ活動（新聞記事を用いて）

・「兵庫県南部地震　支援の輪励みに助け合う被災者」（神戸新聞 1995年１月22日）

・「能登半島地震　避難３万人　足りぬ備蓄」（神戸新聞 2024年１月７日）

③グループを指名し、全体の前で発表（話し合った内容を共有する）

④振り返り、まとめ

写真２　グループ活動の様子

エ　高校生の振り返り

a　授業を通して、「新聞」や「報道」に対する考えに変化はありましたか？

・私の家庭では新聞をとっておらず、新聞を読む機会は学校での朝読 NIE の時間しかなく、苦手意識がありました。しかし、NIE を通して、新聞は今の日本や世界のことを知らせる重要な手段であり、自分なりに考えを持ちながら読んでいくと興味を持って読めると思いました。

・私は今まで新聞を読まないし、ニュースも見ませんでした。ですが、今回小学生も読むということで、この記事だけでもちゃんと読もうと思って読みました。意外と読みやすかったし、知らないことが書いてあったので、積極的に読んでたくさんのことを学んでいきたいと思いました。

b　あなた自身の「阪神・淡路大震災」や「震災」に対する意識は変化しましたか？

・阪神・淡路大震災は、小学生の頃から学んでいたけど、小学生に教えることによって、さらに防災への意識が変わったと思います。新聞を何回も読んだり、能登半島地震と比べたりして、日頃から災害に備えておくことが大切だと改めて感じることができました。家族や友人などいろんな人に防災を伝えていきたいと思いました。

・新聞記事を選び、小学生に何を伝えることが大切なのかを考えるという授業準備の過程で、意識の変化がありました。新聞記事を選んでいるときに地震発生から何日経過でどの組織がどのような行動をとっているのか深く学ぶことができ、防災意識が少し変わったような気がします。

写真３　全体発表の様子

４　23 年度の成果と課題

（１）成果について

年間を通して、1・2年生は朝読の時間に新聞記事を読む学習活動に取り組んだ。ふり返りアンケートでは、「この活動を通して自分の力が伸びたと思うか」という質問に対して

①記事を読み取る力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 93.1%（昨年 94.0%）

②考えや思いを表現する力は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 88.4%（昨年 91.1%）

③社会への関心は、「とても当てはまる」「やや当てはまる」を合わせて 94.4%（昨年 96.3%）

という結果になり、昨年よりはポイントが落ちたものの、成長の実感へと繋がったことが伺える。

また、「新聞に対するイメージ」では、①面白くないと回答した生徒が活動の前後で 79.1%から 56.3%に減少（昨年 76.6%から 47.6%に減少）

②大人向け（高校生が読むものではない）と回答した生徒は 61.4%から 41.0%に減少（昨年 60.3%から 41.2%に減少）し、昨年同様、新聞への苦手意識が減り、新聞に対するイメージがやや改善されたと思う。

神戸市立横尾小学校との小高連携授業では、昨年より内容がよくなっていると小学校の担当者から伝えていただいた。小学生は、新聞記事をよく読み、問いの答えを読み取ろうとしていた。中には苦戦している児童もいたが、高校生らのサポートを受けながら、真剣に取り組もうとする姿が見られた。読み取った内容をもとに児童同士、あるいは児童と高校生との間で話し合い、意見交換することができた。複数の新聞を比較することで、時代による変化や、時代を経ても変わらない課題について考えることができた。高校生にとっては、小学生に教えるという体験を通して、防災に関する意識がより高まる機会となった。

（２）課題について

朝読 NIE の時間では、時間に余裕がある人のみ記事に対するコメントを記入するような仕組みしていたため、取り組む姿勢は生徒によって差が生まれた。上記のアンケート結果を見ても、記事を読み取る力や社会への関心と比べて、考えや思いを表現する力が伸びたと感じる生徒の割合が小さい。ただ自由にコメントを書くのではなく、段階的に書く力を身につけることを念頭に置いたワークシートの設計が必要だと考えられる。

神戸市立横尾小学校との小高連携授業については、2年間続けて防災をテーマとした。その他の時事的な出来事を扱うなど、別のテーマでの実践も検討したい。

新聞を通しての社会課題の発見と課題解決能力の育成

兵庫県立加古川西高等学校　　校　　長　　魚井　和彦
主幹教諭　　蓬莱　真吾

1　はじめに

本校は 2022 年度より指定を受け、NIE を実践することとなった。 最初に、新入生が実際にどれくらい新聞を読んでいるのかを調査した。その結果、定期的に新聞を読む生徒は各クラスに２～３名程度であり、ほとんどの生徒が新聞を読まず、スマートフォンやテレビでニュースを見るということだった。これは昨年度と同じような結果で、このことから、多くの生徒が、新聞を身近なものとは感じず、また社会の出来事に広く興味を持たないという印象を抱いていることがわかった。

2　新聞活用実践

（1）「新聞のコーナー」

昨年度に続き、各階の、生徒の目に最も触れやすい廊下に新聞を配置した。今年度からは、生徒ができる限り積極的に触れられるよう、教室への持ち込みを許可し、放課後に持ち帰りたい場合も自由とした。

（2）「総合的な探究の時間における活用」

＜１学年＞

１年次は、「探究の型」を身につけることをねらいとした。

１学期は、加古川市の「ごみ問題」をテーマとして、グループ学習形式で・新聞を主とした情報源からの情報収集・整理・分析という探究の手法・サイクルを学んだ。

２学期は、引き続きグループ学習形式で「地域の活性化」というテーマを「加古川市の魅力を伝える」、あるいは「加古川市の問題解決」のどちらかのアプローチで新聞を活用しながら、１学期の学びを深化させた。

３学期は、１・２学期のまとめとして、２学期の取り組みをクラス内で発表し、各クラス代表班が「78 回生探究発表会」で取り組みを紹介した。

＜2 学年＞

２年生は、１学期にディベート、２学期は１年次に身につけた「探究の型」をもとに、生徒一人ひとりが社会課題を発見し、課題解決に向けての探究活動を行った。

ディベートの際には、「立論」「反駁」「質疑応答」を準備するにあたり、事実確認や議論の根拠として新聞を活用した。取り組んだテーマは下記の通り。

ディベートのテーマ

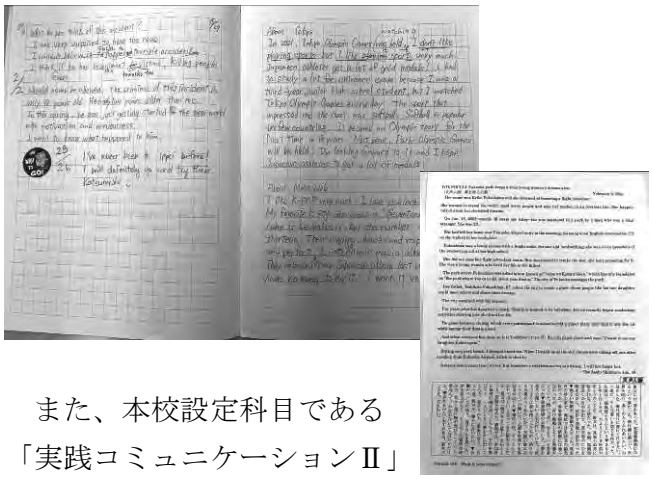
日本は有罪判決を受けた者に対する電子監視制度を導入すべきである
日本は企業に対する正社員の解雇規制を緩和すべきである
日本はフェイクニュースを規制すべきである
日本は積極的安楽死を法的に認めるべきである
日本は首相公選制を導入すべきである
日本は外国人労働者の受け入れを拡大すべきである

（３）「英字新聞の活用」

本校には国際市民類型が各学年に１クラス設置されており、グローバルな視野を持つ人材の育成を目指している。この NIE 事業により、英字新聞“The Japan News”が各クラスに設置できることになり、生徒たちが関心のあるニュースを英語で読むことができる機会を提供することができた。また、授業や課題などでも新聞を活用した取り組みを行っており、その一部を紹介する。

＜2 年生における活用例＞

本校では、新聞のコラム欄が日本語と英語の両方で書かれたものを、毎朝全職員と全校生に配布している。国際市民類型の生徒たちは、自分の関心のあるトピックについて英語でジャーナルを書き、定期的にALTに提出し、添削をしてもらっている。



また、本校設定科目である「実践コミュニケーションⅡ」の授業で英語ディベートに取り組んでおり、その資料を探すために新聞を活用した。

＜３年生における活用例＞

「実践コミュニケーションⅢ」の授業で、「私たちの目から見た世界の諸問題（What’s going on around the world?)」というタイトルでグループ発表を行った。紙の新聞をめくることで、今世界各地にどんな問題が起こっているのかをリアルタイムで知ることができ、テーマ探しに役に立った。また、情報収集の手段として、インターネットだけではなく新聞を活用することで、物事をより多角的に見る力をつけることができると考える。

各グループの発表テーマは下記の通り。

	トピック
1	Desertification
2	We High School Students Project Developing Countries
3	Halt Diversity Loss
4	Zero Hunger SDGs [Goal 2]
5	Food Loss
6	Life below Water
7	Sustainable Cities and Communication
8	Water and Our Living
9	Reduce Inequality within and among Countries
10	For Developing the Quality of Education
11	Things We Can Do to Achieve “Economic Equality ”
12	Ocean Plastic Problem
13	Equality of Education
14	What Can We Do about Water Problem

3　読売新聞姫路支局　古市 豪氏の講演会

「新聞記者の仕事とは」2024 年３月１日
（対象本校１年生）

（１）「78 回生探究発表会」の講評

「地域の活性化」という観点から各クラス発表班が選んだテーマは、視点が良く、非常によく調べられていると講評をいただいた。そして、インターネットで調べることも大切だが、生の声を聞くことやアンケート実施など自分だけが得られる情報を盛り込むことが発表をよりよいものにすると教えていただいた。

（２）新聞記者と記事

「いくつかの例を挙げて、何か資料を見て書くなら誰でもできる。取材の力が記事をよいものにする。」わかりやすく、人を引きつける記事を書くために心がけておられることを話していただいた。

（３）質疑応答（抜粋）

Q1: 取材を断られた場合はどうしますか。

A1: 日が昇る前や暮れる頃に自宅前で待機して、取材に応じてくれるまでねばります。あるいは、発想の転換を試み、取材に応じてくれそうな人を探します。

Q2: ネタ切れになることはありますか。

A2: あります。その場合は、北海道から沖縄まで支局があるので、全国からネタを収集したり、市の広報から書けることはないか検索をかけたり、事件なら情報更新の取材をして、続報を記事にします。また、自分が以前書いた記事を再構成して、新たに記事にします。

Q3: 一番しんどかった取材は何ですか。

A3: 殺人事件でお子さんを亡くされた方や震災で家族を失った方への取材でした。私も辛く悲しい気持ちになりました。しかし、書く気持ちを奮い立たせ、話してくれた方の思いを大切にして、きちんとした記事にしたいと思い、記事を書きました。

Q4: 記者の仕事のやりがいは何ですか。

A4: 書いた記事がおもしろいと電話やお便りをいただいた時です。自分の記事に反応があると嬉しいし、ないと悲しいです。原稿は書けば書くほどうまくなります。他の記者が書いた記事も読んで、良いと思う表現は書き取り、わかりやすい記事はスクラップにしています。みなさんに知ってもらいたいことや役立つ情報を書くように心がけています。

4　新聞に関する実態調査

（１）廊下新聞と教室新聞の設置

生徒に新聞を読む習慣を身につけさせるために、通行量の多い廊下に新聞（産経、毎日、朝日、神戸、日経）を設置した。さらに、国際市民類型の教室には、日刊英字新聞を４か月間のみ設置した。

（２）アンケートの実施と調査結果

今年度の振り返りと来年度に向けた改善案を検討するために、Google Form を用いてアンケートを行った。本校の２学年の 264 人を対象とした。

第一に、生徒が新聞を読む習慣について調査した。

結果Ⅰ　教室や廊下で新聞を読む頻度

①毎日読んだ（0.0%）
②時々読んだ（4.5%）
③殆ど読んでいない（17.5%）
④一度も読んでいない（78.0%）

➡「一度も読んでいない」と答えた生徒の割合が８割と高く、ほとんどの生徒は新聞に関

心が無いことが判った。

結果Ⅱ 自宅で新聞を読む頻度
①ほぼ毎日読む（3.0%）
②週に２～３回読む（5.7%）
③時々読む（20.8%）
④読まない（70.5%）
➡「読まない」と答えた生徒が約７割に及び、自宅でも新聞を読まない生徒が多いとわかった。

次に、生徒が新聞を読まない理由について調査した。

結果Ⅲ 新聞を読まない理由（複数回答可）
①テレビやインターネットなど他の情報で十分だから（78.0%）
②読む時間がないから（31.1%）
③新聞は読みにくいから（30.7%）
④購読料が高いから（18.9%）
⑤処分が面倒だから（10.6%）
➡テレビやインターネットの情報で十分だからという理由が８割弱と一番多かった。また、そもそも新聞を読む時間がないことや、新聞は読みにくいものだという印象が、新聞離れを引き起こしているとわかった。

生徒の新聞離れの解決策を探るために、生徒の関心事を探った。

結果Ⅳ 関心の高い新聞のコーナー（複数回答可）
①スポーツ面（43.2%）
②天気予報・気象情報（34.8%）
③ラジオ・テレビ面（31.4%）
④文化・芸能面（16.3%）
⑤国際面（15.2%）
➡スポーツ面、天気予報・気象情報、ラジオ・テレビ面への関心が高いことがわかった。反対に、経済面や株式・投資情報面など、お金についての内容への関心が著しく低かった。

（３）今後の取り組み
アンケート調査の結果を踏まえて、今後取り組むべきことは、新聞を読む意義や、新聞ならではのよさを考え、一緒に体験していくことが必要であると考える。そのために、来年度も教室や廊下の要所に新聞を設置していきたい。特に、生徒の関心の高いコーナーだけでなく、生徒に読ませたい記事を切り抜いて掲示するという工夫を行う。学校でいつでも気軽に読むことのできる新聞コーナーとしたい。

今後も新聞を活用することで、「変化の激しい時代を柔軟に生き抜く力」を養っていきたい。

５　まとめ　～2 年間の指定を受けて～

「新聞を通して社会の課題発見と解決能力の育成」を２年間のテーマとして取り組んできた。課題発見と解決能力の醸成は、教育の中で重要な役割を果たしている。本校における探究学習では、「課題」を考えさせる際に身近な事柄からアプローチしているが、残念ながら、その多くは社会との関連性が不足している。また、新聞の活用や広い社会への関心も十分ではないと感じる。SNS 上で得られるニュースは、個々人の関心事に基づいた情報が増える一方で、AI の発達とともに、関心が低いニュースに触れる機会が減ってしまっている傾向にある。

「新聞をめくる」過程で、ちょっとした話題に目が留まったり、関心のないニュースの見出しに触れたりすることがある。このようなアプローチは、誰もが新聞にアクセスしやすくするための取り組みの一環だが、まだまだ十分とは言えない。今後も、より多くの生徒が新聞に触れる機会を増やしていけるよう努めていきたい。

探究活動に資するNIE

神戸市立葺合高等学校　　校長　　森田　哲司
教諭　　高野　剛彦

1　実践の概要

神戸市立葺合高等学校は、昨年度（2022年度）から「**新聞で育成する多様な視点・価値観をもったグローバル人材**」を研究テーマに研究を推進してきた。２年目にあたる本年度は、新学習指導要領になって必須となった「総合的な探究の時間」をはじめとする探究活動に新聞（NIE活動）がどのように資するのか、に焦点化して実践を進めた。

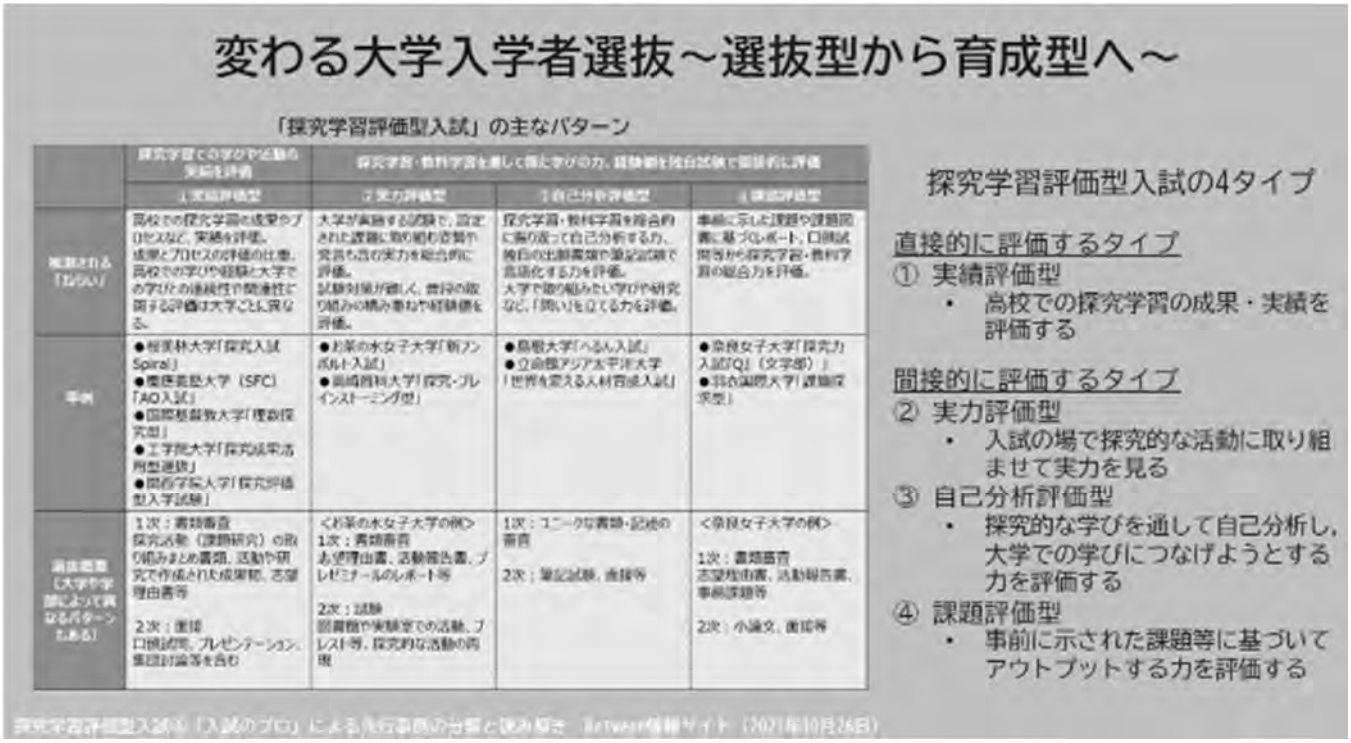
学校推薦型選抜や総合型選抜などいわゆる「年内入試」が入学定員に占める割合は年々増加し、河合塾の調べによると2021年現在、私立大では58%、国公立大でも21%に上る。年内入試では「総合的な探究の時間」の成果や実績を直接的・間接的に評価する「探究学習評価型入試」が年々増加しており、探究は新学習指導要領への対応というだけでなく進路実績向上のためにも火急の課題となっている。

大学でも高校時代の探究学習の経験が、入学後の主体性や研究活動にプラスに影響するとのエビデンスが次々と出されるようになり、高大接続においても従来の出張講義や指定校・協定校に代わって、探究が主流となりつつある。

このように探究に対する期待はとても大きいものの、担当する教員や実践する生徒には負担感も大きい。

現在多くの高校では、探究の担当となった一部の教員が手探りでカリキュラムを計画・立案し回しているというのが実情である。

そこで新聞を活用することで、比較的容易に、誰でも以下のような探究ができるのではないかと提案したい。



２　新聞を活用した探究活動の提案

①トピックの選定

学校設定テーマに沿って、あるいは生徒一人ひとりの興味・関心にしたがって探究課題を設定させ、それに関連する新聞記事を探させる。

②記事の分析

選んだ記事を読み、問題点や主張されている解決策に注目させる。

③ディスカッション

グループに分かれて、選んだ記事について意見交換を行い、解決策に対する異なる視点を探らせる。

④追加情報の収集

新聞記事だけでなく、書籍、学術論文、オンライン記事などの異なる情報源を活用して課題について深く掘り下げるよう促す。

⑤提案の作成

選んだ課題に対する自分なりの解決策を提案し、その根拠や理由を明確にまとめる。

⑥プレゼンテーション

各グループは自分たちの提案をクラスでプレゼンテーションし、他のクラスメートからフィードバックを受ける。

⑦全体ディスカッション

プレゼンテーション後には全体のディスカッションを行い、異なる提案や解決策について生徒たちが考えを共有できるようにする。

この探究活動を通して、生徒たちは社会問題への洞察を深め、解決策を検討する際の批判的思考や協働スキルを発展させることが期待できる。

３　新聞を活用した探究活動の優位性

探究活動に新聞を活用することは、以下のような優位性がある。

①現実的な情報提供

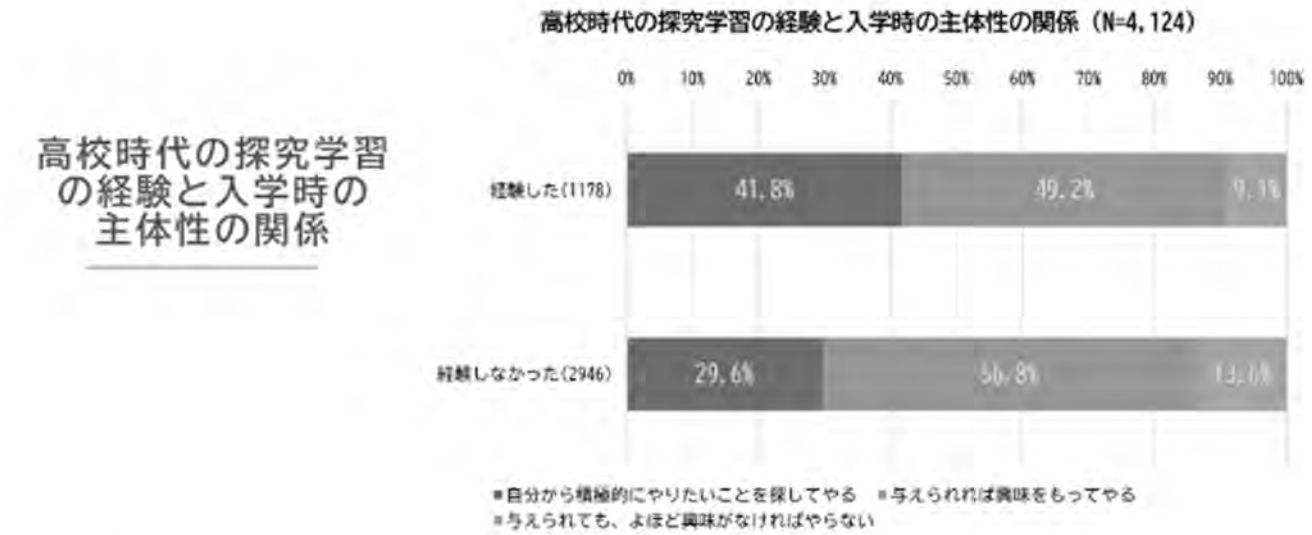
新聞は日々の出来事や最新の情報を提供するため、生徒たちがリアルな社会の出来事にアクセスできる手段を提供する。

②多様な視点の提供

異なる新聞が異なる視点や意見を提供するため、生徒たちは複数の立場から問題を理解することができ、批判的思考を発展させることができる。

③情報の信頼性の向上

新聞は一定の編集基準に基づいて情報を提供するため、生徒たちは信頼性の高い情報源から情報を収集し、批判的に評価する能力が向上する。



ベネッセ教育総合研究所　第4回大学生の学習・生活実態調査 データ集［2021年］（https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772）

④文章リーディングのスキル向上

新聞記事には通常、要約が含まれており、生徒たちは主題を把握しやすく、文章の要点を抽出するスキルを向上させることができる。

⑤リサーチスキルの向上

生徒たちは新聞を利用して情報を探し、選別し、まとめるスキルを磨くことができ、これは大学入学後の研究や学問にも役立つ。

⑥リアルな言語の使用

新聞記事は一般的にリアルで実用的な用語を使用しており、難解な学術語や時事用語には解説もついているので、定義を踏まえたうえで誤用を避けることができる。

以上のように、新聞を探究活動に組み込むことで、生徒たちの情報リテラシー、批判的思考、リサーチスキルを向上させることが期待できる。

4　総合型選抜など大学入試で期待できること

総合型選抜対策として新聞を活用した探究活動を導入することで、以下のような幅広い知識や情報リテラシーを身につけることが期待できる。

①時事問題への対応

新聞を通じて最新の時事問題を把握し、その背景や影響を探究することで、社会への理解を深めると同時に、大学入試で求められる総合的な視点を養う。

②論述力の向上

新聞記事を読んで自らの意見を形成し、それを文章で表現する練習を行うことで、論述力が向上し、エッセイや小論文対策に役立つ。

③情報検証のトレーニング

新聞記事に含まれる情報の信頼性を検証するスキルが養われる。入試問題において正確な情報を取捨選択できる力が向上する。

④社会問題への洞察

新聞を通じて様々な社会問題に触れ、その背後にある構造や背景を理解することで、入試で社会問題に関する知識や洞察が問われることに備える。

⑤ディベートや討論の機会を得る

新聞記事に基づいてディベートや討論を行うことで、面接試験やグループディスカッションの対策とスキル向上に繋がる。

⑥口頭試問・質疑応答の実践

新聞記事に対する質疑応答形式の発表会を

通じて、情報を理解し、それに基づいて適切に答えるスキルが鍛えられ、面接での口頭試問対策にも役立つ。

５　成果と今後の課題

以上のように、探究に新聞を活用することで、校種を問わず誰でも容易に探究の量と質の確保ができることが分かった。この取組を推進するためには、英字新聞を含めた主要紙が無料でそろうＮＩＥ実践校制度は大変ありがたかったし、必要不可欠であった。今年度で指定校は終了してしまうが、記事の有料配信を活用するなど、取組を継続していきたい。

願わくば、学校現場の要望を聴いて頂き、学校代表アカウントによる記事の有料配信など柔軟に対応していただけないだろうか。

新聞から今とこれからを学ぶ

神港学園高等学校　　校長　　中野　憲二
教諭　　小樂﨑　一基

１　はじめに

2022 年度から NIE 実践校となり、新聞を用いた学習を担当することとなった。22 年度は現社探求（特進コース）での実践を中西正和教諭が行った。23 年度の実践は第２学年全員（約 320 名）を対象に行おうと考えた。本校では１校時（9：10～）が始まる前に０校時（8：40～9：00）という、各教科の小テストや単語や漢字の学習などの朝学習の時間がある。曜日によって取り組む教科が決まっており、月曜は国語、火曜は英語、水曜は地歴といった具合である。この０校時を利用して、新聞を活用した学習に取り組み、生徒たちの「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」の育成に繋ぐことができればと考えた。

２　実践の概要

（１）新聞に関するアンケート

実践の対象は上記に記した通り、第２学年全員（約 320 名）を対象に０校時の時間を使って行う（基本的に週１回、今年度は水曜日を利用）。本校は第２学年が入学時（2022 年度）から生徒全員がタブレット端末を持つようになり、ICT 教育が導入されている。今年度の NIE 実践はタブレット端末を使って行うこととした。使用するアプリは「ロイロノート」を使う。このアプリを使用している学校も多いと思うが、一斉にプリント（PDF）の配布や提出、アンケートや小テストを行ったり、またその集計もしてくれる。このロイロノートを用いて、まずは「新聞に関するアンケート」を行った。質問項目は７つ。【１】あなたは普段、どのような手段でニュースや記事を読んだり見聞きしたりしていますか。【２】あなたの家庭では「紙」の新聞を購読していますか。【３】購読している（または読んでいる）新聞はどれですか。【４】最近、家庭や学校で、どのくらい新聞を読んでいますか。【５】新聞を読むときは、1 日にどれくらい読みますか。【６】新聞を読むとき、主にどの面から読みますか。【７】いつも読む記事はどの記事ですか。以上の項目を選択式（あるいは複数選択式）で回答させた。

（新聞に関するアンケート）

回答結果は以下の通りである（一部抜粋）。

【１】どのような手段でニュースや記事を読むかという質問の回答では、ネットニュースが 28.2%、テレビが 26.8%、ブログや SNS が 24.7%、友人・知人が 15.7%、「紙」の新聞が 2.4%、その他が 2.1%という結果だった。

【２】「紙」の新聞を購読しているかという質問の回答は、「購読しておらず、普段読まない」が 69.3%、「定期購読している」が 26.3%、「購読はしていないが、読みたいときに読む」が 4.4%だった。

【４】最近どのくらい新聞を読むか、という質問に対しては、「全く読まない」が 75.6%、「ほ

とんど読まない」が 14.2%、「ときどき読む」が 8.7%、「毎日読む」が 1.5%だった。

以上の結果から、本校の第２学年の生徒はほとんど新聞を読んでいないことがわかる。定期購読している家庭は約３割あるが、新聞を読んでいる生徒は約１割である。彼らのニュースや記事を読む手段はほとんどがネットや SNS、テレビなどであり、日常的に新聞に接している生徒は非常に少ないということがわかった。このような現状に基づいて、以下の目標を設定した。

①新聞に触れさせて、新聞に興味・関心を持たせる。
②新聞を読み、現在の様々な情勢を学ぶ。
③新聞を読み、学習する力を修得する。
④新聞報道の特徴を理解する。

（２）新聞について

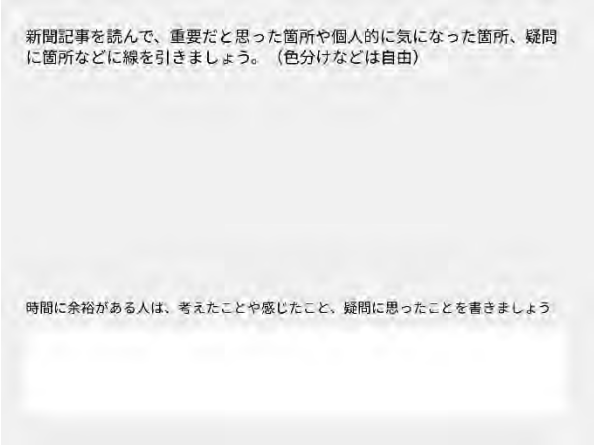
毎日配達される新聞２紙は、第２学年が使用している校舎にあるキャリア教育推進室前の棚を借りて配置させてもらい、生徒が自由に手に取れるようにした。そして、毎月配達される新聞２紙も以下のような組み合わせとした。

朝日・産経＝５月、９月、11 月、２月
毎日・読売＝６月、10 月、１月、３月
神戸・日経＝７月、８月、12 月

生徒が少しでも新聞に触れられるように、各クラス担任からも、新聞の設置場所をアナウンスしてもらった。また、第２学年だけでなく、第３学年にも新聞に触れる機会があればと考え、第３学年が多く利用する、キャリア教育推進室を配置場所に選択した。

（３）０校時での取り組み

０校時での取り組みは、ロイロノートを使用してカードを配信する。



（配布したカード）

（提出させた例）

このカードに毎回様々な記事を貼り付けて、その記事を読ませ、感想を書かせて提出させる。カードに貼り付ける記事は、１つ～２つ。記事の選定は基本的に私が行うが、視点が偏ってしまうので、２学年所属の他の先生方にも手伝ってもらい選定する。記事の内容は、１面記事はもちろん、政治・経済、国際、社会、スポーツ、教育など、生徒がとっつきやすいものから少し難しいものまで多岐にわたる。第２学年の総合的な探求の時間では、SDG s の問題に取り組んでいたので、それに関する記事も多く扱った。私個人が選んだ記事で多かったものは、「時代の変化」を主題にした記事が多かった。ＡＩの進化や制度の変化、新たな職業や、考え方の変化、世界情勢の変化など。今どのようにして時代が変化していっているのか、現代のめまぐるしく移り行く時代の変化に、いち早く触れるには新聞記事を読むのが

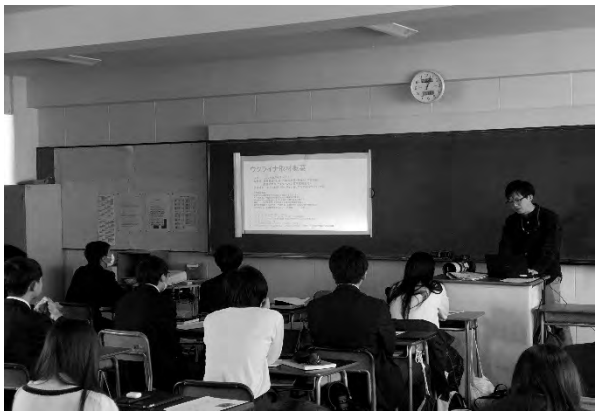
良いと感じたからである。こうして、週１回、たった 20 分ではあるが、様々な新聞記事を読み、色々な考え方に触れ、様々な情勢の流れを学ぶ機会がつくれればと考えた。

また、こうした新聞記事を読むことで知識を増やすだけでなく、「読解力」を養い、感想を書かせることで「表現力」も修得させるねらいがある。本校生徒の伸ばしたい力だと考えているからである。なので、なるべく「読んでみたい」と生徒が思える記事を選ぶように工夫した。

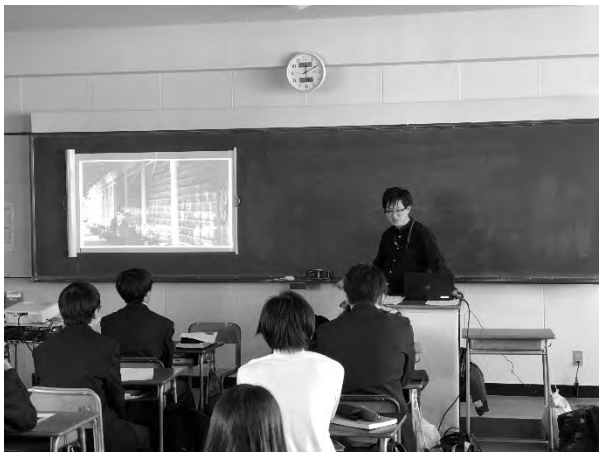
（４）記者派遣

2023 年 11 月 14 日、産経新聞大阪本社写真報道局の彦野公太朗氏に来校していただいた。2 年生進学コースの 31 名を対象に、新聞社のフォトグラファーについて説明していただき、そして、彦野氏が行ったウクライナ取材の報告をしていただいた。取材を行った当時の戦況やキーウ市民の様子、被害状況などを現地で取材した写真や動画をスクリーンに映しながら、講演を行っていただいた（＜写真４＞＜写真５＞）。戦地の様子を生で見て取材をした人の話を、生徒たちは真剣に聞き、色々なことを感じ取れたようであった。彦野氏のような人が取材に行きカメラで撮影した写真で新聞記事ができあがるということを知って驚きとその凄さがわかったと感じる。短い時間であったが、彦野氏の講演が聞けた 31 名はとても貴重な時間を過ごせたように思う。

＜写真４＞



＜写真５＞



―生徒の感想―

・ロシアとウクライナの戦争について、自分と違う 1 人の意見を聞けたりして勉強になった。ロシアだけが悪いのではなく、ロシアとウクライナどちらも悪い点があるから今現在も対立していると彦野さんは仰っていて、そういう考え方もあるのだと理解しました。彦野さんのカメラマンとしての生き方は、すごく壮絶で楽な人生ではなかった。でも、それでもやりがいを見つけて生きている彦野さんを見て尊敬しました。

・カメラマンの取材の話を聞くのは初めてで、カメラについて聞くのもすごく興味があったし、ウクライナの戦争について、実際に行った人の話を聞ける機会はないと思ったので楽しかったです。思っていたよりももっともっとつらい状況で普通に生活できていることは当たり前ではないなと思いました。日本では地雷や銃器などがあることは有り得なくて、ウ

クライナでは色々なところに地雷があるから恐ろしいし、小さい頃から戦争の辛さについて学ばされるのはすごく可哀想です。戦争がなければウクライナ人は今こんなつらい思いをしてないし、幸せな生活が当たり前にあったと思います。自分たちが今ちゃんと生活できていることは当たり前ではないから、一日一日を大切にしていきたいしもっと感謝しようと思いました。早く戦争というものが無くなれば良いなと思います。

・最近私はロシアとウクライナの戦争情報をマスメディアで目にしていなかったので、こうして現代で起こっている事を現地に行った人の話を聞くことができて本当に良かったです。彦野さんの話を聞いて、私たちが毎日過ごしているのは、当たり前ではなくて、とても特別でかけがえのない日々なんだと改めて分かりました。ウクライナへの募金やそういった些細な事が 1 人の命を救う行動なのかなと思うことができました。一人の人間を救えるような人になります。

３　おわりに

23 年度の終わりに NIE 活動に関するアンケートをとった。質問項目と結果は以下の通り。【１】0 校時 NIE を通して、新聞やニュースに触れる機会は増えましたか→「増えた」「少し増えた」:63.8%、「あまり変わらない」:36.1%。【２】0 校時 NIE を通して新聞に対しての興味・関心について→「興味・関心を持てた」「興味・関心を少し持てた」:56.9%、「あまり変わらない」:33.2%、「興味・関心をあまり持てない」「興味・関心を全く持てない」:9.9%。【３】感想→「今までニュースや新聞をよく見ることがあったが、深く考える事はしていなかったので NIE を通して深く考える事が出来たので良かった。」「NIE を通して自分たちが暮らす社会のことを知る大切さを感じさせられました。新聞などの記事を読み解くことはこれからの大学入試などの論文などにも役立つことだと思うので、日頃から新聞を読んでいこうと思います。」「NIE を通して朝からニュースを見ることも増えたし、難しい内容があれば調べて理解しようという行動が増えて良かったです」「この世の中のことが色々と分かってきた。これからの事も色々と勉強になりました。」「新聞を読むことで、これからの生活に活かすことができたり、誰かのためにチカラになることができる可能性が増えるのでないかと感じた。」
など。

1 年間の NIE 活動を通じて、２の（１）で挙げた①～④の目標を達成することはなかなか難しいものであった。僅かながら達成できたようにも感じるし、全く達成できなかったようにも感じる。もっと深く、もっと時間を使った授業の展開を計画すれば良かったと反省している。

しかし、この NIE 活動が生徒たちにとって一人でも何かの刺激になり、何かの役に立ってくれれば幸いである。私自身この NIE 活動を通して、色々な視点で物事を見ることができ、新たな発見があり、新たな経験となった。この活動を通して得たことをこれからの授業にも活かしていきたいと考えている。

最後になりましたが、このような学習の機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

新聞を身近に ～見る・読む・つくる～

クラーク記念国際高等学校連携校　校長　片山　義弘
専修学校クラーク高等学院芦屋校　教諭　間嶋　由子

１　はじめに

本校は、全国各地にキャンパスを持つ広域通信制高校である「クラーク記念国際高等学校」と教育連携をする、全校生徒約 310 名の学校である。本校の教育理念は「夢・挑戦・達成」であり、生徒一人ひとりの夢の実現に向け、好き・得意を伸ばす教育として、特色ある３つのコースと５つの専攻を設置している。また、専修学校クラーク高等学院芦屋校の教育理念として、「次のステージで活躍できる人材の育成」を掲げ、主体性を持った生徒の育成を目指している。

2022 年度は、科目授業における取り組みを主に実施したが、23 年度は本校の特色でもある専攻において取り組みを実施した。また、普段あまり新聞を読むことがない生徒たちが、新聞に触れる機会をさらに増やすことが出来るような取り組みを実施した。

２　実践内容

（１）閲覧コーナーの設置

昨年度に引き続き、本校では５・６月と 10・11 月に、朝日新聞・毎日新聞・読売新聞・日本経済新聞・産経新聞・神戸新聞の６紙を提供していただいた。これらの新聞は、昨年度同様、図書室前のフリースペースに「NIE 新聞閲覧コーナー」を設け、生徒たちがいつでも読んだり活用したりできるようにした。過去の記事も同じ場所に置くことで、日々のニュースを追いかけるだけではなく、授業等でも活用できるような環境を整備している。（図１参照）

図１

しかし、この閲覧コーナーには、「生徒が自主的に閲覧コーナーに来なければ、新聞に触れる機会をふやすことができない」という懸念点があった。そのため、生徒が毎日目にする、正面玄関にある掲示板に、新聞を扱った掲示を行った。

掲示は大きく分けて２種類のものを行った。１つ目は、教員が新聞の中から記事を取り上げ、その記事について紹介するものである。その際、本校が提供していただいている新聞の種類を踏まえ、全国紙である５大紙と、地元紙である神戸新聞の違いに注目することが出来るような掲示を行った。それにより、取り上げている記事の違いや、文章の書き方の違い等に生徒が気づくことが出来るような掲示を行うことが出来た。（図２参照）また、より多くの生徒の興味を引くことが出来るように、新聞の内容に関連付けた教員のエピソードも紹介することにより、生徒が掲示に目を

向けることが多くなるように取り組んだ。（図３参照）

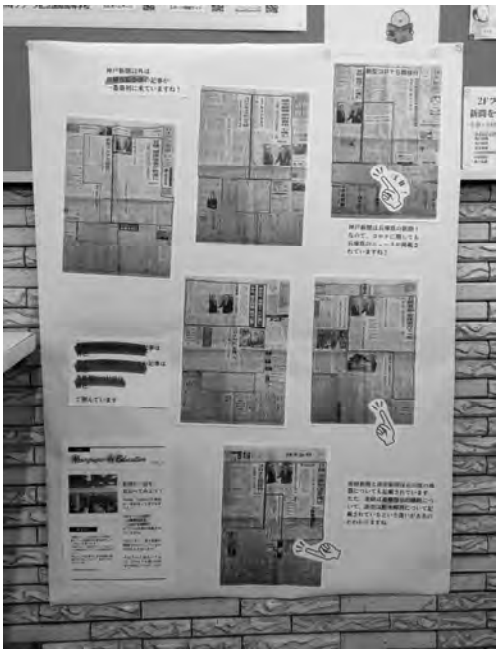


図 2

図 3

２つ目は、新聞の要約である。毎週月曜日の神戸新聞の中身を１枚の紙にまとめ、生徒への掲示を行った。この取り組みを始めたのは夏休み明けからである。夏休み前の生徒の様子を見ていると、掲示を見ている生徒はやはり数が少ないように思われた。そのため、まずは生徒が「新聞を見る」機会を増やすことを目的に、夏休み明けも引き続き、教員のニュースやピックアップ広告など、生徒の興味関心に触れそうな内容を入れるように心がけた。また、新聞の中身に関しては、トップ記事や国際、スポーツなどカテゴリーに分けて内容をまとめることで、新聞への興味を引くような内容になるように注意した。（図４参照）さらに、継続的に行うことが重要だと考え、６社分の新聞を取っていない期間も、学校で講読している神戸新聞を利用し、要約を行った。これらの要約は閲覧コーナーと同じく、過去のものにもすぐアクセスできるようにファイリングを行い、要約の見方も表示することで実際の新聞とのリンクがわかりやすいように作成した。（図５参照）６社分の記事を取っていない期間は、要約のファイルと一緒に実際の新聞を設置し、要約からすぐに実際の新聞にアクセスできるようにした。（図６参照）

図 4

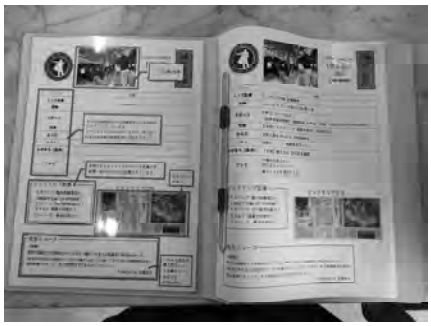


図 5

図 6

（２）コミュニケーション専攻での取り組み

１で述べたように、本校には３つのコースと５つの専攻が設置されている。そのうちの筆者も担当している総合進学コース・コミュニケーション専攻において､NIE と関連した取り組みを１年間にわたって実施した。

コミュニケーション専攻では、概要として「専修学校クラーク高等学院芦屋校を紹介する新聞を作成しよう」という目標を掲げ、３年生５名が新聞の作成・インタビュー等に取り組んだ。

①記者派遣

まず､「新聞がどのように作られているのかを知ろう」という目的で、2023 年５月 30 日（火）に、神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーに来校いただき、記者派遣の授業を行っていただいた。新聞を作成する上でのインタビュー術や記事の書き方、見出しの付け方、レイアウトの工夫など、さまざまなことを教えていただいた。新聞作成というのは生徒たちにとっても初めてのことであり、どうやっていけばいいのか、何に気を付ければいいのか等、今後新聞作成をしていくうえで必要なことを具体的に学ぶことができ、とても有意義な時間となった。

（図７参照）

図７

―生徒の感想―

・僕が印象に残っていることは、記事に見出しを付けてみるもので、難しかったけど、その記事と見出しが読者の興味を引くものでないといけないということがわかりました。また、簡潔に書かないといけないということも分かり、よかったです。

・僕はもともとあまり新聞を読まない人でした。しかし、この授業を受けたことにより、一枚の新聞を作るのにさまざまな工夫がされていて、読む人への配慮が施されていることに気づくことができました。

・（インタビューの際に）メモをしながら話を聞くと、どうしても顔がこわばってしまうときがありますが、相手のリズムに合わせ、インタビューを楽しむという面でも、笑顔を忘れずに聞くことが大切なんだなと思いました。

②新聞作成

記者派遣授業後、早速インタビューの準備に取り組んだ。コミュニケーション専攻では２年次に福祉施設や幼稚園、学童などで実習を行う。その実習先の紹介も新聞に盛り込みたいという意見から、実習先に生徒自ら電話をしてアポイントメントを取り、インタビューを行った。インタビューの前には、記者派遣授業で学んだことを振り返り、事前に質問項目を定めたうえで、インタビューを実施した。インタビュー後、生徒からは「緊張した」「想定と違う展開になって焦った」などの声も上がったが、記者派遣授業の成果もあり、全員聞きたいことはしっかりと聞き取ってインタビューを終えることが出来た。

その後、インタビューをもとに、実際に新聞作成に取り組んでいった。インタビューだけではなく、本校そのものの紹介、学校行事の紹介、教員の紹介など、生徒たち自身が内容を考え、調べ、まとめたものを新聞に盛り込んだ。また、文化祭で保護者が来校する機会があったこともあり､「マクドナルドをマク

ドと呼ぶか、マックと呼ぶか」というアンケートも生徒たちが実施し、新聞に盛り込むことで、生徒たちによる独創的な新聞が完成していった。（図８参照）

最終的に、11 月ごろに学校紹介の新聞が完成し、12 月の保護者も参加する学校行事で、完成した新聞の配布も行うことができた。

図８

―生徒の感想―

・生きてきた中で、新聞を読む機会はあまりなかったけど、今回自分たちで新聞をつくることになって、一つの情報のためにたくさんの人が携わっていることや、思っていたよりも多くの情報が載っていることを知れてよかった。

・新聞をつくることは、時間がかかって大変だったけど、情報を発信する側の責任や大変さを知れて、今後に活かしていきたいと思った。

・新聞づくりのインタビューに行った時は、実際に保育現場でしんどかったこと、後悔したことなど沢山の経験やアドバイスなども聞いて、保育現場の様子を知ることもできてよかったです。

３　成果と今後の課題

22 年度に引き続き、NIE 実践指定校として取り組んだが、生徒が新聞に触れる機会を増やす根本的な解決には至らなかった。教員のエピソードを添えたり、生徒の興味を引きそうな記事を紹介したりすることはできるが、もちろん新聞にはそれ以外の記事も掲載されている。そういった記事に対する生徒への興味をどう引き上げるかが課題だと考える。また、主体的に新聞に触れる機会を増やすために、日常の学校生活に取り入れる方法について模索していきたい。

コミュニケーション専攻での新聞作成では、自分たちの伝えたいことを新聞という限られた範囲の中で、どうすれば効果的に伝えることが出来るのか、という表現力が身に着いたように感じる。最初は長い文章を書くことにすら抵抗感があった生徒が、新聞の記事を書いていく中で、長い文章にも取り組めるようになっている姿も見られ、新聞を作成するという範囲にとどまらない影響が見られたように思う。インタビューでも、コミュニケーションの方法について、改めて考え直す機会になった。

本校には、専攻などさまざまなことに柔軟に取り組むことが出来る環境があるため、来年度はさらに発展した新聞の活用を目指していきたい。

社会と自己をつなぐNIE

兵庫県立有馬高等学校　　校長　　萩原　健吉
教諭　　中村　可奈子

１　はじめに

本校は2023年度、127年目を迎えた県下で４番目に歴史と伝統のある学校であり、全日制の「人と自然科」・「総合学科」、および定時制を設置し、特色ある取り組みを行っている。

今年度初めてNIE実践指定校となり、特に全日制総合学科中心に取り組んだ。総合学科では、１年次に「産業社会と人間」、２・３年生に「ARIMA探究Ⅰ・Ⅱ」と称した「総合的な探究の時間」を設定している。ARIMA探究では、社会の諸問題と自己との関わりの中から課題を設定し、情報を収集、整理・分析し、まとめ・発表を行っている。その中でも特に、「課題の設定」「情報の収集」時を中心にNIEに取り組み、社会と自己との繋がりの理解に基づいた課題設定力、複数の資料を比較する資料活用力、適切な情報に基づいた解決策の提案力の育成を目指した。

２　新聞の置き場

23年度は、神戸・朝日・産経・日経・毎日・読売の６紙を６・７・９・10月の４ヶ月間提供していただいた。６月１ヶ月分は保管しておき、後述する総合学科２年生のARIMA探究の授業内で生徒に一斉に閲覧させた。

その後は、２年生総合学科の各クラスに１部ずつ、職員室前に１部を保管し、いつでも閲覧できる状態にした。毎日、担当教員が各クラスの職員室クラスボックスに新聞を配布し、日直がクラスに持ち帰り、クラス毎に決まった場所に設置した。その際、以下のように毎日異なる新聞社の新聞が入るように配慮した。

	２組	３組	４組	５組	６組	第２職員室前
6/27	神戸	朝日	産経	日経	毎日	読売
6/28	朝日	産経	日経	毎日	読売	神戸
以下日替わり						
月曜の例	神戸（土） 朝日（日） 産経（月朝）	朝日（土） 産経（日） 日経（月朝）	産経（土） 日経（日） 毎日（月朝）	日経（土） 毎日（日） 読売（月朝）	毎日（土） 読売（日） 神戸（月朝）	読売（土） 神戸（日） 朝日（月朝）

３　実践の内容

（１）ARIMA探究Ⅰでの実践

①記者派遣事業

神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーをお招きして、７月13日（木）に２年生、12月12日（火）に１年生に対して「新聞の読み方」をテーマに講演をしていただいた。

網羅性・一覧性・信頼性・保存性といった他のメディアとは異なる新聞の特徴や、記事を書く上で気をつけていることなどを教えていただいた。特に、すべての記事をじっくり読むのではなく、見出しやリード文に注目しながら新聞全体にざっと目を通す読み方を学んだことは、その後の探究活動で、多くの新聞に目を通して、自分の興味とつなげ、また自分の興味を掘り下げながら記事を探す姿勢へとつながった。

②【導入】科目「論理国語」との連携

国語科の２年生の授業「論理国語」内で、「資料を整理し、テーマを吟味しよう」というテーマで学習を行った。その際、新聞のレイアウト、グラフの読み取りについても指導を行い、生徒は情報収集に際して、情報の信頼性・発表時期・対象読者・書き手の立場などに留意しながらまとめていくことを学んでいった。

また、ARIMA 探究の探究活動に向けて、OneNote での記事のスクラップ方法についても指導した。

③【課題の設定】イメージマップ作成

ARIMA 探究の課題設定時に、イメージマップを用いて、自分の進路・興味・関心等から気になるワードを書く活動を行った。その際、まず自分でキーワードを挙げた上で、新聞を１人１部配布し、記事を読みながら、自分の将来に必要なことや、現代社会において課題となっていることなどにも留意しながら、キーワードを追記した。

自分がすでに興味関心がある分野について、知らなかった・思いつかなかった新たなキーワードや、今まではあまり知らなかった・興味がなかったが、実際記事を読んでみると新たな興味関心が生じ、課題や疑問を感じたキーワードなど、多くのものを生徒は書き出していた。実際、それらのキーワードから自身の探究の課題を設定した生徒もいた。

④【情報の収集】新聞スクラップ

課題設定後には、その課題に対する理解を深めるため、および課題解決に向けた情報を収集するために、新聞記事のスクラップを行った。

上記のように、毎日各クラスに１部ずつ新聞が届けられるので、それらの新聞に目を通し、週に１度の ARIMA 探究の時間までに、自分の探究のテーマと関わる記事を選んでスクラップするという活動を２ヶ月続けた。スクラップは ARIMA 探究の「主体的に学習に取り組む態度」として評価した。

スクラップに際しては、Microsoft OneNote を活用し、Teams で提出を確認するという方法をとった。これは、以下のメリットを踏まえた選択であった。

・クラス内の複数の生徒が同じ記事に興味を持った場合でも、記事を切り取ることがないので、同時にスクラップすることができる
・自分のスクラップした記事を OneNote 上で振り返りやすい
・毎週提出する課題であっても、提出状況の確認が容易である
・Teams を活用することで、ARIMA 探究の時間内に生徒間の記事の共有ができる
・本校の ICT 環境（使用端末は dynabook。ロイロノート等は採用していない）の中で、無料で全生徒が活用できるツールであった

新聞スクラップを毎週行うことで、新聞を読む習慣が身につき、また自分の興味関心を社会の動きとつなぎ合わせながら考える姿勢が身についた。

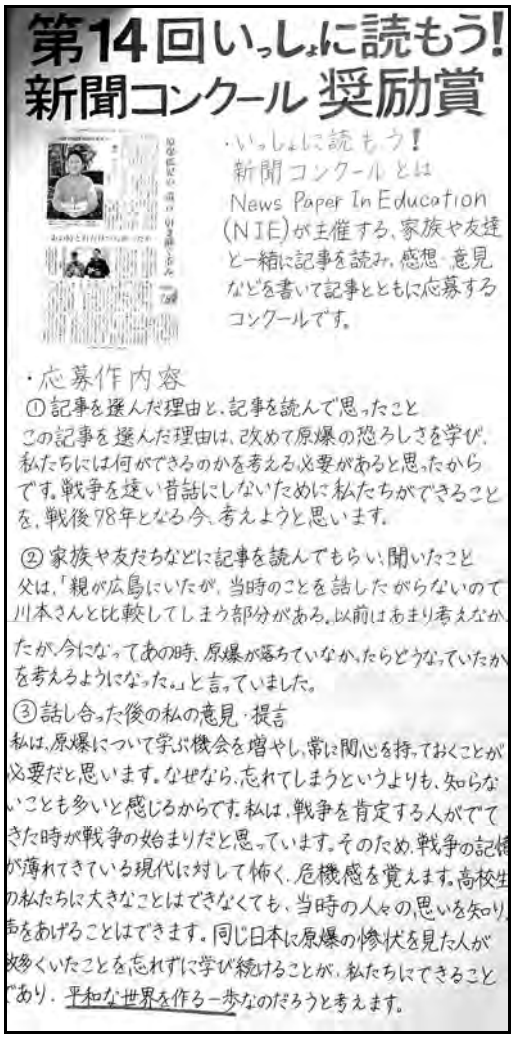
（２）新聞コンクールへの応募

①「わたしの推し記事コンクール」

2023 年３～４月の春休みに、新２・３年全員、2024 年１～２月に１・２年生全員が兵庫県 NIE 推進協主催の NIE「わたしの推し記事コンクール」 に取り組んだ。本コンクールは、「わたしの推し」について紹介・掲載されている新聞記事を選んで切り抜き、記事を選んだ理由や「わたしの推し」に対する自分の意見等を記入するものであった。これは、自分の興味関心と、社会とをつなぐという意味で、本校の取り組みに即したものであり、２年生は１年間での成長を感じられるものであった。2023 年度は優秀賞と佳作を１名ずつ受賞した。

②「いっしょに読もう！新聞コンクール」

2023 年夏休みには、１年生希望者及び２年全員が、一般社団法人日本新聞協会主催「一緒に読もう！新聞コンクール」に応募した。家族や友人と一緒に記事を読み、感想・意見などを記入するものである。直前に記者派遣事業で「新聞の読み方」講演会を聞いたこと、また新聞を活用して自分の興味を掘り下げるイメージマップを作成したことから、より新聞を通して社会を知ろうという意欲が高まったタイミングであった。そのため、積極的に取り組む生徒も多く、１名が奨励賞を受賞した。以下は奨励賞を受賞した生徒が、本校の学習活動発表会で NIE の活動を発表した時のポスターである。



４　成果と今後の課題

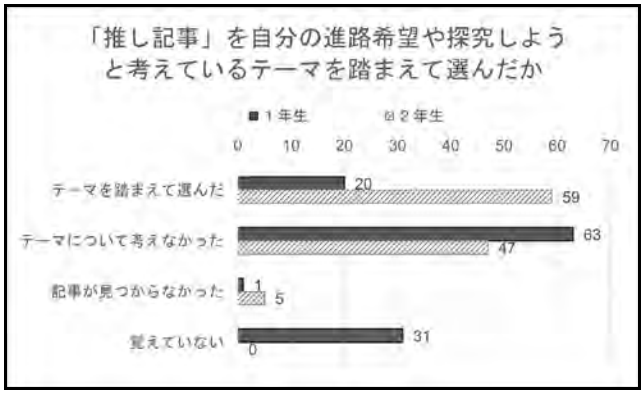
（１）アンケート結果

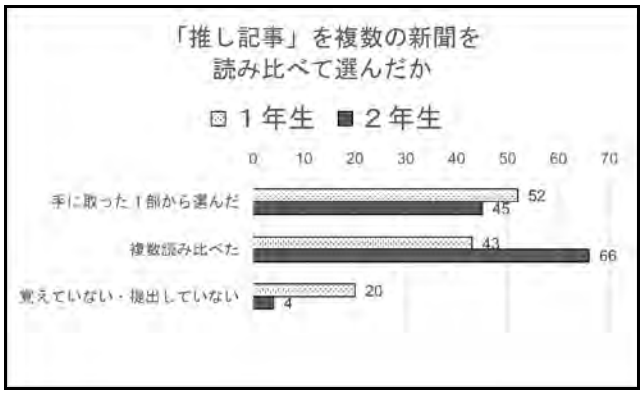
NIE の取り組みを通して、生徒にどのような変化が起きたかを調べるために、１年間 ARIMA 探究の授業で新聞を活用してきた２年生を対象に２月にアンケートを実施し、115 件の回答を得た。

①「わたしの推し記事コンクール」の記事選び

NIE 導入前の１年生後の春休みと、NIE に取り組んだ２年生２月の２回、「わたしの推し記事コンクール」に取り組んだ。その２回で「推し記事」の選び方に変化があったのか尋ねた。本アンケートは２年生２月に実施したもので

あり、「１年生」の項目は、現２年生が過去の自分を振り返って答えたものである。



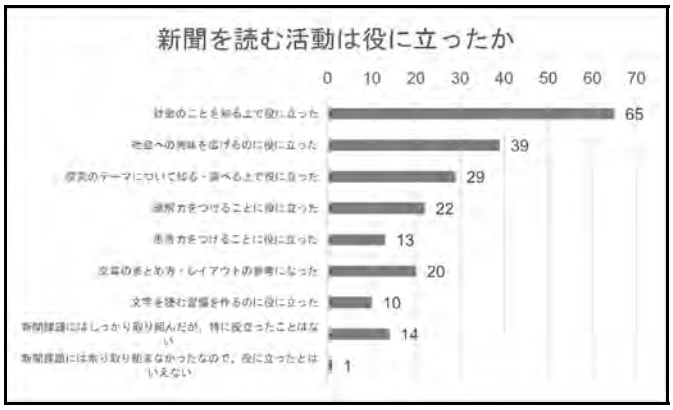


以上の結果から、自分の進路希望や探究しようと考えているテーマとつなげながら、新聞を読む姿勢が身についたといえる。

これはもちろん１年間で進路希望や探究のテーマがはっきりしてきたということもある。しかしそれと同時に、ARIMA 探究時に自分の探究のテーマを踏まえた記事を探してスクラップするという活動を始め、さまざまな NIE 活動によって、新聞を読む機会が増えたことも理由として挙げられる。毎日複数の新聞が教室内に存在し、週に一度は記事を探して新聞をめくるという環境が、複数の新聞を読み比べ、自分の興味関心とつなげながら記事を探す姿勢へとつながったものと考えられる。

②NIE は役に立ったか

また、同時期に「新聞を読む活動は役に立ったか」という質問にも答えてもらった。こちらは複数回答を可とした。



回答した生徒 115 名中 111 名は「役に立った」と答えた。その中でも、「社会のことを知る上で役に立った」「社会への興味を広げるのに役に立った」と答えた生徒が多く、新聞を社会と自分とをつなげる存在であると考えている生徒が多いことがわかる。また、「探究のテーマについて知る・調べる上で役に立った」と答えた生徒も多く、探究の「課題設定」や「情報収集」に新聞を活用しようという目的もある程度達成できたものと考えられる。

（２）今後の課題

23 年度は NIE 実践指定校として１年目の取り組みであったため、教職員・生徒ともに準備が十分であったとはいえない。そのため、24 年度は以下のような課題について取り組んでいきたい。

・より多くの生徒にとって目に触れやすく手に取りやすい新聞の保管場所
・各教科と連携した新聞の活用
・複数の新聞記事を多角的・批判的に分析する取り組みの実施
・より記事の内容を深く読み込み、発見や感想等を記入するスクラップ方法
・スクラップした記事の共有方法

実践指定２年目として、新聞記事を読み込み、他者と対話を通して理解を深める機会を増やすことで、社会と自己とをより深い部分でつなげる実践を行っていきたい。

新聞を活用した「地域社会学」への取組み

兵庫県立西宮高等学校　　校長　　楠田　俊夫
教諭　　河辺　有希生

１　はじめに

本校は、六甲山系甲山の麓に位置し、関西学院大学上ヶ原キャンパスなどのある「文教地区」に所在する大変教育環境に恵まれた立地にある。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約 1,000 名の大規模校である。授業では単位制の特色を活かし、それぞれの興味、関心、進路に応じて共通教科はもちろん、商業をはじめ第２外国語、芸術等様々な特色ある選択科目を履修することができる。

NIE 推進事業では、新聞記事を活用した探究学習の実践に取り組む。「総合的な探究の時間」の中で、「SDGs」を理解したのち、新聞記事にある社会課題が SDGs のどの目標と関連しているかを発見し、新聞ポスターにまとめる学習を行った。

本校生の新聞を購読している家庭はここ数年約 50%にとどまり、生徒の大半は情報をインターネットで得るなど、新聞を読む機会は減っている。教科「情報Ｉ」の授業では、インターネットの情報は信憑性に欠けることもあるということに触れ、情報の正しい獲得の方法を指導し、意識啓発を図っている。

２　実践の内容

（１）「新聞ポスター」の制作を通して

2020 年度から、NIE 推進事業による数多くの新聞提供を活用し、１年次の「リサーチ」（総合的な探究の時間）で実践を続けている。

「リサーチ」（１年次）では「SDGs」17 分野の社会課題を学び、気になる課題を新聞記事から探し、社会の動きを確認した後、新聞を切り抜いて新聞ポスターを個人で製作した。ポスターには記事を選んだ理由、記事から考えたこと、意見文の３つの観点を記入することとした。出来上がったポスターは、班ごとに発表と意見交換を行い、班のメンバーは３回替わる。社会に目を向けることが少ない高校生が意識をして新聞を読む経験となり、１年次後期から行う地域活性化の授業や「課題研究」（２、３年次）の研究テーマを見つける活動につながっている。

＜授業のねらい＞

①新聞記事の中から、自分の興味・関心を持ったテーマの記事を探し出す目を養う。

②記事のいろいろなつながりをみつけ、課題の広がりをみつける。

③新聞記事を読解し、要旨をまとめ、他者に発信する力を身につける。

④他者の発表から新たな考え方や視点を知る。その際、World Café 形式を取り入れ、小グループで席替えを繰り返しながら話し合うことで、多様な価値観を共有することができる。

【World　Café での活動の様子】

①４人一組で模造紙に書きながら自分の意見を述べていく。

②４人のうち３人は、被らないように他の班に移動し、その班で同様に模造紙に書きながら意見交換をする。

③元の班に戻ってどのような意見があったか情報を共有する。

＜学習活動＞

【授業展開】

日付	テーマ	内容
5/10	社会を知る１	World Café SDGｓとは
6/7	社会を知る２	新聞ポスター　導入　①
6/14	社会を知る３	新聞ポスター　テーマ決め　②
7/12	社会を知る４	企業講演会 「ＳＤＧｓへの取り組み」
7/19	社会を知る５	新聞ポスター作成　③ 夏季課題説明
9/13	社会を知る６	新聞ポスター発表　④

①新聞ポスター導入

・新聞を１人２紙以上配付。新聞から得られる情報を分類、分析する。新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。

・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「SDGs」17 分野のどれにあてはまるか確認する。

②新聞ポスターテーマ決め

・「SDGs」の 17 分野から、興味関心あるテーマの新聞記事を選んで切り取る。

・新聞ポスターのタイトルを決定する。（例：「コロナで動く経済新聞」）

・Ａ３×２枚のレイアウトを考える。意見文やイラスト等も含めてレイアウトを考える。

③新聞ポスター作成

・意見文を下書きする。

・意見文では、切り取った新聞記事に対する考えを述べる。そして、社会で起きていることは地域でも起きていると考え、地域における問題提起に繋げる。

・意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。

・次時に発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく、自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。

1　なぜこのテーマを選んだか。
2　どのような記事を集めたか。
3　それは SDGs のどの分野か。
4　自分はどのように考えたか。
5　今後、研究したいことは何か。

④新聞ポスター発表

１人２分程度で、班内で発表を行う。（班は３回交替する）

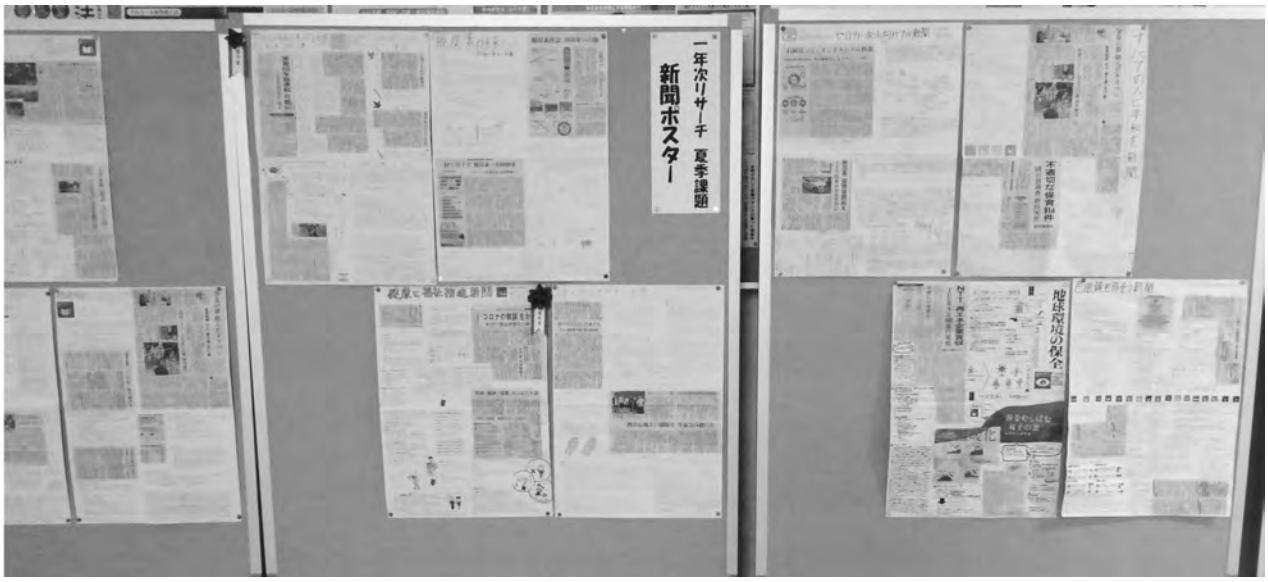
（２）新聞記者派遣事業

NIE 新聞記者派遣事業として、11 月 16 日（木）神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーをお招きし「インタビュー術と基本的な記事の書き方」というテーマで２年次生対象にご講演いただいた。インタビュー術、基本的な記事の書き方、インタビュー写真の撮り方等、押さえておくべき基本事項を、クイズを交えながらお話しいただいた。生徒たちは実際にインタビューしてまとめる練習も行った。これから実施する「課題研究」において、正しい情報を集めることの難しさ、その重要性を学ぶことができた。

3　成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力は持っている。課題を発見し、自ら解決していく力をつけることを目標に探究活動を行っており、“新聞”を活用して、社会と身の回りの出来事に目を向けさせたいと考えている。今年度も、新聞ポスターのあと、地域の課題をより具体化させるために地域の方にお越しいただき、11 講座の分科講演会を開いた。昨年度の課題から、講演の後、World Café 形式で対話の時間を取った。各講座とも生徒の視点で様々な意見が交され、他者の意見に真剣に聞き入る姿が見られた。

SDGs に挙げられた達成課題は、社会問題が一人ひとり、個人の問題であることを自覚するための最も効果的な課題である。新聞を手にした生徒たちは、インターネットと異なりピンポイントでニュースを見つけることに苦戦しながら記事を探していた。また、１つの新聞に顔を突き合わせて、会話をする姿も多く見られた。このように興味深い記事を見つけて周りの友達に話しかけたり、記事をお互いに見せ合ったりする姿や時間の大切さを痛感した。今後は、「課題研究」をはじめ、様々なレポートや小論文等に新聞を裏付けとした内容や意見が述べられるよう、また、多くの教科で活用、実践していけるよう、さらに活動を深化していきたい。



「教育に新聞を」事始　～新たな発見へ～

兵庫県立尼崎高等学校　　校長　　水嶋　正稔
教諭　　平家　靖久

１ はじめに

本校は地域住民の強い要望から創設された学校であり、かつ今年度 100 周年という節目を迎えた伝統校として知られている。従って、地元の方々とのつながりや絆は非常に強いと考えられる。地域に支えられ学んだことを、社会に出た時に還元し、あるいは、地域を超えて国際的な視野にたって社会貢献することを目標として、教育活動に日々励んでいる。

2023 年度学校構想部の一員として、コースの学科改編検討と「総合的な探究の時間」の見直しを担当する中で、NIE 活動を本校の新たな教育活動に組み込むことができないかを考え、取り組みを始めた。また、新聞は情報の宝庫であり、極めて正確な内容にユニークさも交えて練られた媒体であることに目を向け、活用していくことで、有益な学びの材料になり得るのではないかと考えた。

実践にあたっては、初年度ということと、既存の「総合的な探究の時間」との関係から、２つの学年の「総合的な探究の時間」と自身が担当する学校設定科目の授業を対象とした。

２　新聞の置き場と整理の方法

（１）閲覧コーナーの設置

９月～12 月の４カ月間にわたり、地元紙を含んだ６紙を配達していただいた。事前アンケートにより普段、新聞を読まないという生徒あるいは家庭が多いことがわかったので、職員室前に閲覧コーナーを設置した。当日の新聞を校務員の方に並べていただき、過去分は随時図書委員が図書室へ運ぶというスタイルをとった。馴染みの少ない新聞を少しでも多くの生徒が手にするよう工夫したものであり、そうすることで、全学年の生徒が通る頻度が最も高い場所を確保できた。

（２）新聞使用のローテーション

表のとおり、複数クラス（最大７クラス）で展開した際、限られた部数の各社の新聞を各クラスに行き渡るよう差配した（１日＝９月１日分）。９月より開始したため、新

聞の数量が足りない中でやりくりしたので、計画性をもって取り組まなければいけないと改めて感じられた。

9月	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組
神戸	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日
朝日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日
毎日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日
読売	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日
日経	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日
産経	6日	7日	8日	9日	10日	11日	5日
神戸	11日	10日	9日	8日			
朝日		11日	10日	9日	1日		
毎日			11日	10日	2日	1日	
読売				11日	3日	2日	1日
日経	1日				4日	3日	2日
産経	2日	1日				4日	3日

3　実践内容

１・３年生全員が受講する「総合的な探究の時間」及び３年生 15 名で構成される学校設定科目「世界と日本の文化」で実施した。

（１）「総合的な探究の時間」での実践

内容は主として２つである。生徒が興味を持った記事を切り抜いて発表する「回し読み新聞」と「同一内容記事の読み比べ」である。

これらに加えて、新聞の社説を書き写すという文章の構成を学ぶ取り組みも適宜行った。

①　回し読み新聞

（評価基準：わかりやすさ・内容の深堀り感・はきはきとした熱意ある発表など）

・自分が興味を持った記事を最低でも２つ以上選んで切り取る。

・グループ内で切り取った記事を見せながら、選んだ理由と感想を述べる。１人１つの記事について意見を述べたら、次の人と役割を交代する。

・模造紙に記事を貼り付け、コメントや見出しを書き加えて、自分たちの班だけのオリジナル新聞を制作する。さらに、新聞名（タイトル）を決め、色なども考えた上で読んでもらいたい記事にマーカーをする。

例）未来新聞、野球新聞、化学新聞、教育新聞など。

・クラス内発表

②　同一内容記事の読み比べ

（評価基準：ワークシートの内容・意見交換が十分か・自分の主張をもっているかなど）

・異なる新聞社の同一内容記事を読む。

・「見出し」「リード文」「本文」「写真」等の観点から考えワークシートへ記入する。

例：見出しは〇個の単語が共通して使われている、リード文の１文目はほぼ同じ、２文目は違う立場で書かれている、同じ位置から撮影した写真であるなど。さらに、受け取る印象はどう違うか、使われている言葉に着目し、書き手が何を伝えようとしているかも考察する。

・同じ事実であっても、それぞれ何を論点としているか、明らかにする。

・グループ内で発表する。

A 新聞		B 新聞
水産業官民で支援 輸出開拓国内の消費喚起 処理水放出初回完了 濃度異常なし トーンダウン？ 値崩れどこまで	**見出し(大きいものから順に)**	処理水１回目放出完了 トリチウム基準値下回る 先行き不透明
7788トン	**本文①** 初回放出量は？	約7800トン
なし	**本文②**トリチウムの 総量は？	約5兆ベクレル
ラファエル・グロッシ事務局長 「放出は順調に進んでいると考えている。(処理水の)最後の一滴まで独立した分析を続けて結果を公表する」	**本文③**国際原子力機関(IAEA)の発表内容は？	放出後に原発から3km以内の数か所で採った海水を分析し、運用限度を下回った。
「(国際社会の)理解が一層広まった」 「今後も科学的な根拠に基づいて高い透明性を持ち、丁寧に説明していきたい」	**本文④**岸田首相の認識は？	なし
(主に)ホタテ	**本文⑤**主に取り上げている魚介類は？	ヒラメ・マダイ・トラフグ
放出に関する日本批判を持ち出すことはなかった	**本文⑥**中国の李強首相の態度は？	なし

(ホタテの値崩れがどこまで続くか、誰もわからない)	**本文ヴ処理水放出の先行き不透明な理由は？**	・東電は原発内の一千基超のタンクの撤去をいつどこから始めるのか示していない ・汚染水は今も増え続けており、処理水を放出した分だけタンクが空になっていくわけではない ・現時点で、今年度中に空になったタンクを撤去する予定はない
緊要対策・漁業支援・追加支援 なし	**表の水産業支援の主な内容(3点)は？** **グラフから読み取れる2047年に起こる出来事は？**	なし タンクの貯水量以上にトリチウムの年間放出量が上回る
工場でホタテを処理する従業員 水産物の取引価格が軒並み下がっている	**写真の説明は？** **地図から読み取れることは？**	なし なし
(例)政府が全面的に支援しようとしている。岸田首相の肯定的な発言や国際社会の後押し、また中国側が批判しなかったことから、処理水放出を比較的前向きにとらえているように感じた。	**あなたが感じた印象**	(例)淡々とした様子で語りつつも、「先行き不透明」という小さな見出しより、政策を不安視する様子が見て取れた。また、有力な後押しとなる材料を取り上げておらず、不安視しているかのように感じられた。
(例)具体的な水産物として、ホタテをとりあげ、写真や地図を使いながら価格など詳細にまとめている。	**工夫されていると感じた点**	(例)グラフを用い、この出来事が必ずしも安心できるものではないと表現している。

（３）「世界と日本の文化」における記者派遣活用

９月 28 日（木）、３年生 15 名が受講する「世界と日本の文化」の授業で、毎日新聞阪神支局の亀田早苗記者をお招きし、新聞ができる過程やわかりやすく伝える工夫などを紹介していただいた。具体的には、記事の掲載位置や見出しの大きさなどでニュースの重要性がわかる構成になっていることなどを説明され、記者がニュースを発掘する調査報道で世論を形成する新聞の役割などを熱弁された。

当該学年は、生徒が興味を持った記事を切り抜いて発表する「回し読み新聞」や、各紙読み比べなどで紙面に親しんできた。最初はさほど興味を示さなかった生徒も、紙面にかぶりついて、その話題に関する雑談をする姿が印象的であった。

なお、翌日には紙上で取り上げていただき、掲載された記事を生徒に見せると大変感慨深い様子であった。紙上に掲載されるに至るまでのスピード、そして他人事として目を通していた新聞に、自分たちの様子が掲載されているという親近感、こういったことにあらためて驚きを感じていたようである。

４　成果と今後の課題

生徒たちは情報をインターネットやテレビで入手し、新聞を読む時間が１日に２～３分程度、家庭に新聞がない、そのような状況からスタートした。

学校生活の中に「新聞」という新たな日常が加わったときに、当初は戸惑いもあったが興味本位ながらも和気藹々と楽しんで取り組んでいる様子が印象的であった。

シンプルな切り口から、好きな記事を選んで発表することから始め、各社記事の読み比べで行間に見られる意図を考察させ、あるいは社説の書き写し等で文章構成を学ばせることができた。

ワークシートの振り返りの記述などから社会への関心、文章を書く力、考えを発表する力などが育てられたと実感している生徒が大半を占めた。

実践者として受け取った印象は３つある。

まず１つ目に、思ったよりも生徒は興味をもって新聞を手に取り、自然と会話を弾ませるような積極性を見せてくれたということ。これまで、日々の生活の中に新聞という存在がないことも、新鮮さを際立たせたかもしれない。さらに、スマホ等を使う場合と比較した場合、コミュニケーションの広がりや、物理的な面でもより広い範囲で交遊がもたらされていると感じられた。

２つ目として、新聞の手触り感が文化や優しさを生み出しているというか、教室が賑やかで温かい雰囲気に包まれたように感じたこと。何か幼い頃に戻って工作を楽しんでいるかのような作業の中で、人と人との距離が縮まったような雰囲気を感じとった。

最後に３つ目は、情報の正確性、量の多さ、ポジティブな内容といったことの再認識である。あくまでスマホ等を対極において考えた時に、当然フェイクニュースなどが入る余地がないといっていい。そして、あれだけの膨大な量の情報が廉価で手に入れられるということは、立ち止まって考えるとものすごいことなのかもしれないと個人的に感じた。そして、当然悲痛な内容の記事もあるが、筋立てなく淡々と語られる内容について、言葉の一つひとつにも丁寧に正確で、きれいな文体で書かれている様子がはっきりうかがえる。日本語を学ぶ上でとても有益なツールといえる。

以上、あくまで実践者として生徒に伝えようとした新聞の魅力は上述のとおりである。主観が入っているかもしれないが、少なからず生徒に伝えようとしたことも以上のようなもので、感じとってくれた内容も近いものがあったと手応えをつかんでいる。

課題としては、新聞を読む習慣をつけさせるという目標を達成するには、年度当初の意気込みや具体的実践内容等を学校全体で周知徹底させることが重要ではないかと考える。実践者として初めての試みを生徒のみならず教職員全体がどれだけ自分事として捉えるかが肝要かと感じた。教員が新聞のことを知る、良さや楽しさを実感するということを念頭に置くことができれば、今年度の活動はさらに良いものに仕上がったのではないかと振り返る。

結果として、生徒側の取り組みには問題がなかったように感じるものの、実践者の反省として押し寄せる学校行事とも折り合いをつけながら、意義ある NIE を行えたか、自問自答している。

NIE×SDGs×総合的な探究の時間

兵庫県立三木北高等学校　　校　　長　　田中　良季
主幹教諭　　石田　武史

１　実践の概要

本校はユネスコスクールの理念を教育活動の柱の一つとしている。全校生が取り組む、総合的な探究の時間では第１学年は「SDGｓの理解」、第２・３学年は「体育・栄養」、「国際・異文化理解」、「地域」、「環境と科学」の４分野に分かれて「探究のプロセス」を重視した活動を行っている。これらの活動がNIEを活用し、さらに充実したものなること目指している。

２　NIEの学習計画

（１）展開方法

①各教科での活動

今年度は国語科と地歴公民科、総合的な探究の時間、課題研究の授業で新聞を用いた授業を行った。（資料①参照）

②NIEワークシートの作成・活用

神戸新聞のコラム「正平調」を用いた独自のワークシート（資料②参照）を作成し、第１学年の総合的な探究の時間や週末課題、長期休業中の課題として生徒に取り組ませた。

（２）指導上の留意点

まず、新聞記事に触れ、読むということに重点を置いた指導を行った。上記の「NIEワークシート」はタイムリーで生徒が興味を持つような記事を選び作成した。問題は記事を読めばわかるものや調べなければわからないものなどを幅広く出題した。

（３）評価

数値による評価は行わず、提出状況のチェックのみを行った。

（４）事前アンケート結果

年度当初に第１学年生徒と職員を対象に、Google Formsを利用して、アンケートを実施した。集計結果のうち特徴的なものを下記に記す。

＜生徒の集計結果＞

①日頃、国内外のさまざまな情報をどのような方法で入手していますか。

約７０％の生徒がインターネットとテレビで情報を得ている。

②あなたの家は、新聞を取っていますか。

半数の家庭は新聞を取っていない。

③あなたはどのくらいの頻度で新聞を読んでいますか。

約９０％の生徒が新聞を読んでいない。

④あなたはニュースや新聞記事について、周囲の人と話し合いますか。

ニュースや新聞記事について、周囲の人と話す生徒が半数いる。

＜職員の集計結果＞

①NIE のことを知っていますか。

７５％の職員が NIE 活動を知っているが、２５％の職員が知らない。

②教育に新聞を活用することに意義があると思いますか。

職員全員が NIE の活動に対して意義があると感じている。

③日頃、国内や外国のさまざまな情報をどのような方法で入手していますか。

生徒同様、約半数の職員がインターネットやテレビで情報を得ている。

④自宅で新聞は取っていますか。

新聞を取っている職員と取っていない職員が約半数ずついる。

⑤これまでに新聞記事を授業等に活用したことはありますか。

約８０％の職員が授業に新聞を活用したことがある。

３　新聞の置き場と整理の方法

本校に配達された新聞は図書室の「NIE コーナー」に置かれている。新聞社ごとに、生徒や職員が利用しやすいように整理されている。

4　記者派遣事業

（1）日時　2023 年 12 月 21 日(木)1,2 限

（2）場所　本校青志館（多目的ホール）

（3）テーマ「日本の政治・外交」

（4）講師

時事通信社神戸総局　水島信　総局長

（5）対象　第１学年生徒 95 名

（6）内容

日本の歴代首相経験者の横顔を紹介しながら、それぞれの功績などの説明があった。また、自民党の政治資金裏金問題や世界の人権問題にも触れ、国民に対する政治家の意識レベルや外国人労働者への配慮の大切さなどを丁寧にお話していただいた。

（7）生徒の感想

・　今回の講演会を通して普段は聞くことができない貴重なお話を聞くことができました。安倍総理、菅総理、岸田総理など私が物心ついた時からの総理のお話を聞いたり、日本や世界での現状についてもよく知ることができたりしたのでよかったです。今回学んだことをこれから生かしていきたいです。

・　今の政治にも課題がたくさんあって少しずつ改善し、日本がもっと豊かになってほしいと思いました。これからの未来でも課題が出てくるかもしれないので課題をなるべく早く改善してほしいと思います。

・　今回の講演会で政府の裏側がどのようになっているのかを知ることができてとても勉強になりました。総理はどのように他国と交流を深めているのかが気になっていて、今回の講演でわかったような気がします。

5　23 年度の成果と今後の課題

（1）成果

23 年度より NIE 実践指定校となり、これまで、一部の教員が、一部の生徒に対して行っていた新聞を用いた教育活動を、学校全体で取り組むことができる体制が整ったと思われる。

（2）課題

定期的でかつ目的が明確な活動となるよう、年間計画をしっかり立てることが、充実した活動になるために必要なことだと感じた。また、配達される新聞を生徒や職員が手軽に読むことができる環境を整えることも改善点として挙げられる。

（資料①）

NIE（教育に新聞を）実施報告書

○教科・科目等
　課題研究

○実施日時
　令和６年１月 22・23 日

○対象生徒・生徒数
　第３学年・７名

○実施目的
　これからの授業づくりのための情報収集

○使用した新聞
　神戸新聞　読売新聞　朝日新聞　※記事を探した新聞

○実施内容
　新聞から地域に貢献した内容の記事を探し、感想を書く。

○報告者
　所属：地歴公民科　　報告者名：佐野　代行

○生徒感想文やワークシート（添付またはファイルで保存）

令和５年 11 月 29 日(水)　読売新聞　　記事タイトル『企業ユニホーム回収、再生』

　この記事を読んで、工場や店舗で使用するユニホームは傷みやすく、定期的に取り替えられ、産業廃棄物として大半が処分されている現状を知りました。それを回収し、別の製品に再生することで、もう一度使用するというシステムは、私たちの学校生活にも活かすことが出来そうだと思いました。例えば部活動のユニホームや、体操服、制服などを学校で回収し、また地域から要らない服などを回収して、リサイクルの企業と連携し、再生した製品を地域の福祉施設などに提供できれば、地域貢献につながると思いました。また、ＳＤＧｓの 12・13・17 の目標にも合致し、ゴミの削減にもつながると思いましたので、私も協力していきたいです。

（資料②）

神戸新聞　ＮＩＥワークシート　（　　）年（　　）組（　　）番（　　）　確認印

正平調

「失敗学」の大家、東京大学名誉教授の畑村洋太郎さんによると、失敗には「よい失敗」と「悪い失敗」があるのだという。なかでも別格によい失敗は「未知への遭遇」にある、と◆曰く「失敗から人々が学び、その経験を生かすことで、『未知』なる知識の発掘に成功したからだ」（「失敗学のすすめ」より）。確かに人類の成長は失敗なしに語れない。今回も同じ事が言えるのではないか◆民間企業として世界初の月面着陸に挑んだ東京の宇宙ベンチャー「ｉｓｐａｃｅ（アイスペース）」のインターネット中継をきのう深夜、固唾をのんで見守った。直前まで順調だったのに着陸予定時間を過ぎても月面から通信が届かない。なんと無情な◆時速６千キロで降下し、最後の瞬間は人が歩く速度まで落とす。空気抵抗のない月で、それがどれほど困難なことか。「多くのデータと経験を得た。ミッションの意義は十分に達成できた」と袴田武史社長は語った。未知にあこがれた“宇宙少年”である◆振り返れば月探査の歴史は威信をかけた大国間の競争だった。そこに民間が参入する意味は大きい。新しい風はもう吹いている◆「はやぶさ２」を率いた津田雄一教授が言っている。「チャレンジが歴史をつくる」。最大のエールだろう。（2023-4-27）

（Ｃ）神戸新聞社　無断転載　複製および頒布は禁止します。

①　「未知なる知識の発掘の成功」に必要なことは何ですか。
（　　）

②　あなたが今までにした「よい失敗」は何ですか。また、その失敗からどんなことを学びましたか。5W1H（When・Where・Who・What・Why・How）を意識して、５０字程度で書きなさい。

③　固唾の意味を書きなさい。
（　　）

④　時速６,０００ｋｍは秒速何ｍですか。小数第２位を四捨五入して求めなさい。
秒速（　　）ｍ

⑤　文章中の「大国間」の大国とはどの国のことですか。
（　　）（　　）

⑥　はやぶさ２が探索した小惑星の名前は何ですか。（　　）

⑦　次の漢字の読みを書きなさい。
大家（　　）　遭遇（　　）　威信（　　）

【 特 別 支 援 学 校 】

新聞を活用して「見る・知る・聞く・伝える」力をつける

兵庫県立のじぎく特別支援学校　校長　田邉　勝彦
教諭　藤本　友美

1　はじめに

本校は、神戸市西区に位置する知肢併置の小中高一貫特別支援学校です。主に、神戸市西区、三木市、小野市の児童生徒が通学しています。実践１年目である 2023 年度は、高等部２年生のクループ授業国語と社会生活の授業で実践を行いました。以下、実践の報告をします。

2　取り組みの概要

高等部２年生は、４クラス 24 名で構成されています。１年次の国語の授業で、地域のニュースを読み取る授業や、外部での体験実習の後に、事後学習として「体験学習新聞」を作っていたこともあり、国語の授業の一環として取り組むことにしました。

また 24 名の中でも、漢字の読み書きができる生徒を対象としました。授業前に聞いたところ、家庭で新聞をめくってみたり、新聞記事を読んだりしたことのある生徒はほとんどいませんでした。

新聞６紙の購読期間は、９月から３月でした。

3　新聞の置き場と整理の方法

新聞の置き場と保管については、なるべく学年全体や他学年の生徒が見ることができるように、学年の掲示板を使うことにしました。新聞だけではなく、図書も置いてある広いスペースなので、休憩時間等に手に取って見やすい場所です。実際に、休憩時間に新聞をめくっている生徒が何人か見られるようになりました。

＜学年の掲示板の新聞コーナー＞

4　実践の内容

ほとんどが、新聞を読んだことがない生徒たちであり、文章を読むこと自体に苦手意識を持っていました。そこで、取り組みやすくするために、学年目標である「「見る・聞く・知る・伝える」に結び付けて、NIE の目標を「新聞をめくってみよう・写真を見よう・わからないことを聞こう・ニュースを知ろう・気になるニュースを伝えよう」としました。

学年目標と結び付けたことで、新聞に対する心理的なハードルが下がったと思います。

①写真を見よう

最初は、新聞をめくって写真を見るところから始めました。自分の好きなキャラクターや大阪万博のキャラクター、ユニバーサルスタジオジャパンのパレードの写真等を見て、興味を持つことができました。

②わからないことを聞こう

わからない漢字を聞いたり、その記事がどこからどこまで書かれているかを聞いたりすることができました。また、記事の中で分からないこと、例えば、「ガザってどこ？」「ウクライナってどこ？」と聞くことができました。疑問に思ったことは、その都度地図帳で調べることができました。

＜私の気になる記事＞

③ニュースを知ろう

主に、身近な地域のニュースを授業の最初に提示して、みんなで読むことにしました。

地元のイベントの記事や、地元出身のスポーツ選手の活躍に関する記事では、興味を持って読むことができました。

④気になるニュースを伝えよう

新聞自体に慣れてきた頃、「私の気になる記事」と題して、気になるニュースの切り抜きに取り組みました。そして、なぜその記事を選んだか、理由を書くようにしました。まずは、見本として教師が身近な地域のニュースや、新聞の一面のニュース等を取り上げて見本を見せました。最初は、写真を見て興味を持った記事を選んだ生徒が多かったのですが徐々に、地域のニュースや、自分の好きなスポーツ等の記事を選べるようになってきました。

社会生活の時間に、学んだことと結び付けて、食料問題等や地震等の記事を選ぶ生徒も出てきました。また、ある鉄道が好きな生徒に、加古川線廃止についての新聞記事のことを伝えたところ、家に帰って自分の家の新聞で、その記事を切り抜いてくるということもありました。新聞記事を日常生活に活用する場面が、徐々に増えてきました。

⑤新聞を作ろう

22 年度から、行事が終わるたびに新聞を作成してきました。最初は、テンプレートを使って、どこに何を書くかも決めて書くように指導しました。また、取り組んだこと（事実）と感想を書く部分を分けて書くように伝えました。

新聞にある程度慣れてきた 23 年度は、見出しを自分で考えたり、写真を自分で選んだりすることができました。

24 年度は、「修学旅行新聞」を作る予定です。見出しや構成、写真の選び方も自分たちで考えて作れるように指導したいと考えています。

５　記者派遣事業

12 月に神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーをお迎えして新聞記事についての授業を受けました。２人で話し合って、興味を持った記事を発表するグループワークや、見出しの付け方等について教えていただきました。5W1H がニュースの基本であることや、新聞の特長についても丁寧に教えていただきました。新聞記者の方に来て頂いて、授業を受けるのは、生徒たちにとって初めての経験だったので、興味深く授業を受けることができました。

（生徒の感想）

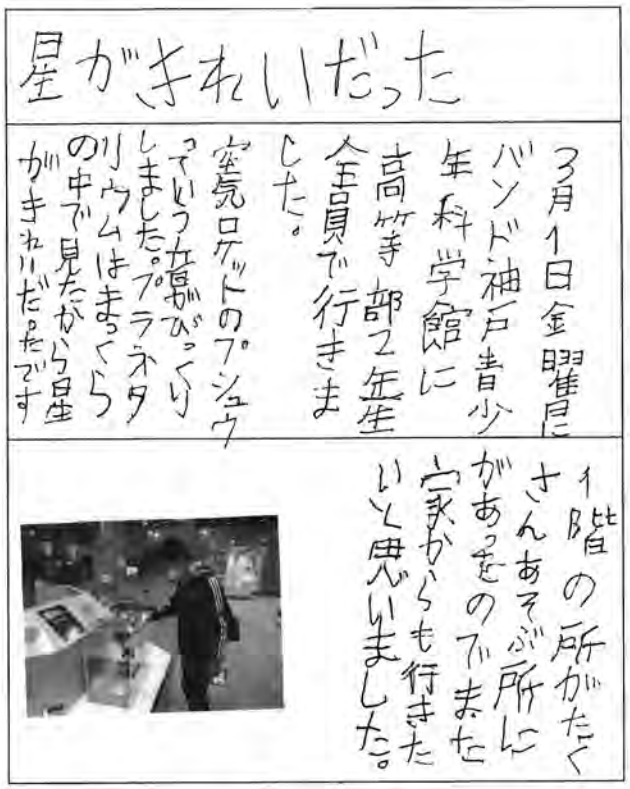
・私は今まで新聞をあまり読んだことがなかったので興味がわいて、家でも読んでみようと思いました。おばあちゃんの家で時々新聞を読むことが好きになり、今ではたくさん読みたいと思うようになりました。
・新聞の読み方を教えてもらいました。サンタクロースの記事の見出しを考えるのがおもしろかったです。友だちと協力してお城についての記事を見つけられてよかったです。
・お気に入りの記事は、兵庫県北部で魚を釣っている様子です。理由は写真がきれいだったからです。
・新聞の特長を教えてもらいました。今までは新聞に興味がなかったけど、休み時間に新聞を見るようになりました。
・５Ｗ１Ｈがニュースの基本であることを知りました。
・阪神タイガースの記事を見つけられてよかったです。いろんな話が聞けてよかったです。新聞の読み方がわかってよかったです。

＜記者派遣事業の様子＞

６　新聞記者になろう

３月１日に校外学習で、神戸バンドー青少年科学館に行きました。その時の様子を、新聞記者になったつもりで記事にまとめることにしました。

記者派遣事業で教えていただいた新聞記事の基本「５Ｗ１Ｈ」を踏まえて、それぞれが見出しを考え、記事にまとめることができました。



7　成果と今後の課題

23年度の成果としては、まず生徒たちが新聞をめくることに抵抗がなくなったことが挙げられます。新聞をより日常のものとして捉えられるようになったと感じています。今日のニュースのことを話す生徒が増えてきました。

また、授業実践のところでも書きましたが最初は写真のみを見て、興味のある記事を選ぶ生徒が多かったのですが、今は見出しを見て選べるようになっています。そして、「○○についての記事」と自分でテーマを持って記事を探す生徒も増えてきました。

そして、これは思ってみなかったことですが、家庭生活の授業で、新聞紙のリサイクルについて学んだことを思い出して、自ら新聞紙を束にして、資源ごみの置き場に持っていってくれる生徒が現れました。

一方で課題も多くあります。

本校は障害特性として、興味関心に偏りがある生徒が多く、視野を広く持つという意味においても新聞記事が有効であると感じました。しかし、やはり興味関心の偏りについては否めず、同じような記事ばかりを選んでしまうということがあります。

「読む」ということ自体に難しさや課題を持っている生徒が多く、新聞記事を読み理解することに大きな課題があることも事実としてあります。

実践２年目になる来年度は、より主体的に生徒たちが新聞記事を読み、日常生活に活用できるように、授業を展開していきたいと考えています。難しい漢字にルビを振ったりすることはもちろんのこと、短い記事やコラム等を活用したりすることで、読解力自体を上げていく授業も必要だと痛感しています。

また、卒業後地域社会で暮らしていく生徒たちにとって、地域とのつながりは必須です。来年度は「新聞記事でつながる」をテーマにして取り組んでいこうと考えています。地域や交流校との交流を新聞記事にまとめたり　交流校と共に、新聞作りに取り組んだりして地域に情報発信していけたらと考えています。

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

新聞を開いてみよう　～社会とつながるNIE～

愛徳学園小学校　　校長　　眞浦　由美子
教諭　　彦野　周子

1　はじめに

〈学校紹介〉

愛徳学園はスペインのカルメル修道会からやってきたシスター方によって、1954年に創立された。

小・中・高が同じ敷地内にあり、各教室からは瀬戸内海と明石海峡大橋が見渡せる。

12年一貫の女子教育を行っているカトリックミッションスクールでキリスト教の理念に基づいた校訓「気高く・強く・愛深く」を柱に、予測がつかないグローバルな社会で、真の国際人として貢献できる女性の育成を目指している。

〈2023年度の抱負〉

2023年度から本校は兵庫NIE推進協議会の独自認定校に指定された。

膨大な情報に誰もが簡単にアクセスできる現代社会において、正しい情報を取捨選択し読み解く力を子どもたちに身につけさせたい。そのために、新聞を学習材として、低学年では、新聞の写真を見て社会で起こっているさまざまな事象に興味をもつこと、中学年では、興味のある記事を読むことで語彙を増やし、その内容を人に伝えること、高学年では、記事に書かれている内容の事実と意見を区別して読むことや複数の新聞を読み比べて多面的に物事を捉えることなどを学習に取り入れていきたい。

2　実践の内容

〈２年図工科での取り組み〉

日時　2023年９月７日（木）３・４校時
　　９月21日（木）３・４校時

単元名　　「しんぶんしとなかよし」

単元目標

知識

新聞紙に身体全体で関わる時の感覚や行為を通して、色々な形や触った感じなどに気付く。

技能

新聞紙に十分に慣れるとともに、破いたり、丸めたり、ねじったりするなど手や体全体の感覚などを働かせ、活動を工夫して作る。

思考力、判断力、表現力等発想や構想

新聞紙の形や大きさ、触った感じなどを基に造形的な活動を思いつき、感覚や気持ちを活かしながら、どのように活動するか考える。

学びに向かう力

楽しく新聞紙に身体全体で触れながら思いついたことを試す学習活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形などに関わり楽しい生活を想像しようとする。

本時の展開（１）

学習活動	教師の働きかけ
・新聞紙を丸めたり、破いたりしながら、紙の大きさや感触などを味わう。	・「ふんわり」「ひらひら」「くしゃくしゃ」「くるくる」などオノマトペなどを交えて新聞紙を様々な形に変化させる演示をし、いろいろ試しながらつくりたいことを考えるよう伝える。
・新聞紙への関わりを工夫しながら、「すてきなぼうし」をつくり楽しむ。 ・つくった「すてきなぼうし」をみんなで見合う。	・身近な材料である新聞紙だけでも様々な形が生み出せることに関心を持たせる。

本時の展開（２）

学習活動	教師の働きかけ
・本時の課題を知る。	・前時につくった「すてきなぼうし」の活動で、新聞紙から様々な形を生み出したことを思い起こさせる。
・新聞紙への関わりを工夫しながら、２人１組で、「すてきな服」をつくり、楽しむ。	・いろいろ試しながら、「次はこうしよう」とさらなる発想が広がるように声をかける。
・つくった「すてきな服」を見せ合う。	・発想や組み合わせの面白さを見つけられるようにする。

〈２年・４年国語科での取り組み〉

日時　2024 年 1 月 26 日（金）14:00～14:45

単元名　　「冬新聞スクラップを作ろう」

単元目標

（１）２年生

・記事の紹介を聞き、共通、相違、事柄の順序等情報と情報との関係について理解することが出来る。

〔知識及び技能〕（２）ア

４年生

・相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すことができる。

〔知識及び技能〕（１）イ

・記事を読み考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報の関係について理解することができる。

〔知識及び技能〕（２）ア

（２）２年生

・相手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつことができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・ 聞くこと（２）ア

４年生

・相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう構成を考えることができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・聞くこと⑴イ

（３）２年生

・記事の紹介を聞く活動を通して、言葉がもつよさを感じ、感想を伝え合おうとする態度を養う。

〔学びに向かう力、人間性等〕

４年生

・記事を読み、その内容を紹介する活動を通して、語彙を豊かにして日常の中でも使おうとする態度を養う。

〔学びに向かう力、人間性等〕

児童について

２年生

国語科の「そうだんにのってください」の学習では、相談する友だちの発表をしっかり聞き、「質問」や「復唱して確かめる」「共感する気持ち」「感想を伝える」などグループで話し合い活動に取り組んだ。積極的に相談できる児童もいれば、何を相談すればいいのかが考えつかない児童や、相談者が伝えたい事柄について、相手の発言を上手に受けて話をつなぐことが苦手な児童もいた。４年生と一緒に行うグループ学習を通して、４年生が伝えようとしている新聞記事に関心を持ち、自分の感想をグループの中で共有できるようにしたい。

４年生

季節の行事に関心が高い児童が多く、冬に関する新聞記事も写真を手がかりに興味を持つことが予想される。「新聞を作ろう」で、児童は新聞記事の大まかな構成を学習し、自分たちで題材を決めて新聞を作成した。その学習を通して見出しが本文の内容の中心に関連した言葉や要約になっていることを理解している。その経験をもとに本単元では教師が選んだ記事の内容について見出しを手がかりに大まかにとらえることは出来ると思われるが、それを２年生に伝えるためにより簡単な言葉に言い換えたり、文中にでてくる言葉について説明したりするための語彙や知識はまだ、じゅうぶん身についていない。

学習材について

一般の新聞記事の内容を正確に読みとることは小学生の知識や技能では難しいが、季節に関する記事は、出てくる語句も比較的分かりやすく４年生でも読める内容のものが多い。写真も児童の興味をひきやすく、冬に関する語句や文を理解するのに役立つ。大見出しで話の中心をとらえてから記事を読むことによって内容の大体は理解できることが予想される。読み取った内容を２年生に分かりやすく伝えるという学習活動に取り組むことで、「伝えたい」という思いから、記事に書かれている情報を児童が進んで読み取ろうとすることが予想される。

指導について

２年生

・話をつなぐ「受け止め」「質問」「復唱して確かめる。」などの活動を意識させ、４年生の話す内容について、どのように聞けばよいかを考えさせたい。

・４年生が伝えてくれる事柄をしっかりと聞き、話の中心についてしっかりと感想を持ち、グループの中で伝え合うことができるようにさせたい。

４年生

・考えた紹介文を友だちと読み合う活動を通して、相手が内容に興味が持てるか、選んだ言葉は相手にとって分かりやすいかを考えさせたい。

・伝えた内容をもとに２年生が述べた感想を一緒にスクラップにまとめる活動を通して、内容がどのように伝わったかをとらえさせて、自己評価につなげたい。

単元指導計画

（４年生　全４時間）（２年生　全１時間）

時	主な学習活動	指導上の留意点
1	・学習の見通しをもち、学習計画を立てる。 ・冬に関する記事を読み、紹介したい記事を選ぶ。	○自分たちが選んだ記事を２年生に紹介する活動について知らせる。 ○複数の記事を読んでから記事を選ぶように声をかけ、様々な内容にふれさせる。

2	・選んだ記事の内容をとらえる。 ・記事を紹介するために話の構成を考える。	○見出しが記事の主旨に関係することや要約になっていることを思い出させる。 ○話の中心が伝わるように、伝える相手を意識して文を書くようにさせる。 ・伝わりにくい部分は言葉を言いかえさせたり、文の長さを工夫させたりするために、班内で文を読みアドバイスし合う活動を取り入れる。 ・編集しやすいように、ロイロノートを使用する。
3	・記事の紹介を班で聞き合う。	抑揚・強弱・間 ○班に分かれ、聞き合いをさせることによって伝わりやすい話し方を意識させる。
4（本時）	2年生 記事の紹介を聞き、感想を伝え合う。 4年生 記事の内容を紹介して、感想を伝え合う。 2・4年生 感想をスクラップにまとめる。	○相手が伝えたいことを落とさず聞くよう指導する。 ○ロイロノートを用いて、選んだ新聞記事の紹介をさせる。 ○スクラップにまとめる活動を通して、振り返りをする。

〈委員会活動での取り組み〉

児童会で、2024年1月に起きた能登半島沖地震の募金活動を行った。募金を全校生に呼びかける際、被災地の様子を伝えるために新聞やウェブ上の記事を活用した。児童会で使用している部屋に新聞を置き、それを読むなどして呼びかけの文を作成した。

建物やインフラの被害の様子と共に、被災者の方がどのような苦難の中におられるのかを、記事から読み取った。

児童が作成したよびかけ文

1月1日に起こった能登半島地震から２週間以上が経ちました。今も、水や電気などが通っていない地域もあり、2万人以上の方々が厳しい寒さの中大変な思いをされています。
普段私達が当たり前のように感じている暖かく満足な食事をとることやお風呂に入ることもできず、ゆっくりと休むこともできていません。
小・中•高校などでも休校が続き、学校に通えていない子供が沢山います。

能登半島地震から約一ヶ月が経ちました。
いまでもまだ多くの人が行方不明になっています。
自衛隊や消防隊の人たちも危険な状況の中懸命に救助活動にあたっています。
一人でも多く早く見つかるように毎日のお祈りを大切にしましょう。
三学期はもう一人の友達運動の募金と一緒に能登半島地震の募金をします。
不安や寒さの中、厳しい生活をしている被災地の方々へ心を寄せて私たちの想いが届くようにしましょう。

ただ、募金を呼びかけるだけでなく、児童は自分と同じ年頃の子どもたちがどのような生活をしているのか、厳しい寒さの中被災者の方は健康を保てているのかなど、様々な情報を新聞から読み取り他人ごとではないという思いで全校生に訴えかけていた。

「2023 年度兵庫県 NIE 実践発表会」チラシと実施内容のグラフィック

（次ページグラフィックは井上幸史・日本新聞協会 NIE アドバイザー 姫路市立城北小学校教頭作成）

2023 年度 兵庫県 NIE(教育に新聞を)

実践発表会

目　的：新聞記事を使った授業実践発表を聞き、実践例について話し合い、研修・研鑽を深める。

日　時：2024 年２月８日（木）１３時３０分～１６時　（受付１３時）

会　場：神戸新聞本社　14 階　　神戸市中央区東川崎町１－５－７
JR 神戸線「神戸駅」から南へ徒歩約 6 分「高速神戸駅」から南へ徒歩約 10 分

プログラム

■ 開会挨拶　　竹内　弘明　兵庫県 NIE 推進協議会会長

■ 記者講演　　神戸新聞 NIX 推進部ｼﾆｱｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ　三好　正文
「授業が盛り上がる新聞記事の使い方」

■ 実践発表①　姫路市立豊富小中学校　川村　かおり　教諭
「情報活用能力の育成～新しい時代のＮＩＥを模索して～」

■ 実践発表②　尼崎市立南武庫之荘中学校　中嶋　勝　教諭
「新聞を使った授業を振り返って」

■ 実践発表③　兵庫県立西宮高等学校　三木　美穂　教諭
「新聞を活用したポスター作成の授業を通して」

■ 講　　評　　兵庫県教育委員会高校教育課指導主事
神戸市教育委員会教科指導課係長

［主　催］　兵庫県 NIE 推進協議会

［後　援］　兵庫県教育委員会　神戸市教育委員会　兵庫県立学校長協会
兵庫県中学校長会　兵庫県小学校長会　兵庫県私立中学高等学校連合会
朝日新聞社神戸総局　神戸新聞社　産経新聞社神戸総局　日本経済新聞社
毎日新聞社神戸支局　読売新聞社神戸総局　共同通信社神戸支局　時事通信社

＊お問い合わせ　兵庫県 NIE 推進協議会 Newspaper in Education(教育に新聞を)
〒650-8571 神戸市中央区東川崎町 1-5-7 神戸新聞社内
TEL:078-362-7054　FAX:078-362-7424　メール: hyogo-nie@kobe-np.co.jp

2024.2.8(木)

2023年度
兵庫県NIE 実践発表会
@神戸新聞本社

NIE

阪神・淡路当時を伝えた各新聞会社
ニュースとしての価値が高い新聞
情報伝達が多様化してる中ですが
教育での活用を進めましょう

兵庫県NIE推進協議会
会長 竹内弘明氏

(司会)
兵庫県NIE推進協
コーディネーター
吉田尚美氏

講演
『授業が盛り上がる新聞記事の使い方』
兵庫県NIE推進協議会事務局長
三好正文氏

本日の神戸新聞朝刊
能登半島沖の地震は
いくつ？
16!
18
それもか～
一覧性
細長性
見出しは究極の要約
文化の継承を
新聞
新聞は歳時記
米田先生教えて～
スリッパだけじゃなく食器なども
最後は「新聞スリッパ」を作ってみよう
ふきだしも考えてみて
2年生と4年生の交流
新聞を仲立ちに
いろんな先生から
新聞にのってる大きな数字をさがそう
主権者教育も柱に
5兆2千億円!
NIEノートへ
のってるよ～
福崎町のゆるキャラ、わかる？
本日のイチオシ記事を選ぼう
まわし読み新聞へ
イチオシから探究的な活動へ
選んだ記事で人を知るすごく魅力的です

実践報告

試行錯誤しながら
9紙をつなぐ
NIEを創り出す

①『情報活用能力の育成
～新しい時代のNIEを模索して～』
姫路市立豊富小中学校 川村かおり教諭

『情報をつくるとつかう』がコンセプト
新聞のある風景
とにかく「やってみよう」精神
自由に新聞に親しむ環境
メディアリテラシーの大切さ
8つの方法
『つかう』
本の福袋
図工
全校集会「文字さがし」…
五感をつかって書いたらいいよ
記者派遣
でも、文字数が…
『つくる』
新聞アプリ
学習や生活のまとめに
紙orデジタル
自分で選択
メディアの創り手として

②『新聞を活用した授業を振り返って』
尼崎市立南武庫之荘中学校
中嶋 勝教諭

大村はまさんの言葉、大切にしています
校内掲示
田中さんのかべ新聞も
新聞を読めば人生が変わる
コラム写しから
丁寧に写す
見出しを考える
新聞投書
6人班で推薦
投書
掲示
作文がかけない子もスラスラと
意見・感想を書く
論点を調べる
4人班で交流
長井先生
新聞記事とSDGsのかかわり発見
新聞ノート
ICT便利!
～四紙も使って～
～記者派遣も～
総合SDGs新聞

③『新聞を活用したポスター作成の授業を通して』
兵庫県立西宮高等学校 三木美穂教諭

紙のよさ、デジタルのよさを大切にしたい

キャリア教育
3年次 課題研究
2年次 課題研究
1年次 課題研究
NIE
記者派遣
「インタビューして記事を書こう」
身近な情報源としての新聞活用
①探し出す目
②要旨をまとめる
③考えを述べる
ワールドカフェも導入
学校からのつながり実感
新聞ポスターテーマ決定
企業講演
各自2部の新聞
ポスター作成
発表
新聞おもしろい
発表もワールドカフェで

講評

兵庫県教育委員会
高校教育課
指導主事 滝口梓氏

どの実践もすばらしい
講演…たくさんの事例
豊富小中…かべ新聞の進化
南武庫之荘中…実証で伝わる
西宮高…総合のサイクル
小中高のつながり

神戸市教育委員会
教科指導課
係長 古米弘明氏

どの学校も身近なところに新聞が
メディアリテラシーの大切さ
新聞→毎日、生の心が
小中高の連携
学校に応じて
「心の成長」の大切さ

Nouve

Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2023 年度
『兵庫県ＮＩＥ実践報告書』
－2024 年５月発行－
兵庫県ＮＩＥ推進協議会　編
〒650－8571
神戸市中央区東川崎町１－５－７
神戸新聞社内
電話 078(362)7054　ファクス 078(362)7424
E-mail　hyogo-nie@kobe-np.co.jp
HP　http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/

「教育に新聞を」実践　中学校編

◇新聞を活用し『言語能力・情報活用能力』の育成を図る　（尼崎市立南武庫之荘中学校）

◇新聞の良さを伝える　（神戸市立丸山中学校 西野分校）

◇新聞制作を通して、「伝える力」の育成を図る　（加古川市立加古川中学校）

◇自分事として捉え行動できる生徒の育成　（南あわじ市・洲本市組合立広田中学校）

◇世界や日本の現状を把握し「これから」を考える　（神戸市立高倉中学校）

◇新聞を活用した自己表現力の育成　（明石市立高丘中学校）

◇NIE ノートを通して、主権者としてのまちづくり
～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～　（西宮市立浜脇中学校）

「教育に新聞を」実践　小・中学校編

◇情報活用能力の育成～新しい時代の NIE を模索して～　（姫路市立豊富小中学校）

「教育に新聞を」実践　小学校編

◇社会的事象に対する見方・考え方を広め
主体的に考え判断する力と伝える力の育成をはかる　（神戸市立白川小学校）

◇新聞に慣れ親しむ子供たちの育成
～６年生の年間カリキュラムと NIE～　（神戸市立横尾小学校）

◇新聞を楽しく読もう　（姫路市立大塩小学校）

◇新聞を身近に感じ、学習とのつながりを大切にする　（神戸市立鶴甲小学校）

◇新聞活用による「書く力」の向上と心豊かな児童の育成　（姫路市立網干西小学校）

兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校

◇新聞を開いてみよう ～社会とつながる NIE～　（愛徳学園小学校）